大正六年九月十四日　第三種郵便物認可　・　昭和七年七月二十七日　印刷納本・昭和七年八月一日發行　（毎月一回一日發行）

社會と建築

昭和七年八月一日　第十五輯　第八號

郷土建築

8

日本建築協會

日本趣味を基調とせる

新刊

最近建築懸賞圖集

本書は我國で昭和五年から本年にかけて募集された東京博物館を始め四大建築懸賞當選圖案及募集規定を網羅編纂したものである。これ等の當選圖案はことわるまでもなく我國に於て實に一大エポツクを創り孰れも日本趣味を基調とした所にその特長があらう。學生諸君、建築家及一般同好諸氏の座右に是非一本を薦む。

東京帝室博物館
京都美術館
日本生命館
軍人會館

建築設計懸賞募集規程
建築設計懸賞當選者名
建築設計懸賞當選圖案

四六倍版　上質全アート　定價 70錢
裝幀美麗　頁數 60頁　送料 10錢

社團法人 日本建築協會

大阪、北區、朝日ビル
振替口座大阪39975

賣捌 丸善本支店
柳々堂書店

創立滿十五年記念事業計畫に就いて

我日本建築協會は大方各位の熱誠なる御贊助と懇切なる御後援とに依り本會當初の目的達成に邁進し苟も建築に關聯する事項は理論と實際に依據して汎くその實現と指導とに腐り着々功を收め、常に建築界の先驅となりて社會公益のために活躍し今や我國に於ける最も有力なる團體の一として成長し恰も本年を以て創立滿十五年を迎へるに到りたるは洵に慶福の至りで深く感謝する次第であります。

顧れば本會は大正六年春三月關西建築協會と名づけて創立せられ、大正八年一月日本建築協會と改稱し逐年隆盛となり、大正十五年十月組織を社團法人に更めいよいよその基礎を堅實にし、會員の如きも內地は勿論遠く鮮、滿、臺、支那等に亘りその數今や 1300 名を越ゆるの大を致せり。この間月刊雜誌「建築と社會」を發行し號を重ぬること 177 或は建築關係圖書を出版したるもの十數種に及ぶ、又一面各種の委員會を常設して都市計畫、法規、教化、資料、災害强度、設備、住宅等に關し不斷の調査研究を遂げ、その結果を天下に公表し攻究に供し、或は建築に關する重要なる意見を要路に建白し、或は嘗て我國に於ける嚆矢とも云ふべき住宅改造博覽會を催して著しき成果を擧げ、或は時に展覽會を開催して建築の知識普及を計りたる等建築界の進步發達に貢したる事蹟は蓋し尠少ならざるものあるを自信するものであります。

古來男子十五歲に達すればこれを一轉機として元服し祝福するの習あり。本會は今元服の好歲を迎ふ、即ちこれを記念すると共に更に一段と飛躍暢達すべきの時に到つた。茲に於て本會は過去を追想し將來に備ふるため佳き年の今秋を卜して大に意義ある記念事業並に祝賀大會を催し、以て從來常に爲さんと志しつゝもこれを達成し得ざりし事項その他を綜合し、この好機を劃してこれが淸算をなすと同時に今後層一層の進展を期し斯界のためますます貢獻する所あらんとする次第であります。

今下に滿十五年記念事業並に祝賀大會計畫の大綱を揭げて大方の熱心なる翼力御協贊を乞はんとするものであります。

1. 住宅博覽會の開催
2. 建築展覽會の開催
3. 住宅設計圖案の懸賞募集
4. 建築通俗大講演會の開催
5. 建築巡回講演會の開催
6. 主要建築物及工場の見學旅行
7. 「建築と社會」記念特輯號の發行
8. 圖書の出版
9. 建築會館建設の企畫
10. 記念祝賀大會の開催

追て住宅博覽會は今秋と來春との二季に分つて數ケ所に開催すべき豫定でありますが、孰れも住宅の改善改良を主眼とし各住宅設計圖案の懸賞募集に依りその優秀なる案を實地に建設する意嚮であります。

昭和七年八月

社團法人 **日本建築協會**

會　　告

住宅設計圖案懸賞募集

本會は目下下記の通創立十五年記念事業として數種の住宅設計圖案を募集中であります。大方諸君の盛んなる應募を希望します。尙同募集規程詳細は「建築と社會」7月號をご覽になるか或は一種目につき郵券貳錢宛封入申込下るど募集規程を送ります。

（大阪市北區朝日ビル405　　日本建築協會住宅懸賞係宛）

1　綠ケ丘保健住宅設計圖案懸賞募集　（〆切8月15日正午）

2　大美野田園都市住宅設計圖案懸賞募集　（〆切8月15日正午）

3　實際に建つる住宅設計圖案懸賞募集　（〆切8月末日正午）

登録 OHNO SHUTTER PATENTE 商標

日米特許一二個・實用新案登錄四六個併用

大野式防火捲上ケ戸

〔特許大野式シヤッター〕

主要製品

大野式シヤッター

大野式ルーブルシヤッター

大野式工場用軸承

大野式轉子入軸筐

大野式轉子入戸車

大野式廻轉軸抵抗測定機

各種防火扉

日英米佛特許三一個・實用新案五九個併用

特許不二サッシ

受托營業

合資會社 大野製作所

東京市芝區三田四國町二番地・電話三田(45)三七三七 三七三八

取付出張員駐所・大阪市北区上福島中二・電話福島(45)五八八

建築と社會

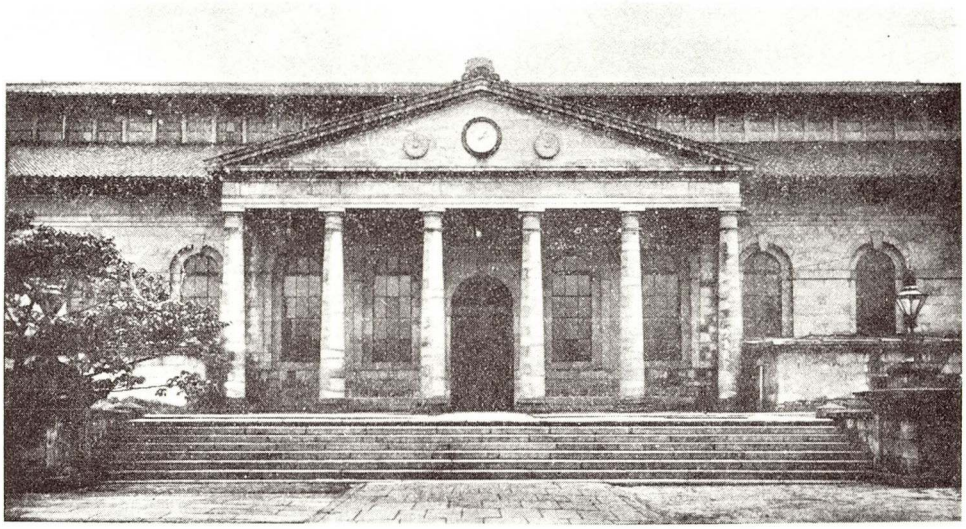
第十五輯第八號　昭和七年八月發行

郷土建築

目　次

造幣局……（1）
泉布觀……（11）
住友舊本邸洋館……（15）
神戸元居留地の一洋館……（19）
鴻池瓦屋橋別邸……（21）
助松本陣……教化委員會（27）
比叡山延暦寺……藤原義一（37）
桃山時代の城郭に就いて……大類伸（48）
大黒屋菓子舖……（56）

國際新建築集……（25）
談話室……（57）
會報……（60）



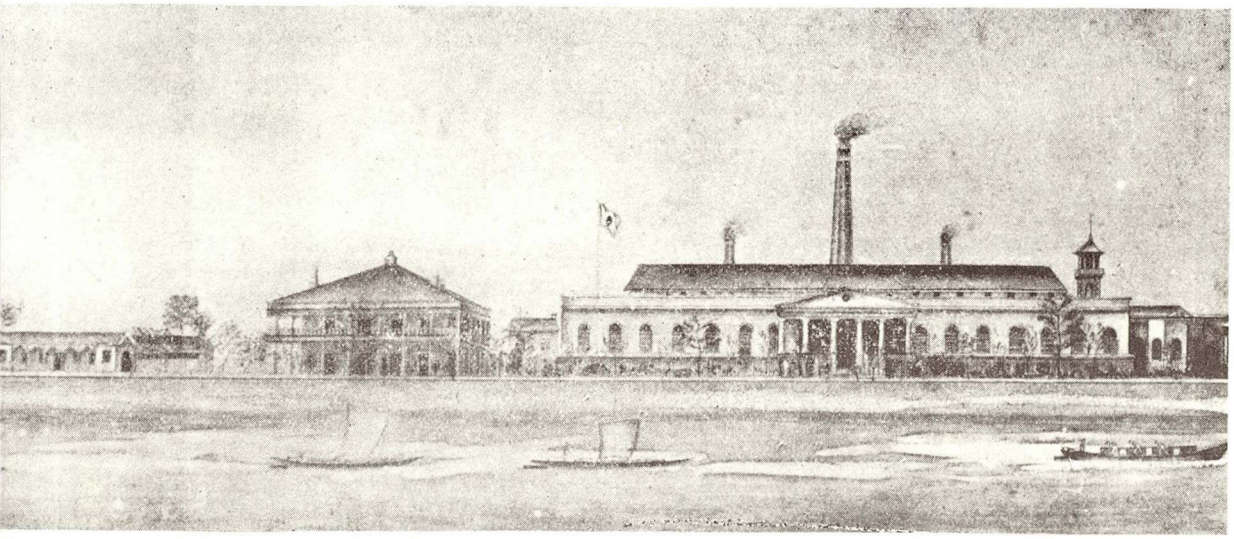
造幣局鑄造場正面

造幣局に就いて

中村角之助

造幣局が明治初年我が大阪工業界の先導者たるの地位にあり、只に貨幣の製造のみならず、或は瓦斯を製造して構内に瓦斯燈を點し、或は硫酸、曹達等の製造を行ひ外國にすら輸出せしめ、他方電信設備、馬車鐵道の敷設、汽船の運航等諸種の點に於て當時歐米文明輸入者の隨一たり、世人は此等の設備完全なる工場を仰ぎて驚異の眼を瞠りたるはこゝに說くを要せず。單に寫眞說明に先だち造幣局設立に至れる由來に付當局の沿革誌の一部を抜萃せん。曰く

徳川氏の末葉に於ける貨幣の紊亂は記述に堪へず。其の金貨の如き極めて惡質にして名は則ち金貨なれども實は銀に一滴の金を加味せるが如きものにして甚だしきは千分中僅かに百二十の金分あるに過ぎざるものあり。且贋造は洋の內外を問はず盛行せし爲め貨幣の受授不安にして正當なる商業を大に阻碍せり。維新に至りても亦前途に改善の光明を認めず論者頻に貨幣制度の改良は實に國民の商業に必要にして其繁榮に缺く可らざるを論じ、外國公使等も亦之を以て政府に迫りしかば朝議遂に帝國造幣局を設立するに決せり。當時東京は未だ公然帝都とならず寧ろ大阪こそ新政府の所在地とならんとするの形勢あるの時なりき。此より先慶應四戊辰年閏四月二十一日(此年九月八日明治元年と改元)會計官中に



日本帝國大阪造幣局創立當時の全景

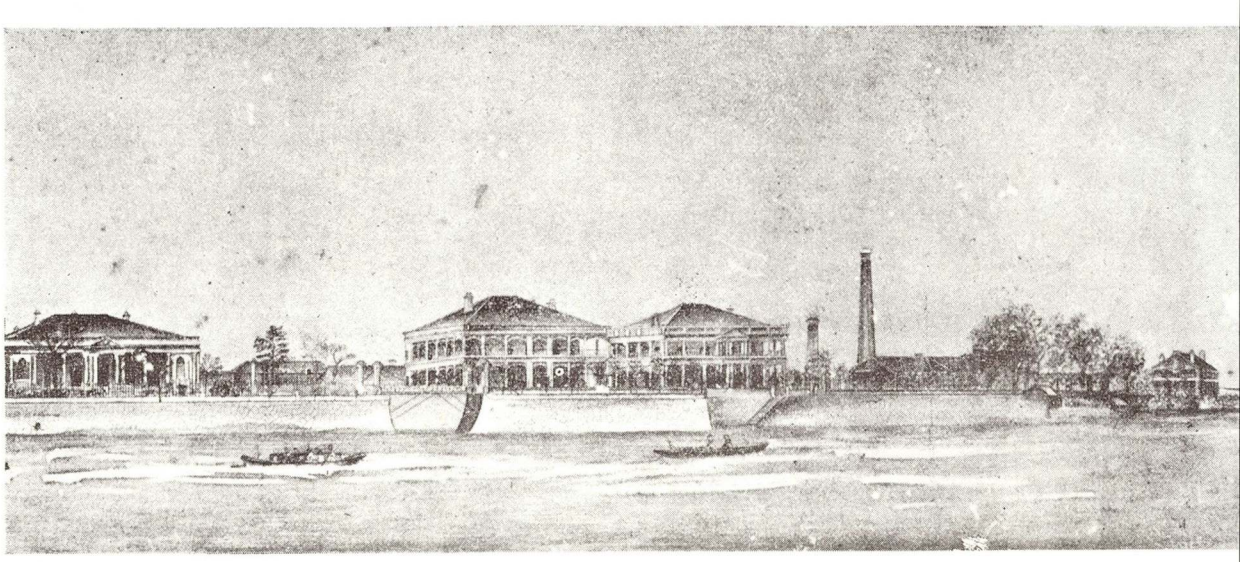
（明治六年當時の伊國人マンチニ畫）

創立當時構内の土地は川崎渡しより上流源八渡し迄長さ十町餘を占め本圖は眼鏡橋より上流を畫きしものにて順次建物名稱を擧ぐ。左端眼鏡橋詰は見張所、南下等洋人館、鑄造場、首長キンドル詰所、後方塔屋は半鐘樓、造幣寮（本局）釣橋、上等洋人館、泉布觀、瓦斯製造所、精製分析所、硫酸製造所、曹達製造所等又眼鏡橋より下流三町に渉る間に守衛隊屯所等あり、且つ上圖建物前一圓に樹立せる尖頭に大の字形を付したる鐵柵は大阪府判事五代才助が城内に一大動物園を設けむが爲め外國に注文せしも不用に歸したるを本局に讓受けて利用せるものなり。

貨幣司を置き長岡右京を知事として久世治作（喜弘）を判事とし大阪長堀住友吉左衛門上地に局を設けて二分及一分銀を鑄造せしめ專ら軍資に充てつゝありしが是に於て久世治作、豐原百太郎等をして造幣局設立の取調に當らしむ。此の時香港の造幣局は創立後期年ならずして廢局となりし際なりしかば參與會計官判事三岡八郎（後に由利公正と改名）命を奉じ外國事務局判事五代才助（友厚）寺島陶藏（宗則）に托し香港にある造幣器械を價額六萬兩にて購入せむことを英商ガラバと約定せしめ横濱裁判所用掛勤上野敬輔（景範）を同地に派遣して器械及建築材料を大阪に移さしめしが十月下旬に至りて到着せり。

造幣局を經營すべき土地に就ては難波、中之島等の諸地を檢したれども容易に決せず會々上野敬輔香港より書を寄せて最も水利の便ある所を選ぶべしと勸告するあり。因て淀川の水流が初めて大阪市街を洗はんとする所にありし川崎の舊幕府御破損奉行役所材木置場跡を以て其の場とするに決し營繕司請負清水磯吉に命じて建築に從事せしめ又天保山沖合より器械を陸揚し十一月中旬地上に横たはれる汽罐の上より餅搗をなし且砂持の儀式を以て工を起せり。

建築の設計監督に就てはガラバの推薦に依り英人ウオートルスを雇聘して之に一任せり然るに明治二年十一月四日夜建築所の鍛冶場より出火し器械及材料多く灰燼となりしかば

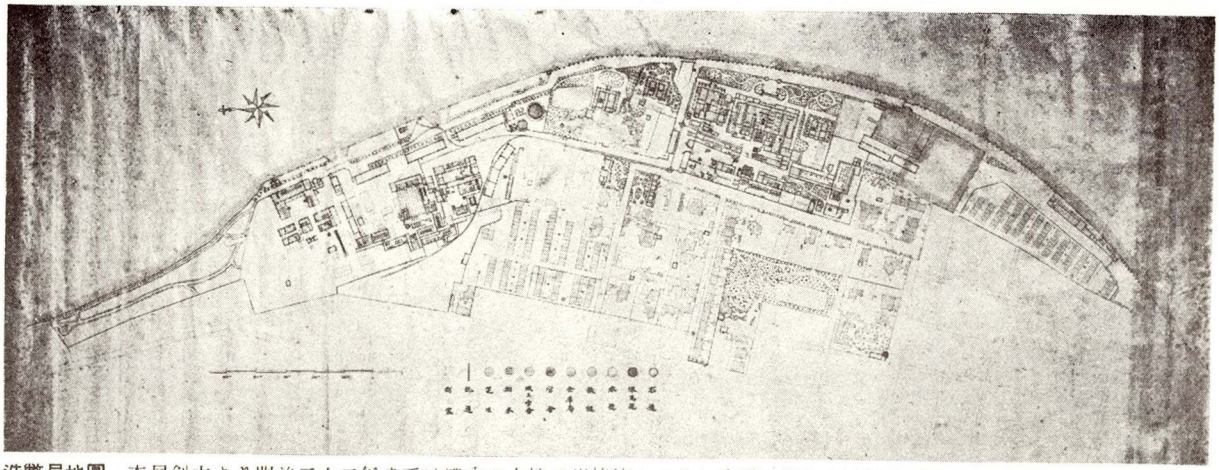


更に其の器械を英國に注文せり十二月英國より輸送中の鐵柱四十八本香港沖に難破沈沒すとの報告あり、因てウオートルスを香港に派して舊造幣局の鐵柱を購入せしめ明治三年三月上旬大阪に回漕し工事漸く進むを得たり。

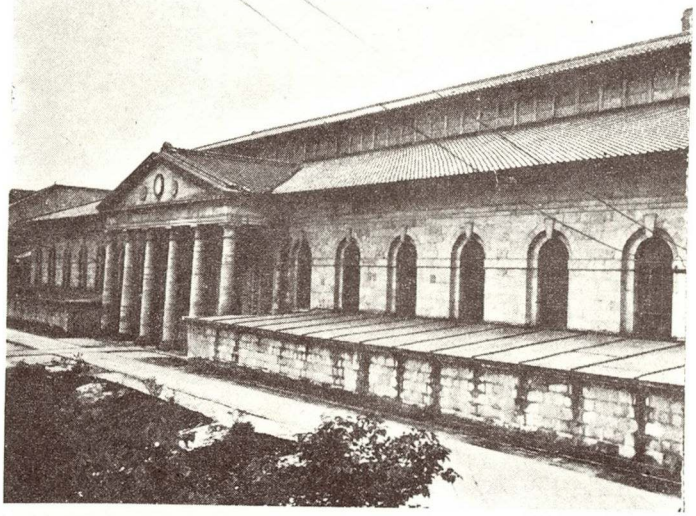
ウオートルス時に年齢三十七八歳、資性溫良にして大建築に就て嘗て經驗あり工事中材料蒐集の困難あり、加之言語不通の障礙ありしに拘らず忍耐事に當りて能く其の職責を盡し終に三年十一月に至り巍然たる大厦の竣功を告ぐるに至れり。

是より先、大納言岩倉具視使節として外國に派遣せられんとす其の出發以前に於て是非とも新式貨幣を製出せしむるの必要あり、數ケ月間は吏員をして營繕司の役所に晝夜宿泊勤務せしめ午前四時擊析を以て始業の相圖とし夜間は篝火を焚きて工事を進行せしめ、井上造幣頭(馨)は夜中と雖も場內を巡視して監督頗る勉めたり、當時煉瓦工業未だ興らず、本局建築用の煉瓦は泉州堺東湊に於て新に爐を築きて製造せしめたるもの及遠く廣島に於て製造せしめたるものを用ひたり、又築造に供用したる青石は播州産にして軟質に屬し加工甚だしくは難からざれども大阪の石匠のみにては人員不足せるを以て一般市中の他の工事に停止を命じて石工を悉く本局に集來せしめ猶遠く岐阜地方よりも盛に招集して竣功を急ぎたり、本局落成迄の諸費用を百萬兩と豫定せしも結局九十五萬五千二百兩餘の上に出でざりき。

請負頭清水磯吉は營繕司役所を拜借して工事々務所を置けり、磯吉は越前の人なり仁俠にして能く部下を使役し三岡會計官判事の知遇を受けその勢力同業間に冠たり、凡そ職人間の紛議論爭皆磯吉を俟つて解決せりと云ふ、然るに磯吉不都合の行爲ありしかば、明治二年正月御用初めに參與大隈八太郎(重信)出張ありて突然其の請負を止め二月に至りて初めて營繕司直營として工事を再開せしめ以て竣功に至れり。



造幣局地圖　本局創立より明治二十二年までは構内の土地は川崎渡しより上流源八渡し迄淀川右岸長さ十町餘敷地 54,055坪餘あり、同年泉布觀以北の土地を同觀と共に宮内省の所管に移したり、又都市計畫道路たる天滿、生玉線構内を貫通し現在にては本局構内土地は28,351坪餘となる。馬車鐵道、明治四年四月より堂島船町濱先より造幣寮まで馬車鐵道を敷設し同年九月より馬車初めて往復するを見たり、且つ英國に汽車一具を注文し大阪川口より諸物貨の運搬を計畫し又寮内に工務省の電信局を設置し川口電信局との公私電報通信を開始せり。



鑄造塲側面

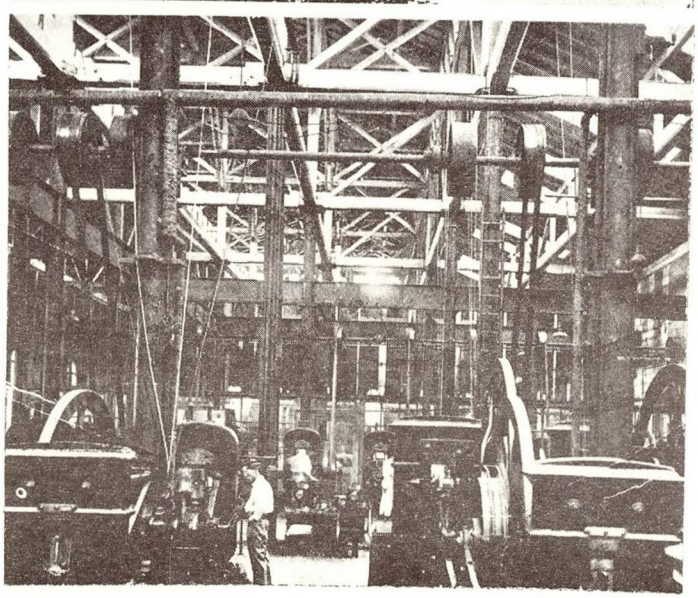
明治二年三月九日起工、同四年二月落成、昭和二年四月取毀

本館は青龍山石造、建坪806坪94、入費180,633圓65、正面壹中央大時計は外徑 4尺2 器械は分銅式、造幣寮工作所に於て中技監大野規周の製作せしものなり。

御紋章は直徑2尺5青龍山石に表菊浮彫をなし大時計の左右に按配せり。屋根、創立當時は全景圖の通り三連續屋根瓦葺軒上飾壁付なりしが其の後屋内換氣を良好ならしむる爲め越屋根回轉窓を取設け軒上飾壁を取除き寫眞の通り屋根總體日本瓦葺となす。創立當時の本館内に試驗分析局、分析局、鎔金局、鎔銀局、伸金局、秤量局、燒生局、極印局、彫刻所機關室等配置されしが其後屢々局所の改稱廢合あり且諸機械の增設に伴ひ之を伸延塲及極印場の二場となす。正面大入口は嘗て明治大帝御臨幸の砌屢々玉歩を運ばせ給ひし光榮ある遺跡にして永久に記念すべく改築に際し其直下を OP+6 尺迄掘下げ地鎭祭鎭物を安置することゝせり。

如斯由緒ありしかも創立以來製造貨幣額實に十六億七千五百萬圓餘の多きに達したる日本最古の石造本館及煙突も永年の使用に堪へず遂に昭和二年四月より取毀つことゝなり其の跡に工費百餘萬圓を以て現在の鐵骨鐵筋混凝土三階建工塲を建築す。

車寄左右側窓に沿ひて低き突出建物は金庫にして後年增設せしものなり。

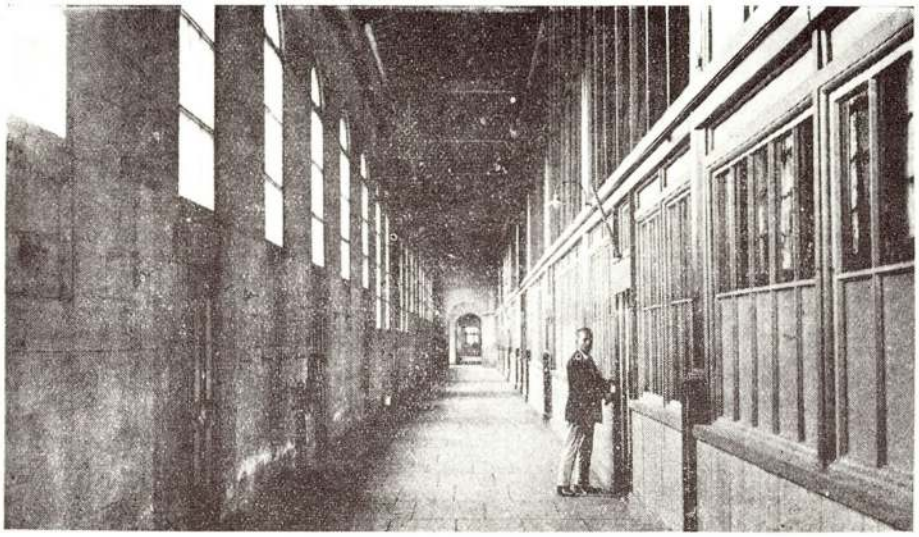


鑄造場斷面

本工塲は圓形に打拔れたるものに貨幣模樣を壓印する作業を行ふ所にして壓印機一臺一分間 110 枚の割合に貨幣莫葉を壓印するものなり。

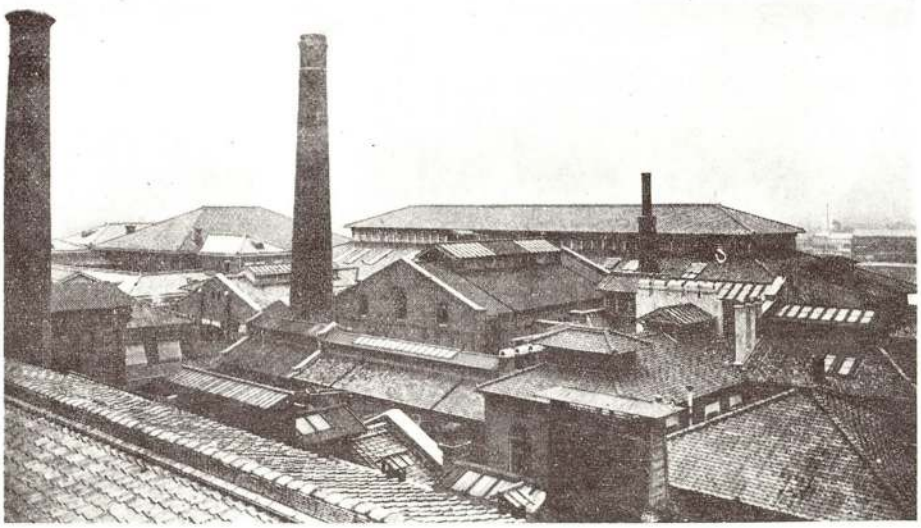
鑄造場廊下

廊下左側窓下の金庫にして右側間仕切内は貨幣製造工場にして公衆観覧者は此硝子窓より作業の見學せしものなり。（現在なし）



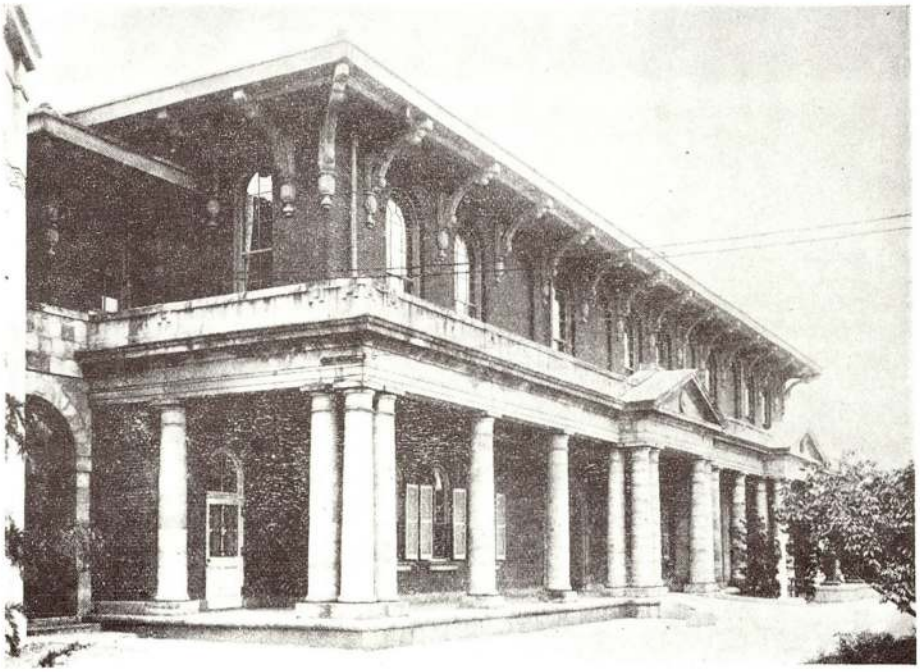
鑄造場背面

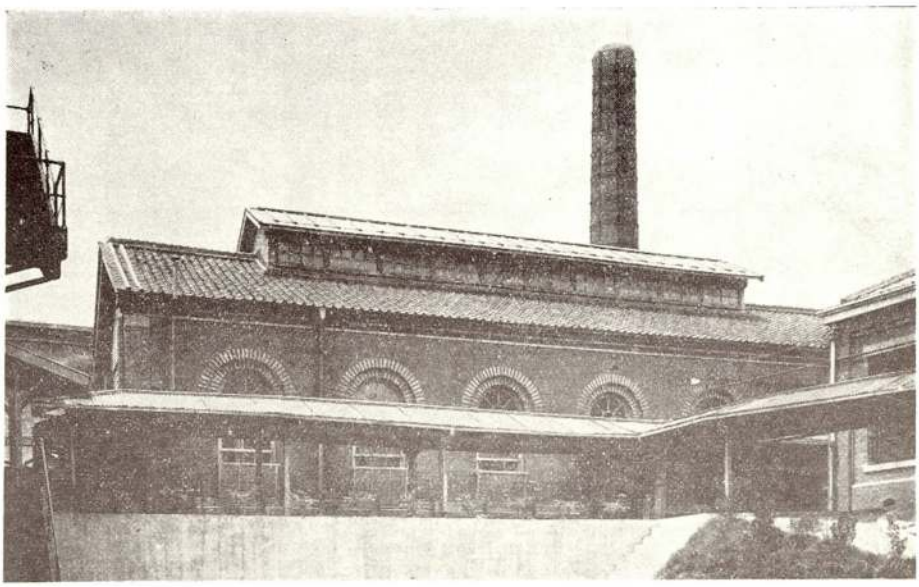
寫眞上部越屋根建物は鑄造場を背面より望みたるものにして其の左端方形屋根は本局、中央の煙突は創業當時のものにして高さ110尺口徑4尺5、煉瓦造一基は明治二十四年十月二十八日濃美大地震の際頭より27尺下部即寫眞色違の處より約三寸其の儘震出せしものを取除き積直し在來の青龍山笠石を据付けたり。



造幣局(本局)

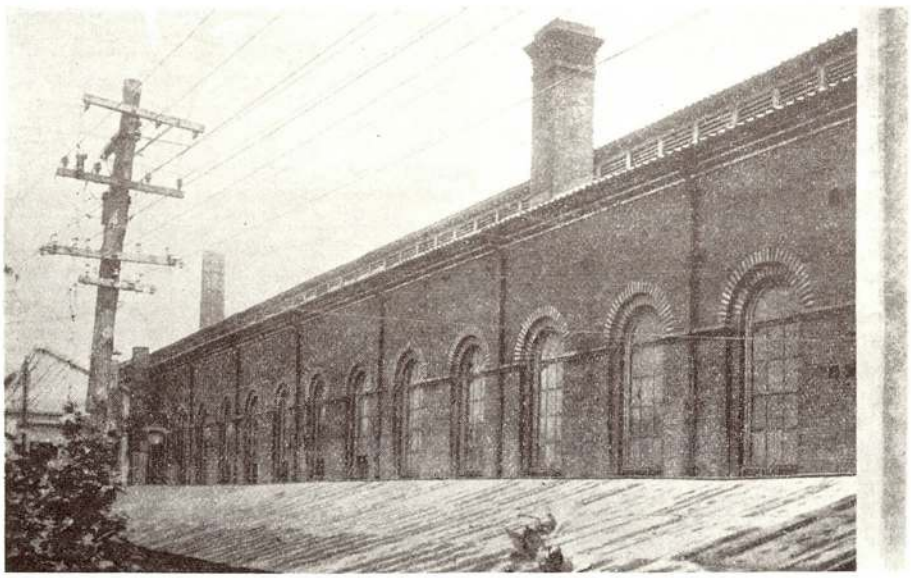
創立當時造幣寮と稱ふ、建坪173坪39、煉瓦造平家建、廻廊、車寄等青龍山石を以て建設、内部を地金、會計庶務等諸課に配置す。然るに基礎鞏固ならず年月を經るに從ひ建物は自然に傾斜し壁體龜裂を生じ内の危險言ふべからざるを以て明治十六年二階建に改築し更に大正十年既設に倣ひ右へ增築し昇降口上部には金箔御紋章を附し廳舍專用とし舊昇降口は貨幣運搬に便ならしむる爲め斜面となし金庫前廣場に至る、二階は右端より貴賓室、應接室、會議室及局長室となし左端白色混凝土二階建は元石造平家建首長キンドル詰所なりしを改築し作業部長室となす





鐚工更衣室

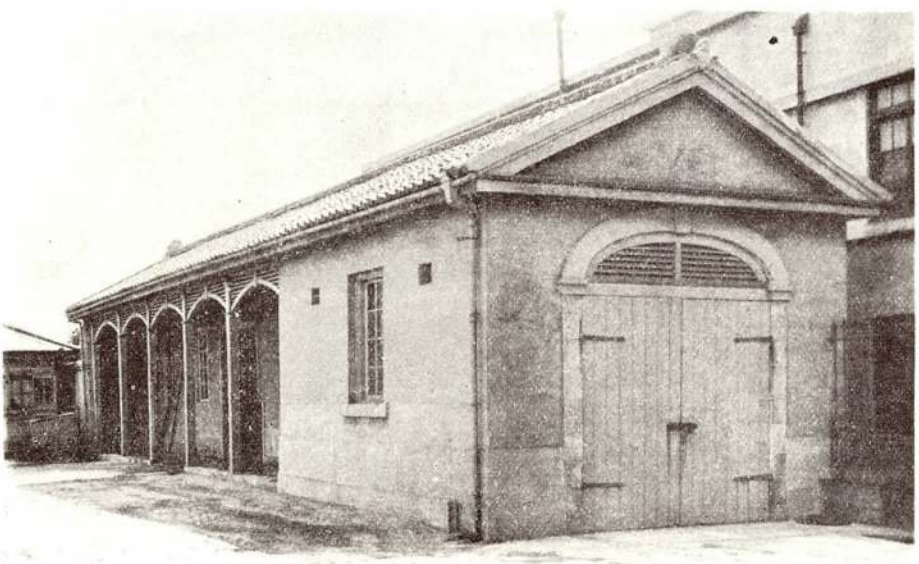
明治四年二月新築、製作所（機械修繕工場）として使用し來りし處事業遂行に際し屢々用途を變更せしも大正十年、職工更衣室（男工用）として内部模様換を施し地階を私服置場とし一階に官服更衣室及浴場を設備し職工終業の際は入浴せしめ自然身體檢査を爲すことゝなる。



銅貨鑄造場背面

明治六年七月新築、本工場は煉瓦造平家建、一部地下室付、桁行77間餘、梁行 7間餘　寫眞鑄造工場背面手前の長き瓦葺屋根は即ち此工場なり）中央部に機關室を配置し、それに連絡して汽罐室突出す。其の屋上には幅5間5、長さ5間4、深さ3尺、英國製組立水槽を据付各所に給水す。

内部設備は反射爐、坩堝鎔解爐及諸機械を設備し、年々多額の銅貨を製造せしも大正七年我國の經濟界は長足の進歩を遂げ、補助貨の需要激增し、爲に將來益々當局の繁忙を加へむとするに至り、之が設備の擴張を必要とする情勢に迫られたるを以て、寫眞左端白色鐵骨鐵筋混凝土造及煉瓦造の鎔解工場を增築したり。

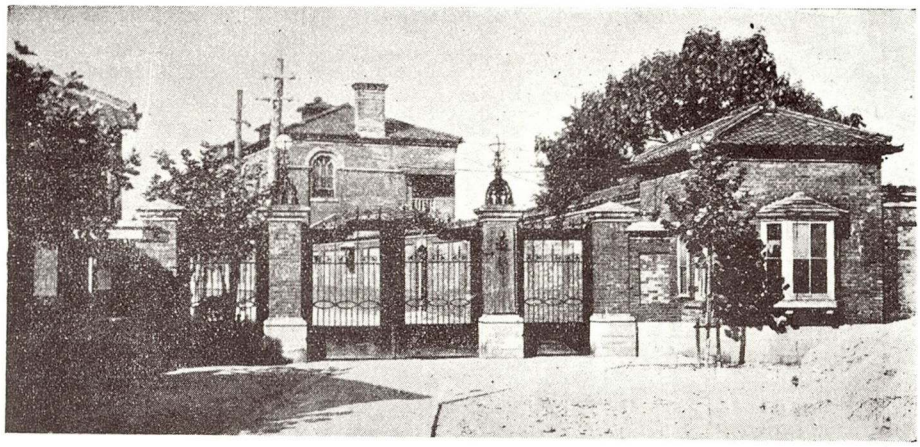


眼鏡橋見張所

明治四年二月新築、木造平家建、向つて右は蒸氣喞筒置場として明治二十年二月煉瓦造を增築す。明治晚年に於て木造の部分も外部木摺地モルタル塗仕上となして現在守警控所として使用す。

造幣局表門

天滿橋より上流川崎渡船場前道路より構内守衛隊屯所を望む。該門は昭和三年一月約二十三間手前現在の處に移築し名稱も南門とす。（天滿、蒲生線開通に付櫻宮橋詰に表門を新設す）

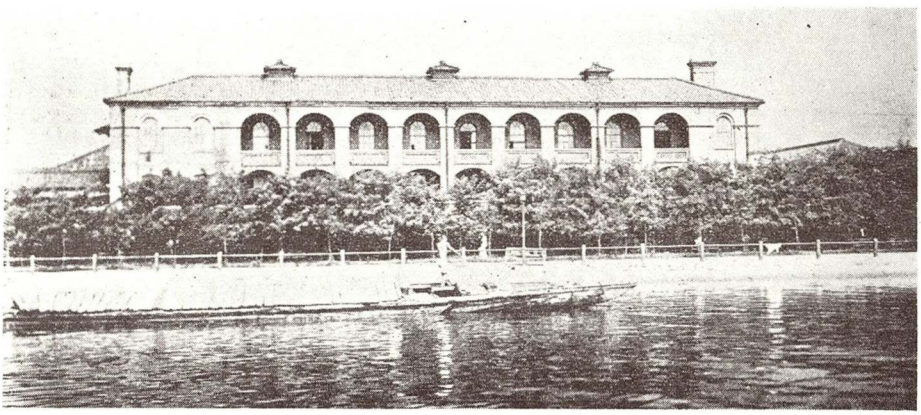


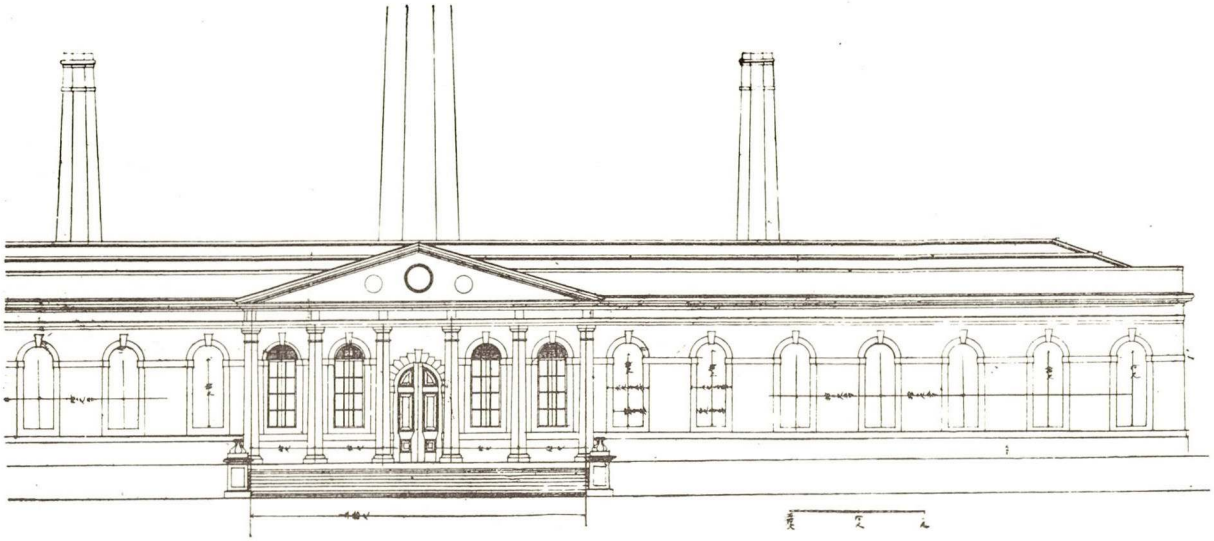
守衛隊屯所及同背面（下）

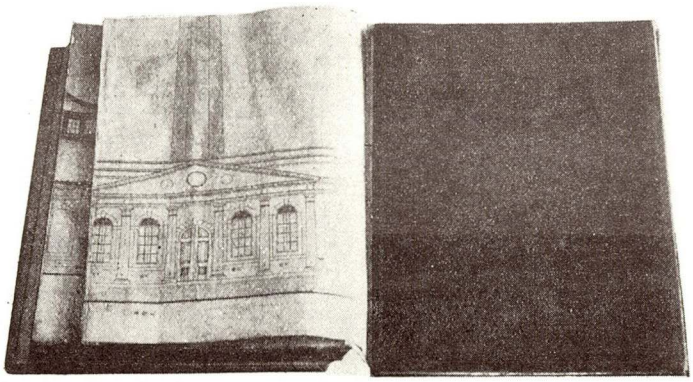
明治　年午八月起工、同四年未二月落成、附屬建物名稱、警備兵當直所、司令屯所、兵隊屯所、牢屋、ポンプ廠、賄所並風呂場、此建坪255坪86

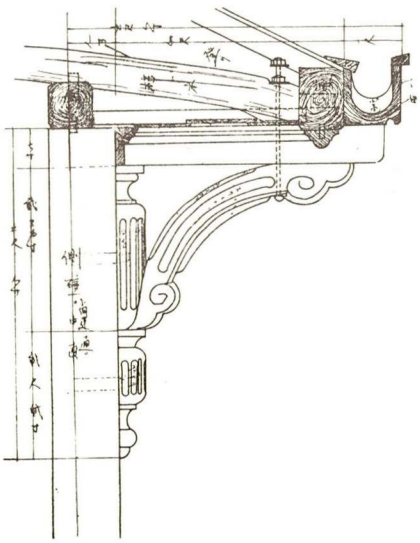
本館、煉瓦造二階建屋根瓦葺、附屬家總て平家建にして寫眞右端本館に續きて賄所あり。中央獨立家屋は便所、左端は風呂場、創立當時は歩兵一箇中隊屯營し要所々々の警備をなし居たりしも漸次人員を縮少し最後に一箇分隊を以て構内を巡視せしが遂に大正八年十月全廢す。明治三十七八年戰役從軍記章加工場に充て其後彫刻工場の分室となし又一部を職工合宿所に使用せしも相當年月を經たるため壁體所々に龜裂を生じ木部と雖も腐朽箇所不尠甚だ危險に付昭和二年三月取毀ちたり。







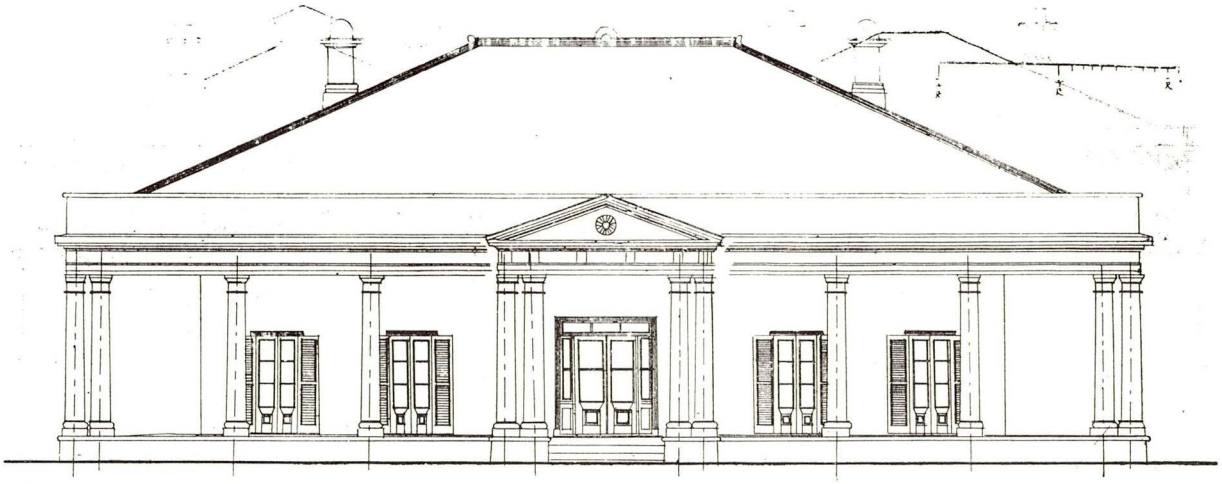


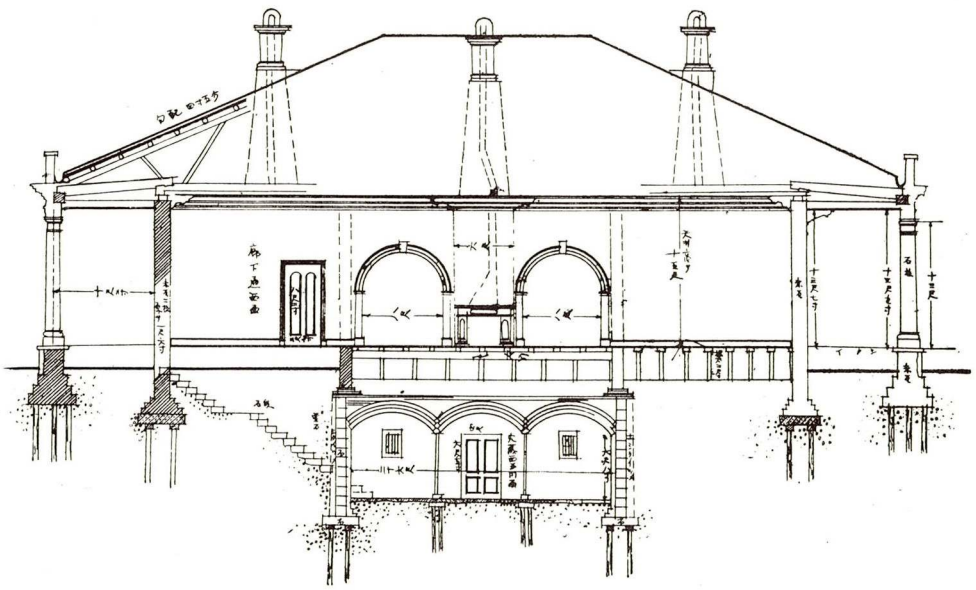


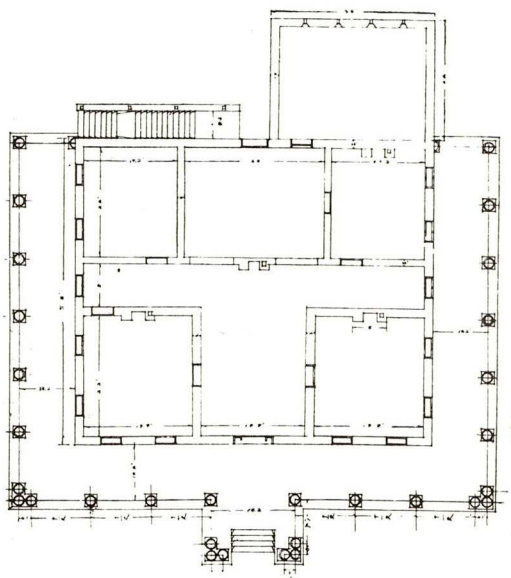
上　・鑄造場正面　中左・鑄造場總體出來形繪圖　下・本局正面
中右・本局再築東北西の軒持出の變面圖

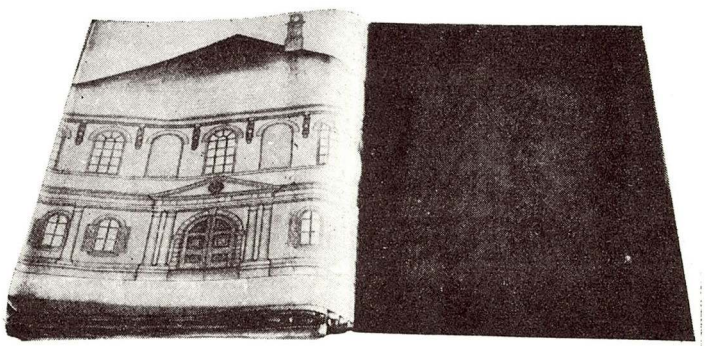


創建當時の造幣局繪圖

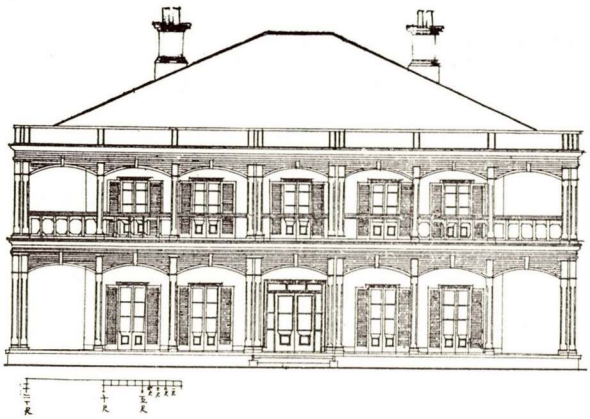




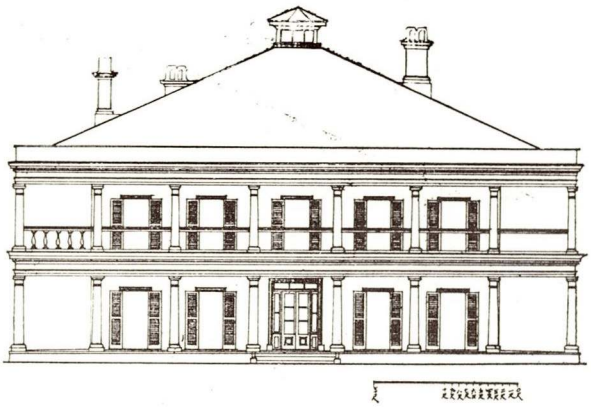




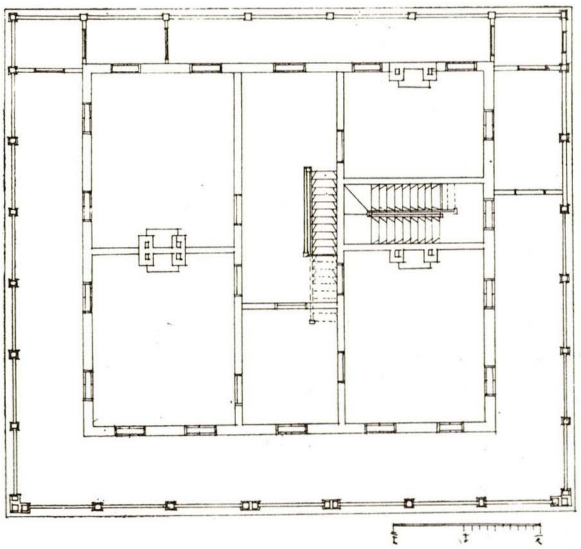
上　・造幣寮正面の圖
中　・同　仕様の圖
下左・造幣局寮の繪圖
下右・本局改築繪圖



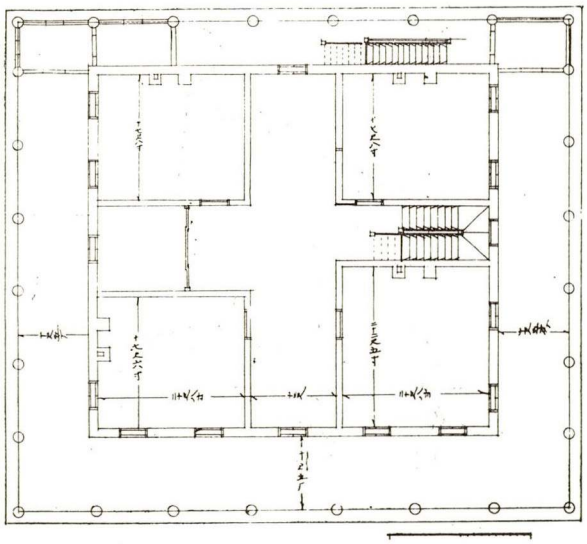
北異人館正面建地割



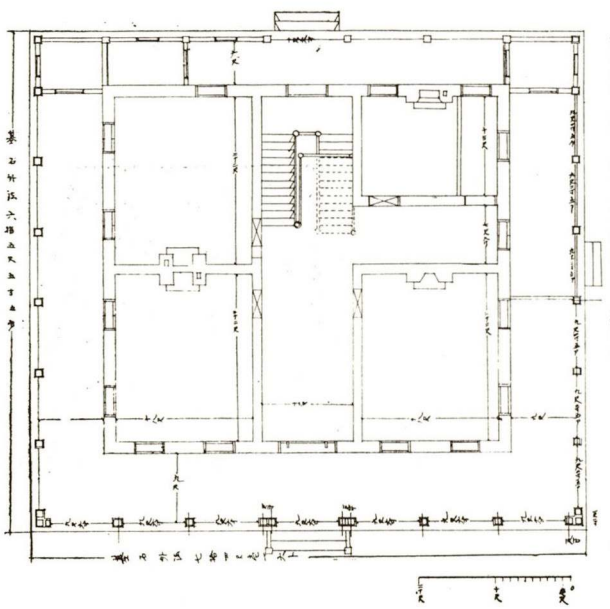
南異人館正面建地割



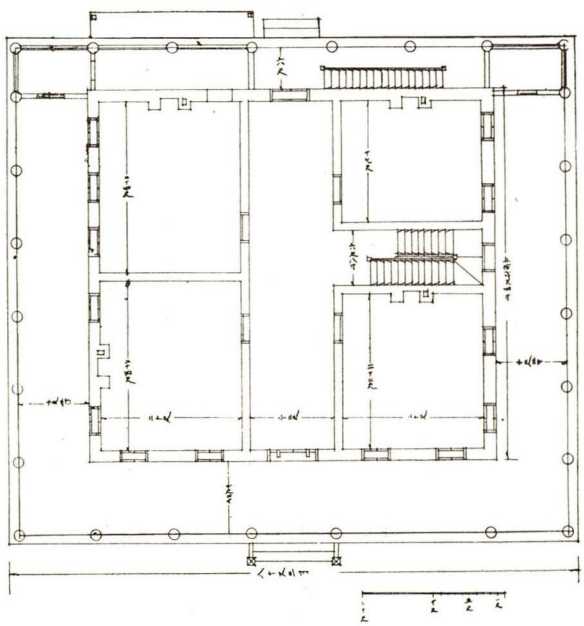
同上二階の圖



同上二階の圖

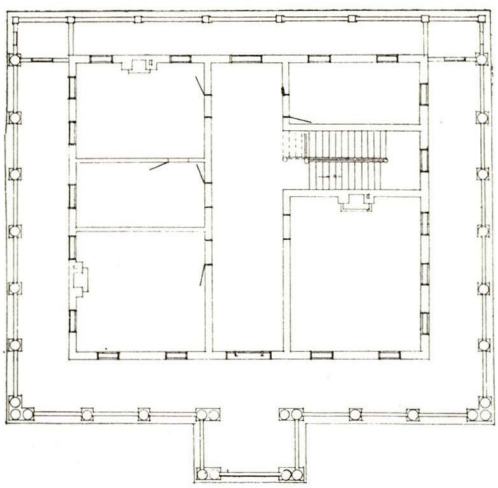


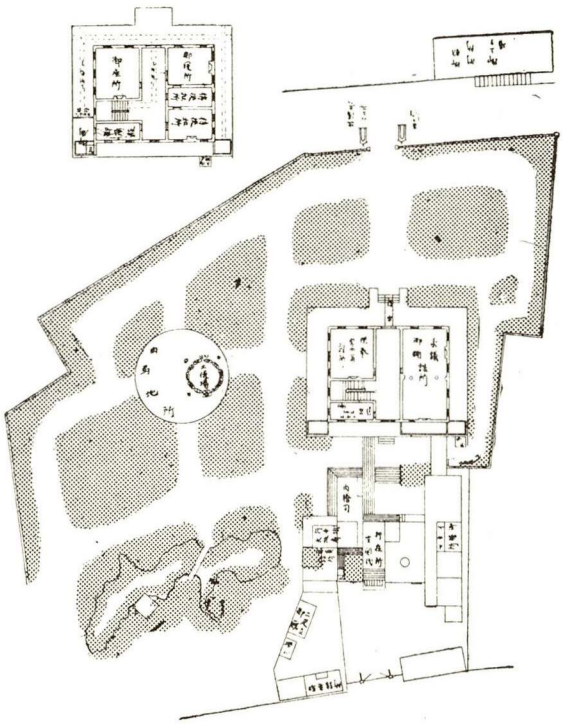
北異人館下の圖

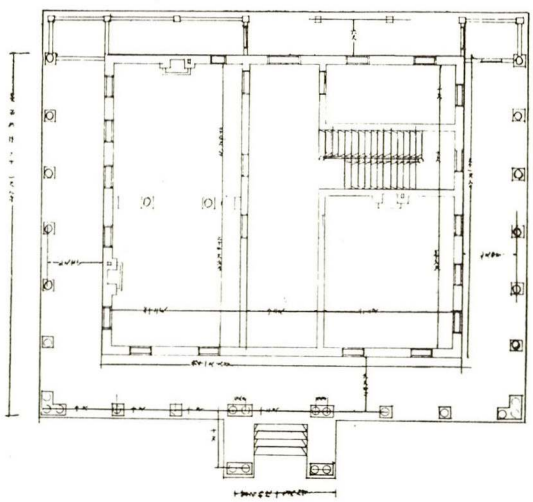


南異人館下間繪圖









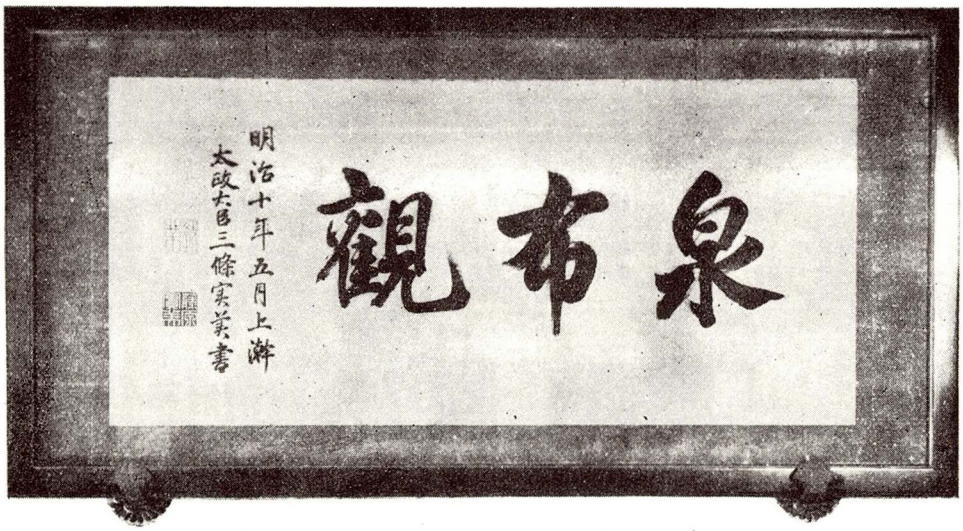
創建當時の泉布觀圖面

上　・應接所正面控

左中・同　二階の圖控

左下・同　下の圖

右下・同　配置圖



泉布觀（元造幣寮應接所）

明治三年八月起工　同四年九月落成

本館は煉瓦造二階建、階上階下廻廊丸柱五十六本共花崗石一本もの上小叩き仕上にして日本最初のものとす。胴蛇腹、軒蛇腹及手摺は木造、屋根、創立當時は木製軒飾手摺壁付なりしを後年雨仕舞の關係上現在の通りに改造されしものなり。且正面甍には表菊花金箔御紋章燦然として輝き莊嚴云はん方なかりき。畏くも明治大帝明治五年六月四日京都御所より造幣局に御臨幸の砌、本館に御駐輦あらせられ泉布觀の號を賜ひ、三條右大臣勅を奉じて扁額の揮毫をなし明治十年五月十六日下賜せらる。

次頁（外觀）の寫眞向つて右階上の表室は玉座にして、左方は御寢室に當る。奥廻は侍從控所及湯殿等を設備す。階下右表室は供奉宮內省詰所（現在應接室となれり）左方は參議卿輔詰所に充てらる。

明治十年二月十四日堺行在所より御臨幸の際本館の入口には南天、躑躅、寒菊、柳枝、



眞鍮等を雜へて柱楹を粧ひ中央上面には柳枝を綰ぎて菊形を作れり。表鐵柵の飾りも亦之に同じ　且觀の樓上欄頭には一條の瓦斯管を横たへて中央には一大菊形を作り左右より南北に曲りて十八個の圓輪を配置し横管又無數の竪口ありて其數千餘に至れり。鐵柵門上にも桐形瓦斯を設けたり。

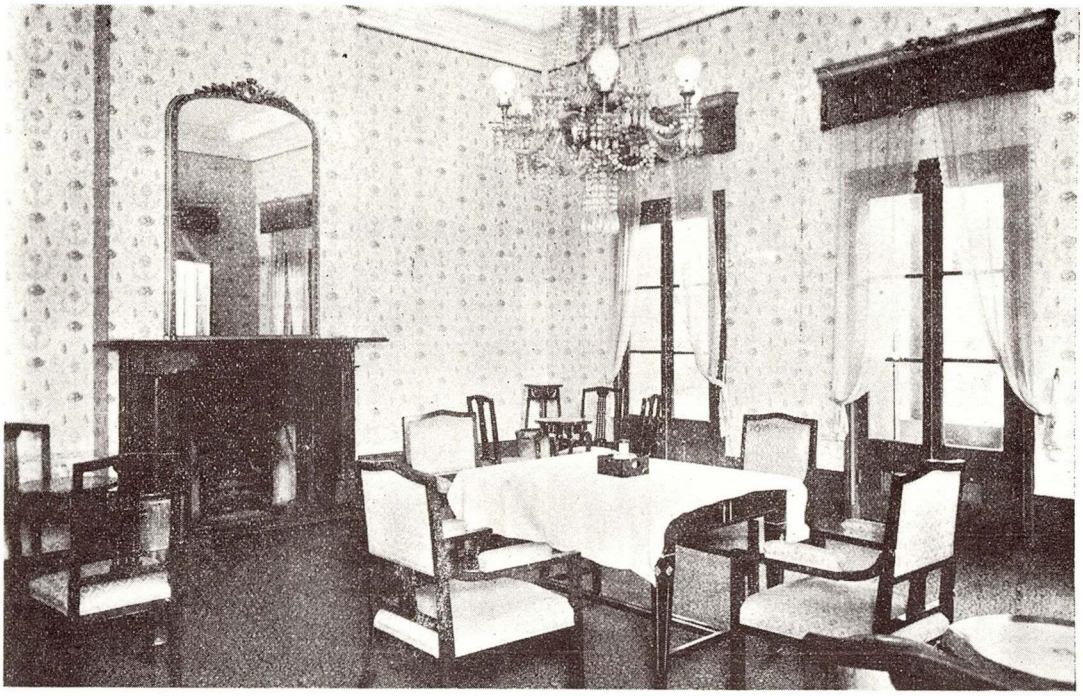
明治三十一年十一月十九日、特別大演習の砌、神戸觀艦式を御終了後大阪大本營より御臨幸あらせらる。

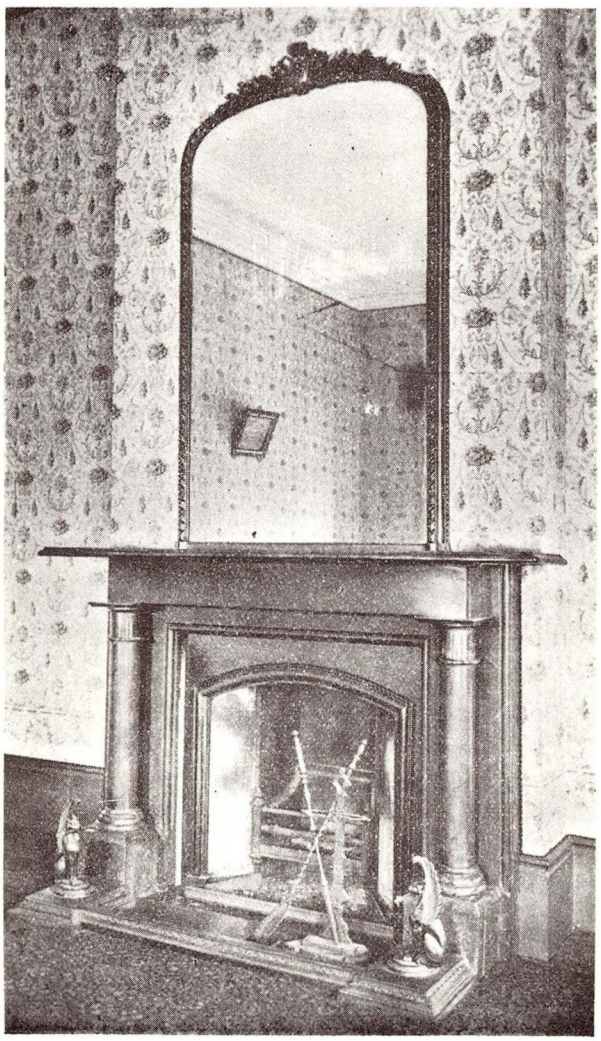
照憲皇太后陛下　明治二十年二月十六日御臨幸あらせらる。

明治三十六年五月七日再度御臨幸あらせらる。

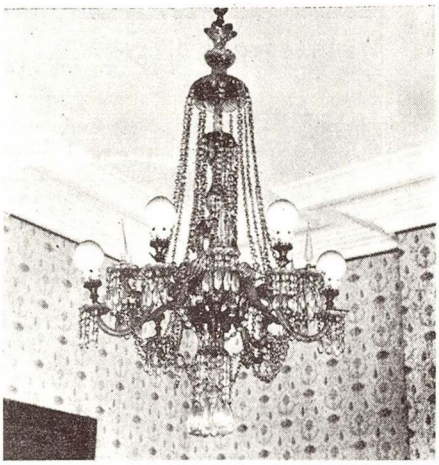
英照皇太后陛下　同二十四年十一月十一日御臨幸あらせらる。

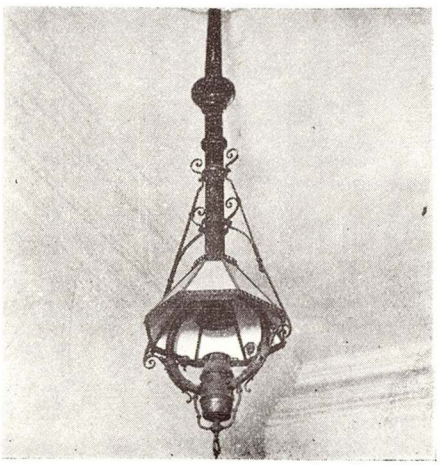
泉布觀は將來或は離宮にもならんかとの希望を以て明治二十二年中造幣局より宮内省へ献納せしが、大正五年末に至り大阪市北區に下賜せられ、明治天皇が御三度御臨幸の記念館として永遠に保存せらる。大阪市として天皇の御聖德を萬世に傳ふべき眞に絶好の建築物なり。

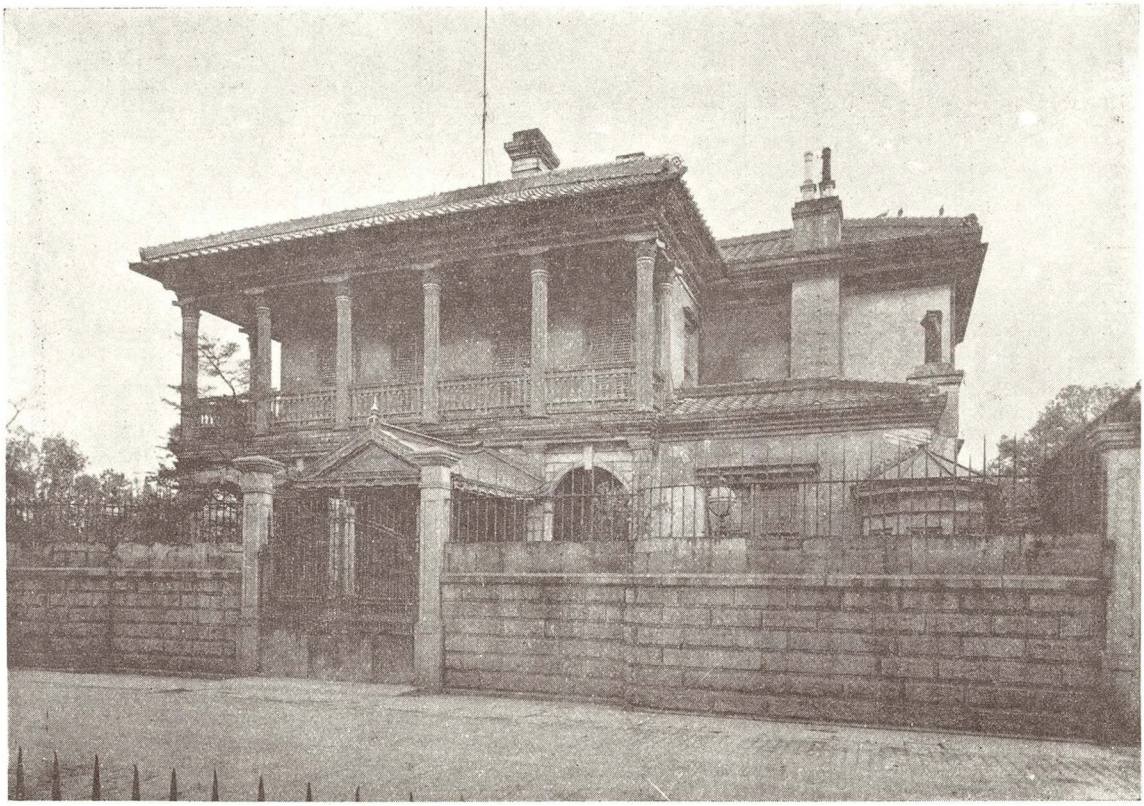




現在は皇族方の御宿所接待所に御使用あらせられ居間にて明治天皇行幸の際の御座所なりし室にして今は慶應義塾の所有に帰し建設當初のもの中ストーブ鏡等は建設當時のものにしてサンデリアも建設當時のものなり心部飾りなり（英國製）







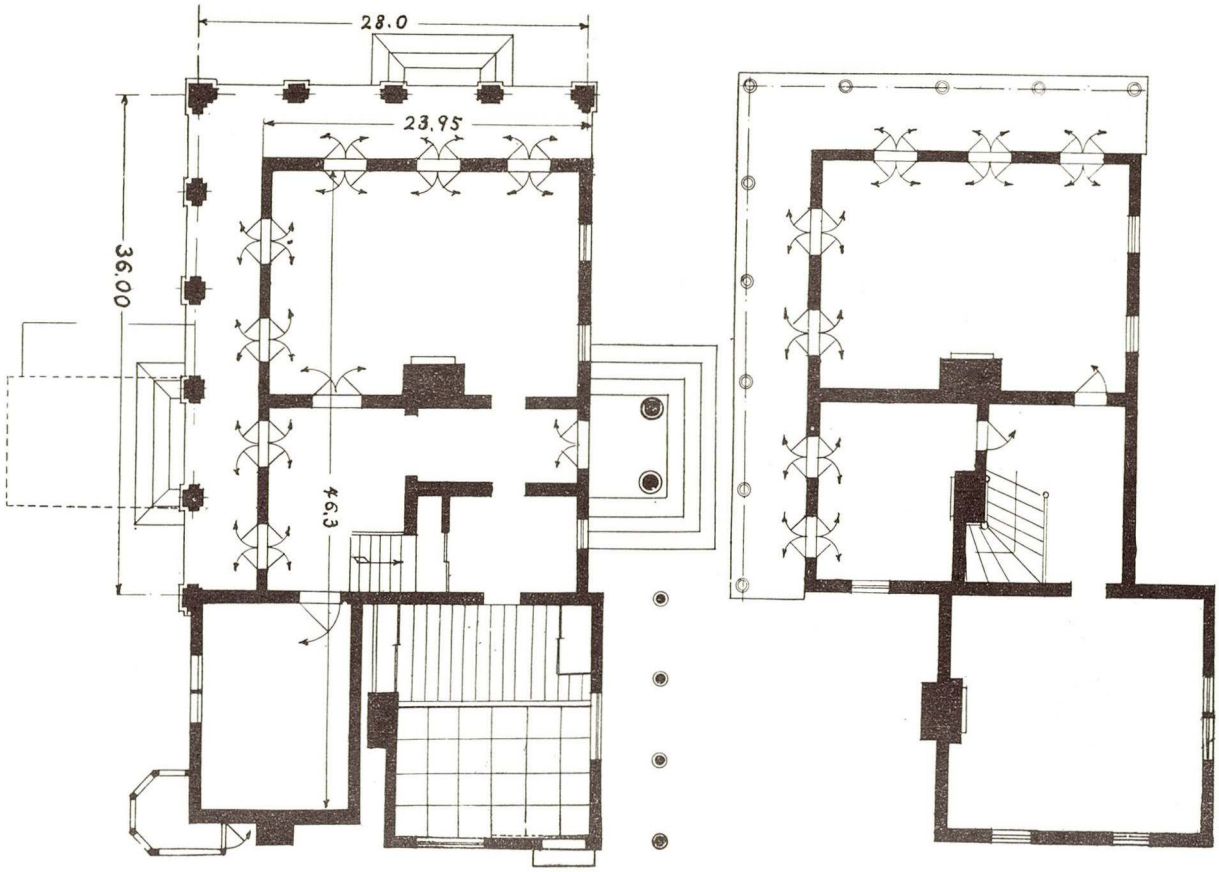
住友舊本邸洋館

住友舊本邸は大阪市南區鰻谷東ノ町にある。市電末吉橋に差しかゝると河の向側に古い洋館が見える。

舊記を調べて貰つたり、人に聞き合はしたりしたが容易に分らなかつた。先づ調べがついただけ記して見る、これを材料に尙追々と調べて見やうと思ふ。最初の建物は明治十二年九月竣工した。住友の先々代の時で、仕事は日本大工の八木甚兵衛がやつた。住友の地所課で聞いたら八木の大工で鬚の虎公といふのが知つて居るかも知れないといふので、當時八木の代人の石橋氏に聞いたら、私もあれと一緒に小僧として關係しましたがそれは明治廿七八年頃の擴張工事の時であり、尙最初の時の圖面や書類も先年火事で燒いてしまつて今は何もないとのことであつた。

今現存の建物に就いて見ると、大體二回の增築を經て居る。最初建つたのは長方形の二階屋で、寫眞に見えるコロネードの部分のみであつて、次に表側の平家の部分、最後に向つて右の二階建の部分が增築されたらしい。

兎に角、明治十二年に一住宅として西洋館が大阪市內に堂々として巍え立つたことは當



一 階 平 面　　二 階 平 面

時の人にとつて一の驚異であつたであらう。

八木甚兵衛は日本建築では近代の巨匠といひ得やうが、西洋建築には全くの素人である。範を當時の神戸居留地や造幣局の官舍等にも求めたに相違ないが、主として外國の建築圖面を見てやつた仕事らしい。それは一階の手法が洋風石造を木を以て忠實に模してゐるので了解出來る、盖柱の目地、半圓に足らぬ圓孤のアーチ。變にブラ下つたキーストン或は蛇腹等に注目を願ひたい。

襄きに永年住友の技師長をして居られた野口孫一博士はよく云はれたそうである『變なものではあるが、まあ當時の日本大工としてよくもあれまでやつたものだ』と。階上の木柱のカピタルも變なものといへば變なものである。屋根は純然たる日本式で日本の瓦葺、棟の端の鬼瓦には住友の井桁の紋入りのが載つて居る。

屋根の中央にはストーブの煙突と避雷針がある、避雷針は後のものかも知れない。壁は剝落した所をよく觀ると、隨分修理を經てゐるが元々日本の土藏造で漆喰塗であつたらしい。



腰は花崗石積で床下に風穴がついて居る。

入口を這入つた所に階段がある。随分苦心をしたらしい難しいワインダーである。親柱の上の手摺の終りは、こみ入つてゐる、壁付きの方にも半分壁に埋れた手摺や手摺子があるが創建當時のこの邊の様子は一寸想像出來ない。

當初の建物の一階の廣い部屋は多分食堂で二階は客間と寢室とであつたらしい。增築部の一階入口右側の部屋は恐らく應接室、裏側は臺所。二階のは寢室であらう。

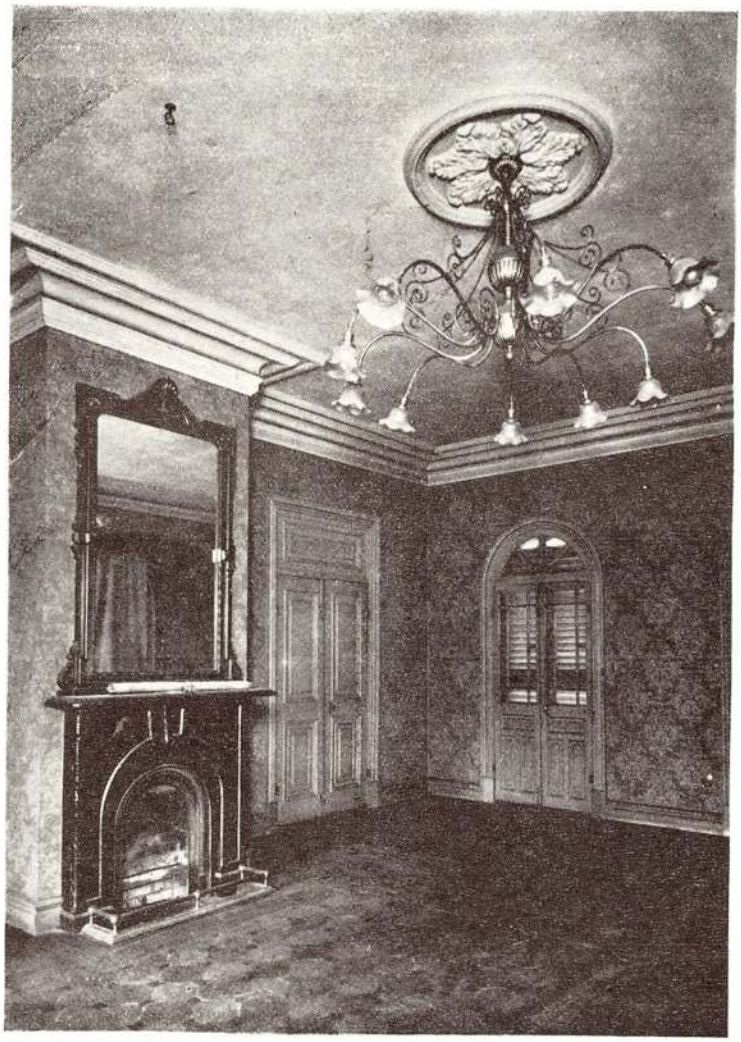


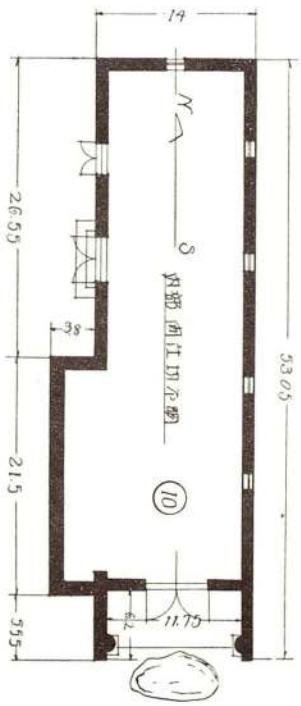
寫眞は一階の食堂の內部である、床は寄木張、爐は大理石、窓には全部鎧戶が付いてゐる。入口や窓等の蝶番は小さく二吋位で而も二枚釣である。よくもつたものだ。又面白いのは入口上の欄間にも羽目を入れてあることである。

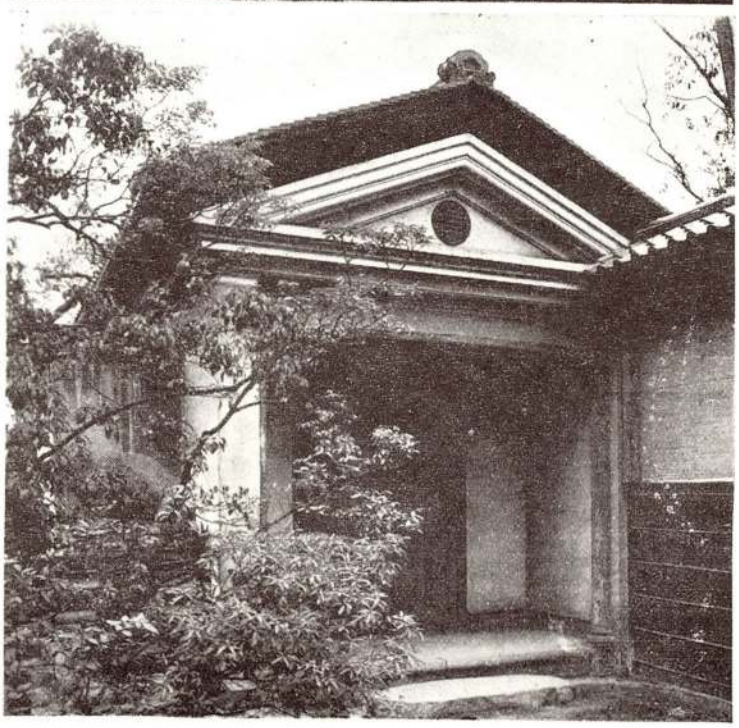
中央の電燈は多分電燈が出來た時に取り換えたものであらう初めは確かに石油ランプのものであつたに相違ない。

尙敷地の東北隅に閉切つた土藏の樣な洋風建物がある。聞けば玉突塲であるといふ、內部の樣子は鍵がないので分らない。建築の時期も知れない。

（高橋榮治記）



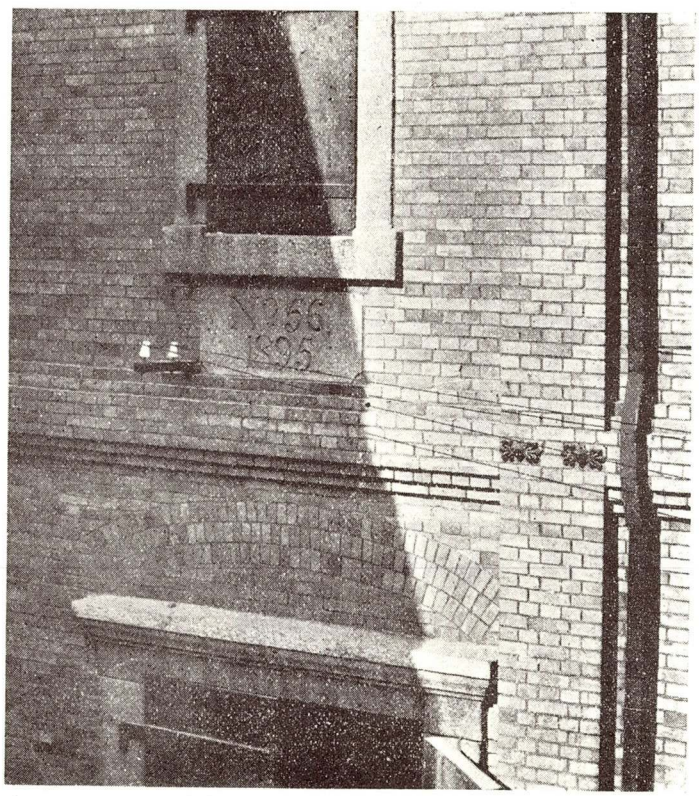




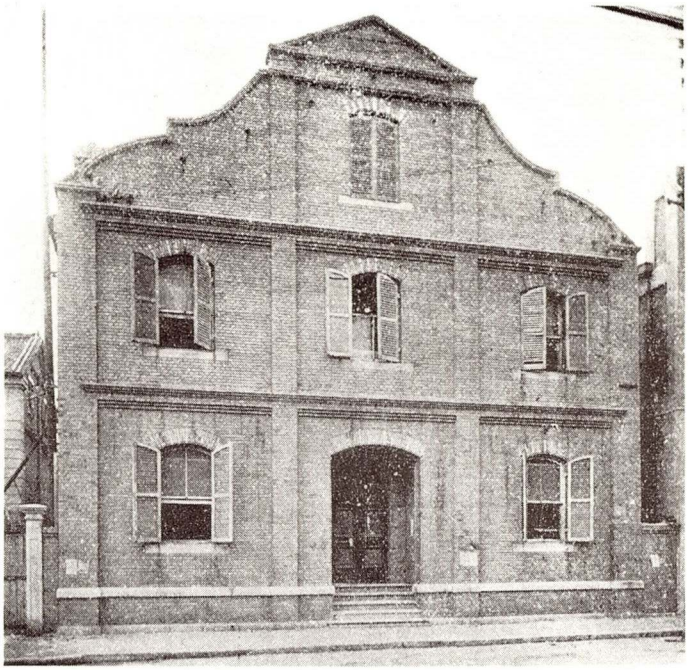
住友舊本邸洋館

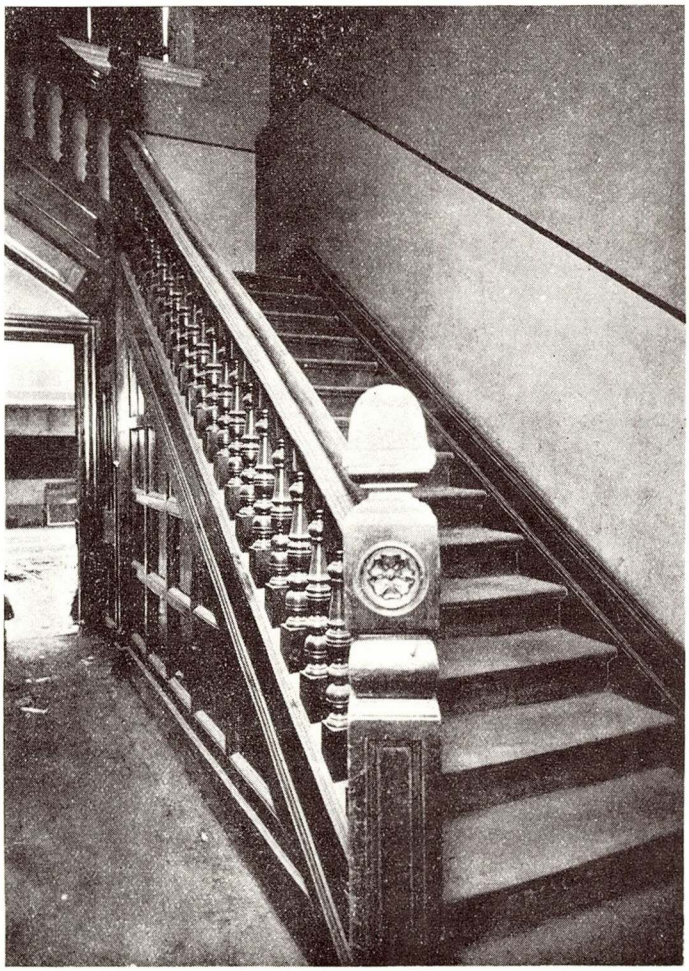


神戸元居留地の一洋舘（岡崎ビル）



神戸の元居留地には初期洋風の面白い建物が隨分あつたが、段々と減つて來る、その内には影を沒してしまうであらう。此の寫眞にある建物は皆そんなに古いものでもない洋風の初期のものとは云へないが昨年の秋壞されてしまつた、岡崎の關係會社で使用されてゐたものである。三つの建物が見える内で左の端のものは銀行に使つて居たもので内外共殆んど改裝されて見る影もない、中央のも大分手が這入つては居るが、かすかに古の趣を見出し得る、右の端のものは可成完全に建設當初の感じを殘してゐる。





此の寫眞を一見して直ぐ了解出來るが、大體北歐ルネイサンスで白耳義、和蘭さては漢堡、ブレーメン邊の古い町は全部この種の形のものが軒を連ねて見たのは今も尙殘る町の風貌である この建物の形は決して優秀なものとは云ひ得ないが、これには日本の建築玄人の出來ない素直さがにじみ出てゐる、多分大工（北歐から來た）が深く考へずにやつたものであらう屋根の勾配は約 30 度位のものであらう、その妻惹しが主なるフイーチユアーを形づくつてゐるそれが北歐の 45 度以上のもゝの形式を其儘寫したから變になるのは已むを得ないが、曲線の具合といひ、蛇腹の繰形といひ、無雜作にとつた窓といひ、窓上のアーチといひ總てが懷しいものである。

此の建物の南側の二階窓の下に年號が刻みこまれてある。前頁の寫眞を參照願ひ度い。1895年といへば丁度明治二十八年に當る、中村博士の日本建築辭彙によると同年には京都博物館、日本銀行本店等が竣工してゐる。彼等は堂々たる石造の大官廳舍であり、此は微々たる町の一隅にある煉瓦造の商舖である。

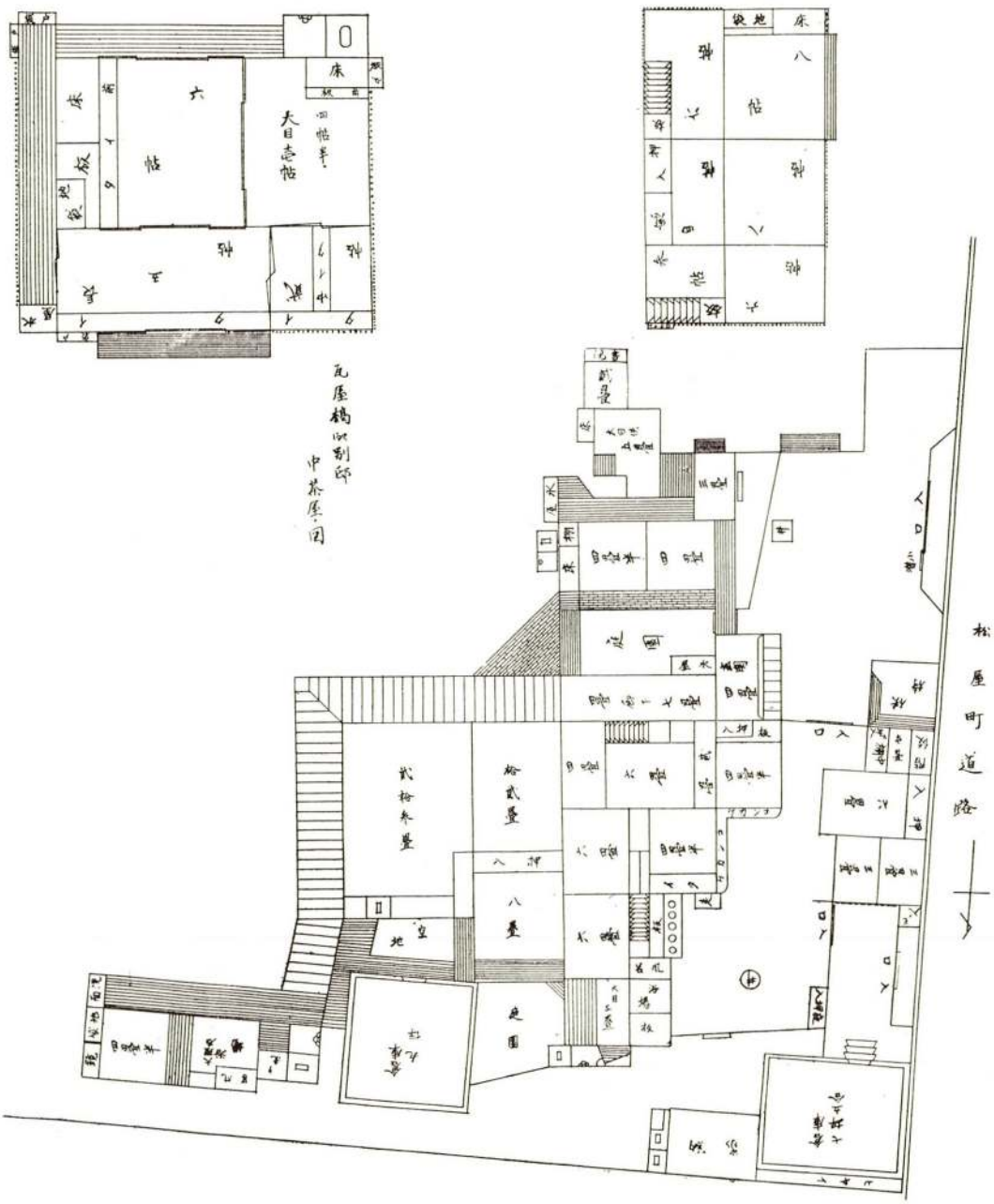
階段の樣子を見れば仲々凡ならざる所がひらめく。親柱、手摺、手摺子、羽目、巾木等破却してしまうには餘りに惜しいものであつた。破壞の魔手は旣に裏口の近くまで及びつゝある。實に風前の燈火のときにやつと山本君に賴んで寫眞にだけでもと撮つて貰つたのである。

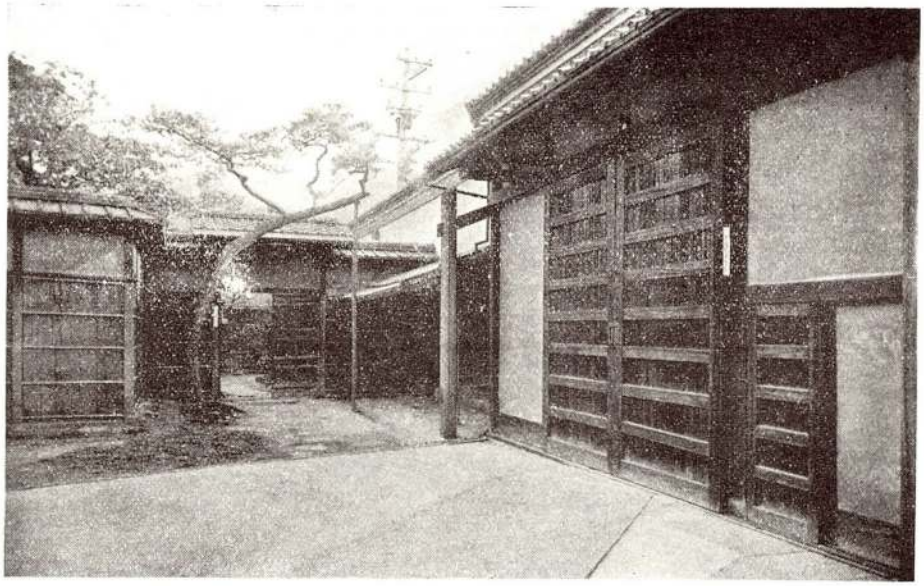
（高橋榮治記）

神戸元居留地の一洋館

鴻池板屋橋別邸

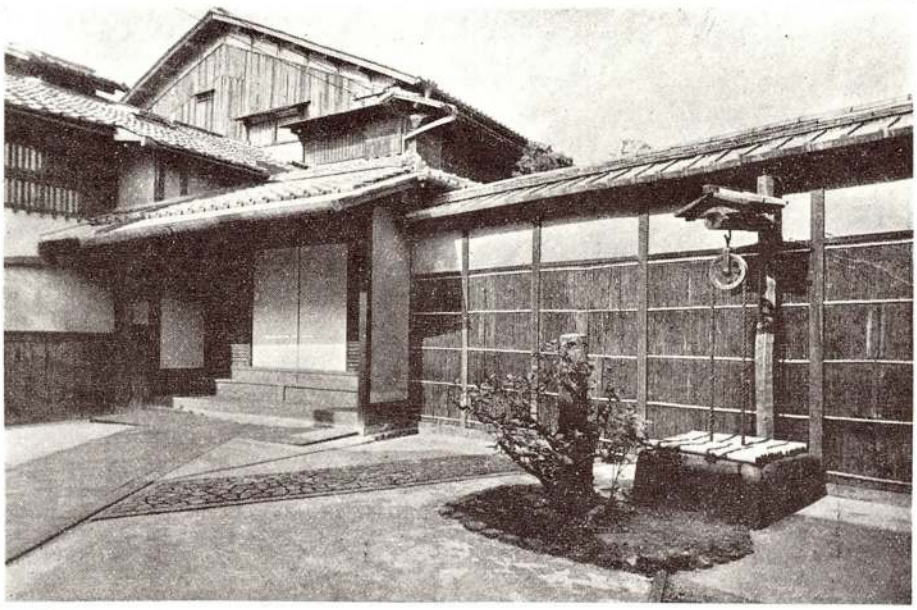
鴻池家の別邸で、南區瓦屋町三番丁、松屋町筋に高塀を繞らしてゐる。多分元と鴻池家の下屋敷であつたであらう。下屋敷とは今謂ふ別荘に當るものである。昔は高津生魂の邊りには富豪の下屋敷が澤山あつた　その種のものが殆んど影をひそめてしまつた今日、現存のものとし誠に稀らしいものである。それも近く街路擴張で切られるとのことである。





表大門内側玄關前の圖

正面松の下切戸は庭に通ずる勝手口、大門の左軒深き處は供待ち。



表玄關の圖

右は玄關前井筒なり左方勘定場への入口一部を見る。

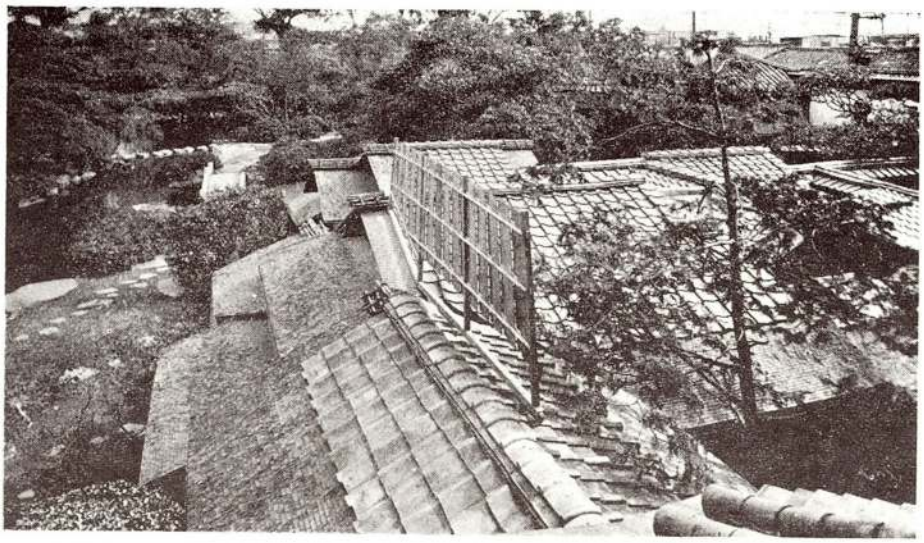


庭前池の中央東側岸より大廣間を見る圖

正面大廣間、左に茶席を見る池の中に備前河渡布袋あり、中央高きは二階なり。

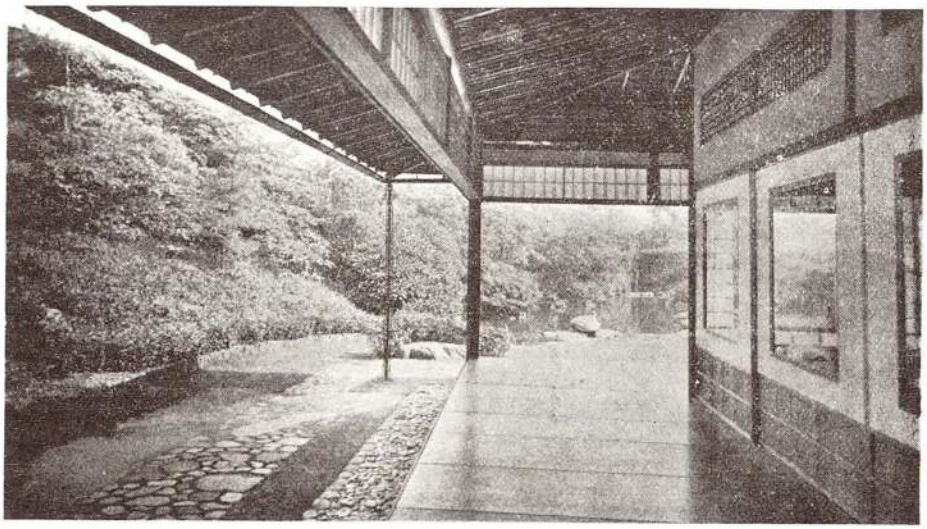
二階より御茶席屋根を望む

中央前方は通道、續いて唐了の間、次に御茶席の各屋根を見る、左方御茶席の向ふに石橋あり、更に其左向ふに池中の飛石及藤の棚を見る。



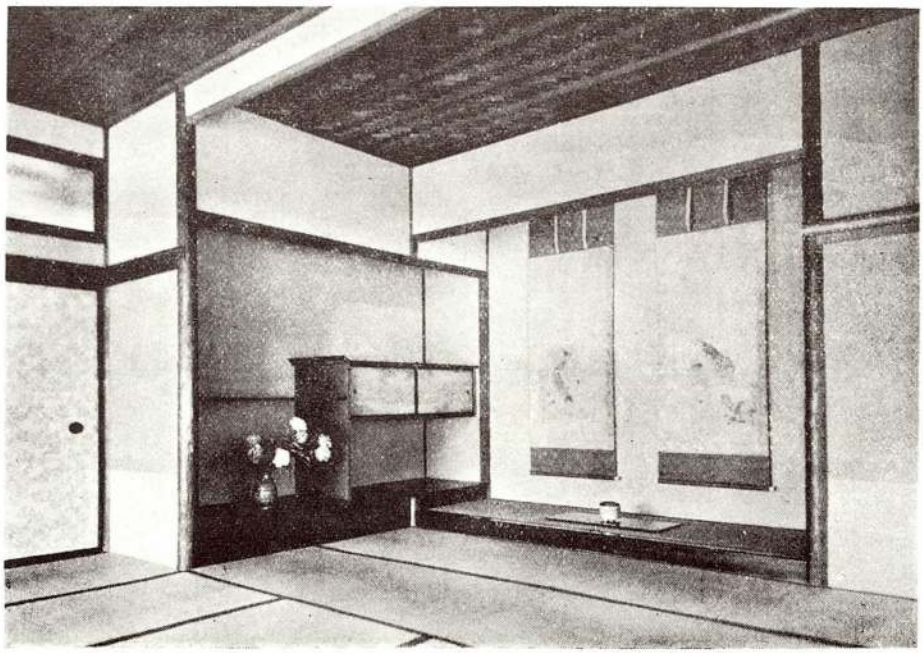
大廣間東側椽の圖

向ふに池を望む、左方に築山あり熊野笹を植ふ。



大廣間本床の圖

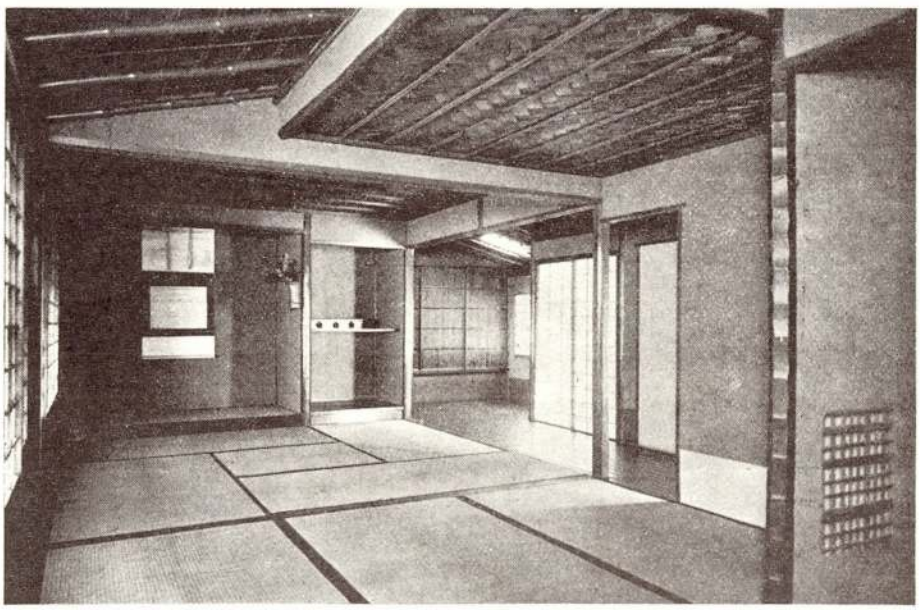
床臭春游鯉大幅一双、前に砧青磁算木一重口三足大香爐、床脇御庭燒晉城寺花生、同小袋棚襖、狩野光貞海邊貝畫圖。





大廣間庭前大手水鉢の圖

形は撫肩七角なり角椽は竹の簀張りなり、此手前は大廣間西南の椽なり、格子戸の向ふに見ゆる障子は唐子の間なり、手水鉢左は庭便所更にかすかに御茶席の屋根を見る、尚椽下は一面に那智黒を敷く



唐子の間の圖

正面床、床脇棚板向ふに如心齋好捻梅すかしあり。
床、樓下向ふつきあたりは水屋なり、其右手前ふすまは茶席典前口なり、右方端手前は板床なり。
唐子の間には襖腰に唐子遊の畵ありそれより唐子の間と言ふ。

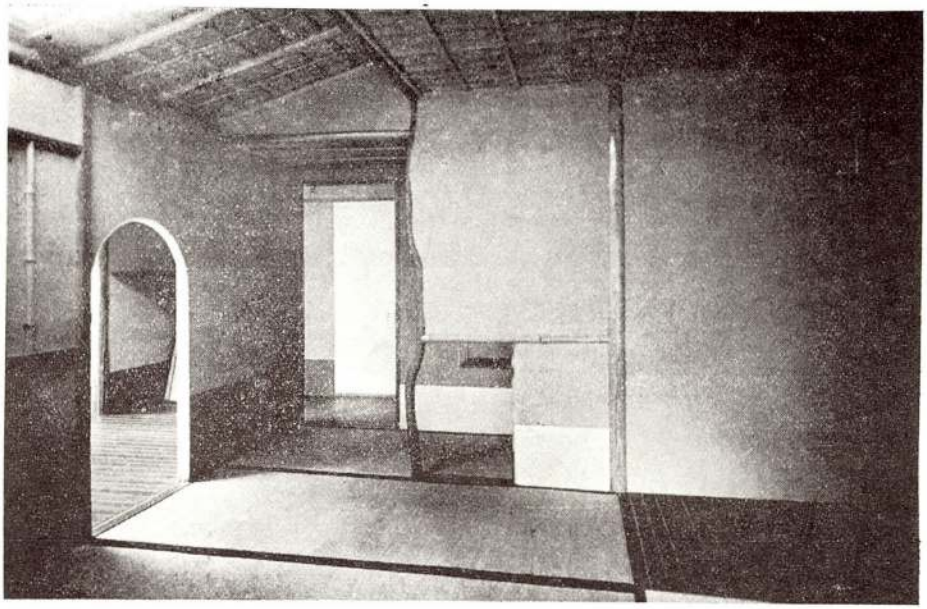


茶席庭より（西南より見る）御茶席を見る圖

中央手前は天然石の手水鉢（蹲）あり、水は河原の形に致して池に流るゝ道を作れり、即蹲の手前がそれなり、茶席は右は茶席に續きたる書院（二疊窓と横障子を見る）なり、中央にじり上りを見る、左端は茶席の女關（三疊女關上り口は左向横手なり）なり。

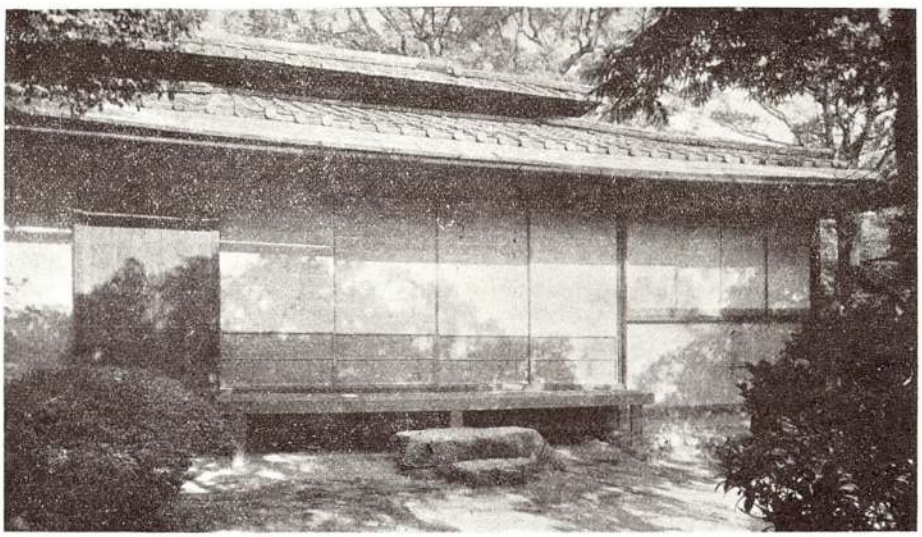
御茶席内部手前口の圖

右前に半疊の合せ板床あり、如心齋此の席に好まれしなり、その角の柱上に花掛釘あり、大目向切りにて床別（四疊及大目）五疊なり、中柱の處に桐釣棚あり圖中手前口向半ふすまが見ゆるは唐了の間に入るロなり、左瓦燈口向ふ廊下角に勝手の控釜用丸爐あり、尚其角の上に棚あり。



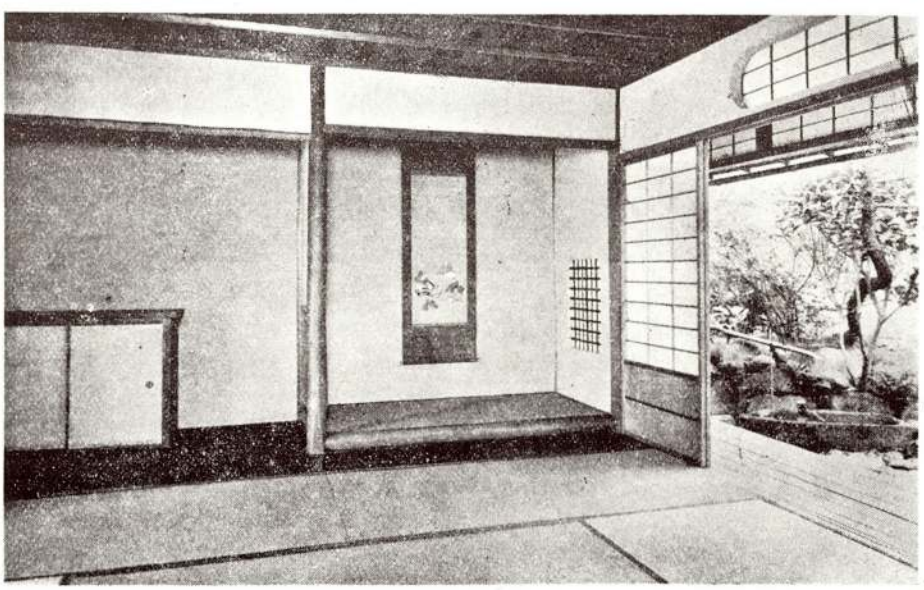
中茶屋の圖

此中茶屋は大庭の池の東南上手一寸上りたる處にあり、三四十年前むし風呂を改造せらる中茶屋の左に小高き山上にちんあり、昔天保山を望みしと云ふ、右には道を下りて池の南端藤の棚下に到るはぜを多く植えられ秋季紅葉美し。



中茶屋内部御座敷の圖

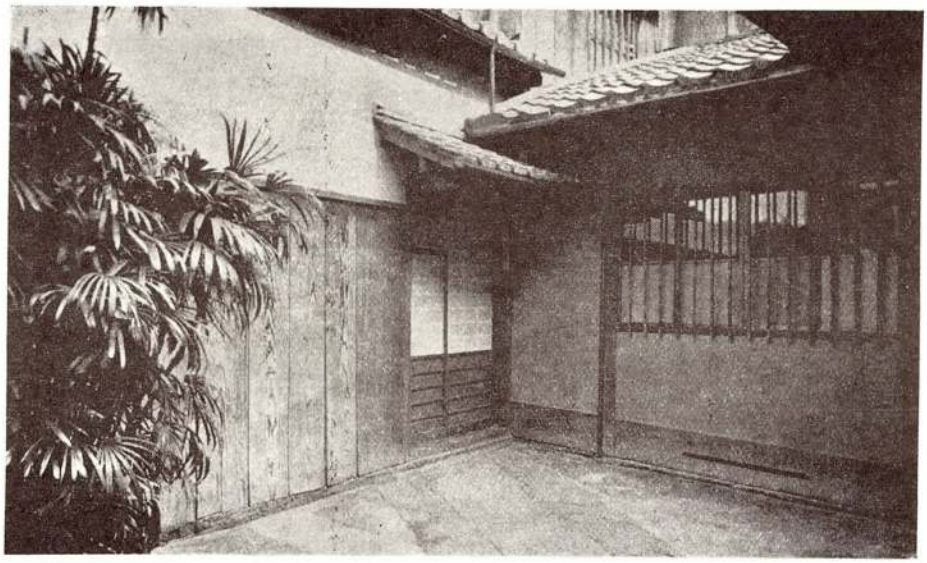
右はかけひより手水鉢あり、舟形をなす右の道は山裏道なり、床別六疊なり。





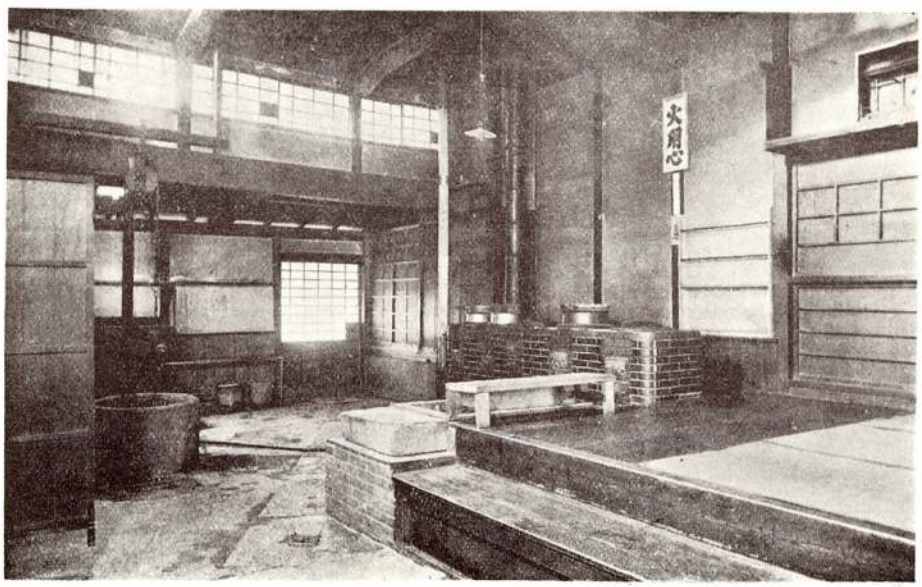
勝手口内部の圖

右は勝手寐なり、屋敷の乾にあたる、左は勝手入口門。



勝手口内部御臺所入口の圖

右ガラス窓は下別室なり。



臺所勝手元の圖

向障子の外を右に裏道にて庭に通ず。



助松本陣外観

助　松　本　陣

日本建築協會教化委員會

本稿は教化委員會の委員の方々が鄉土建築史料研究のため調査にあたられたその報告であります。そして「調査概要」の記事は委員松本儀八氏の手で、「歷史ある家」は委員德政金吾氏の手になるものである。

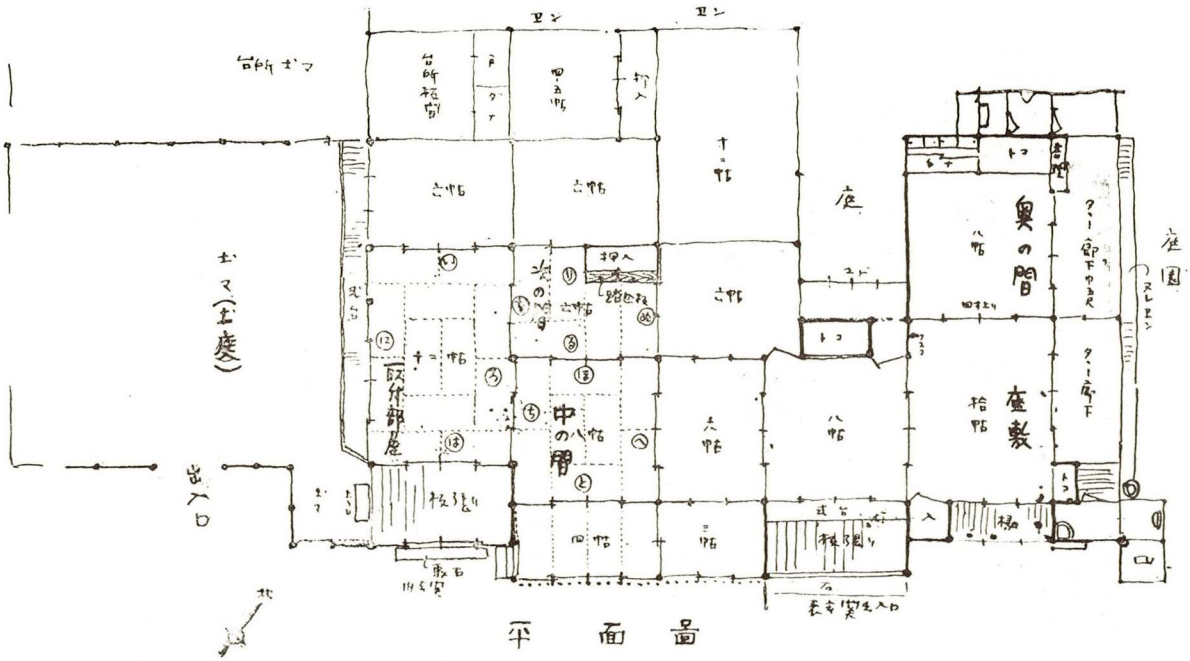
助松本陣調査概要

1・調査年月　　昭和七年六月四日

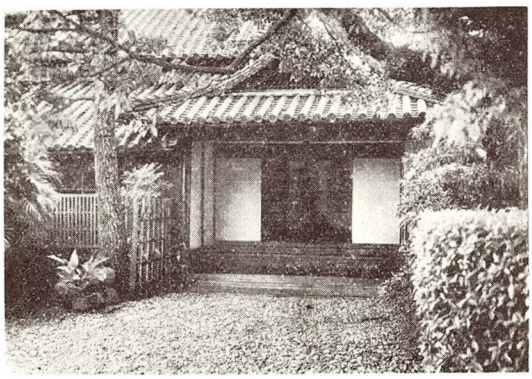
1・塲所　　大阪府泉北郡助松田中正治氏邸

1・沿革、位置

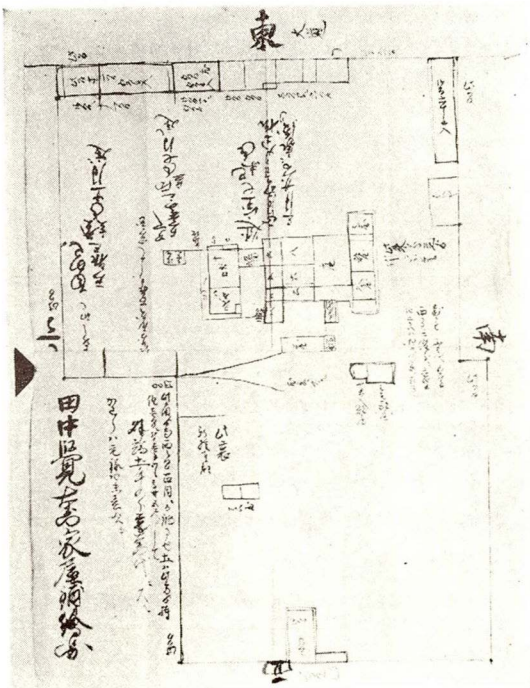
南海沿線助松驛西北四・五丁、其位置は岸和田と堺との中間に當り、中世以來久しく史上に忘れられたる古の上泉（加美以都美）鄉に屬せし名所茅渟の浦の舊地であるが僅かに俗化を免れて居る閑寂境に今尙昔の姿を其のまゝ殘してゐる。今を去る四百年の昔田中遠江守が武威を四隣に張つた時代の豪壯な本陣の建物は、藤林宗源が全く其精根を傾けて造つた自然美と、人工美とを巧に調和させた庭園に包まれてゐる。



平面圖



玄関



舊平面圖

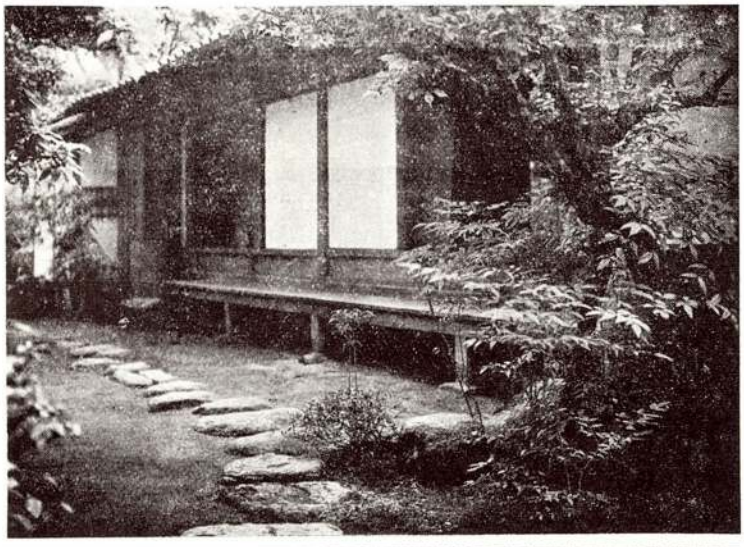
2・敷地、庭園

敷地は助松驛の西側を通る紀州街道に面して正門あり、矩形に近き約千數百坪の敷地を擁し、建物の北側に築ける庭園には片桐且元遺愛の石燈籠と言傳へられたる苔むした燈籠も自然との調和の上に程よい役目を仰付かつてゐる。



正　門

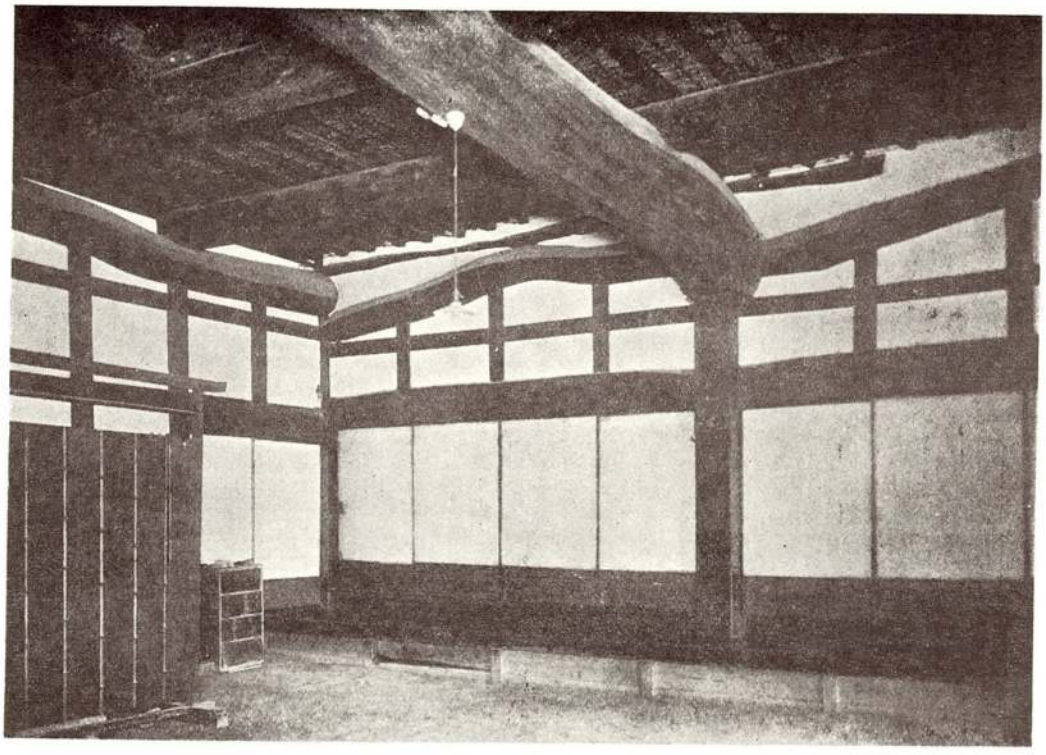
庭　園

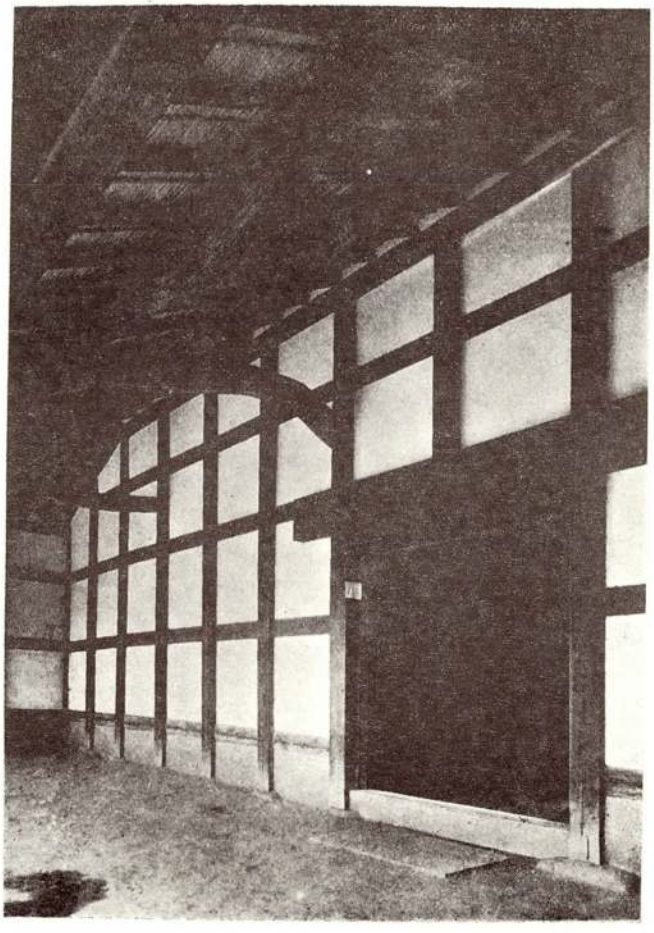




3・建　物

建物全體の配置は(別圖參照)敷地東南部の街道に面した所に正門を構へて巽乾の方向へ玄關を取り母屋は東西に延び、西の方より土庭、取付の間、次の間、座敷、上段の間を取り、就中土庭、取付の間、次の間の三間は本邸宅の中で最も歴史的に價値ある部屋にして、桃山末期のものと推定さるゝ建物である、座敷並に上段の間等は德川中期以後の增築ならんと思考さる。





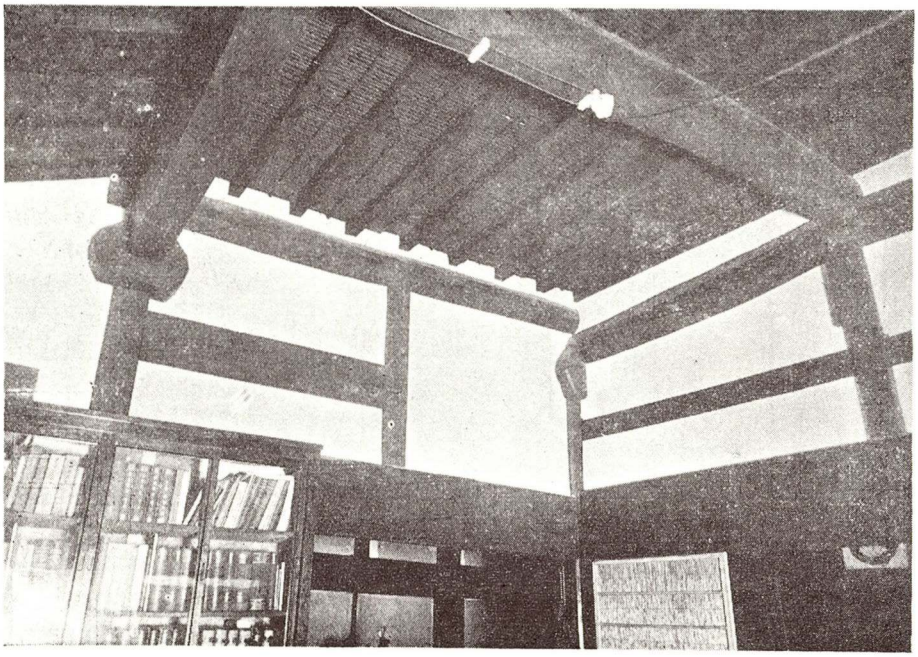
4. 室内の特徴

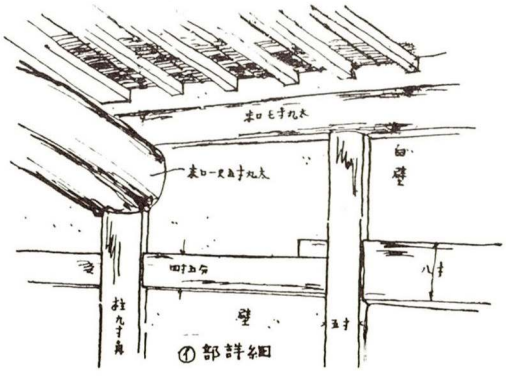
① 土庭

土庭は(約二十坪餘り)所謂土間となり、天井は梁間を編み竹となし、其上部を厚さ一尺計りの漆喰塗となして、一面防寒、防暑のために、又上部からの塵止めの働きをさせてゐる所に頗る豪放な觀がある。

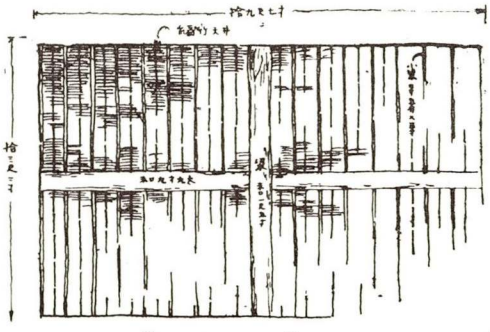
㊁ 取付の間

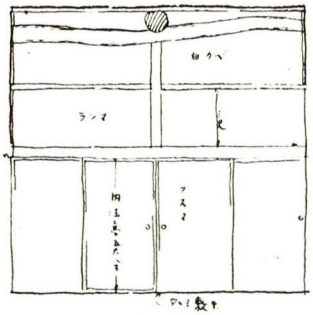
土庭から取付の部屋であつて（現在は同邸の食堂となつて居る）以前も應接の間に使はれたものらしい、此部屋の板戸は鑓鉋の使用によつて出來上つたもので今日まで丹念に磨かれて、見るからに、溜漆でも塗つたかの様に見事である。天井は土間と同様編み竹の上を土で以て被ふてゐる。



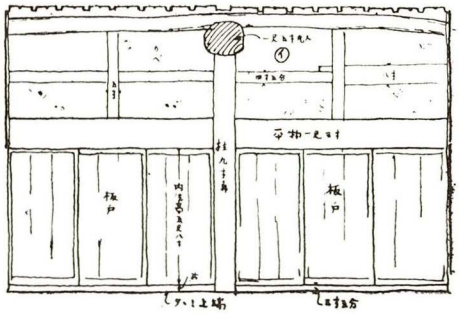


㈠部詳細

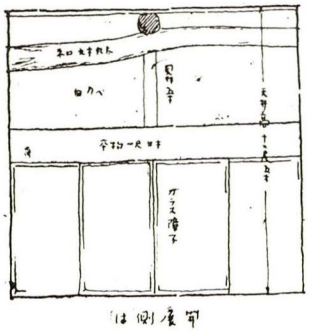

天井仕畫



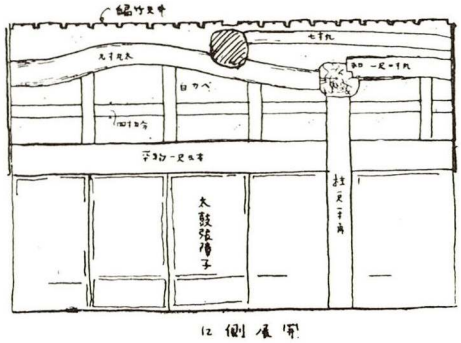
い側展開



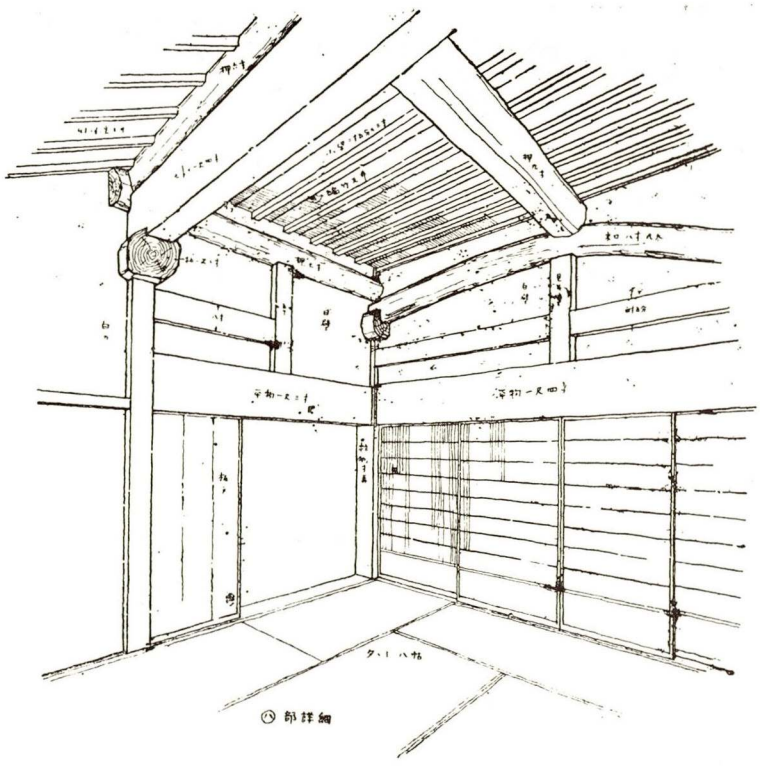
ろ側展開



は側展開

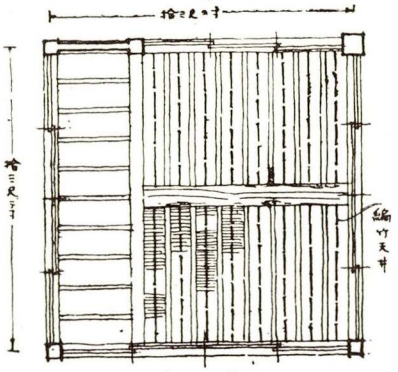


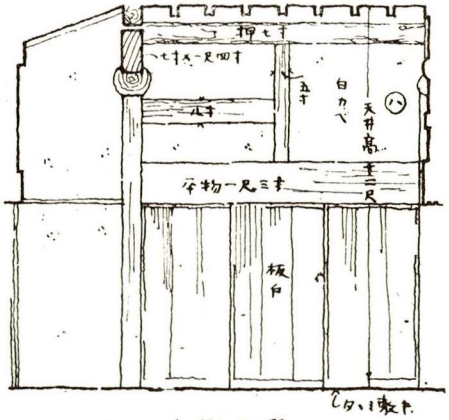
ほ側展開

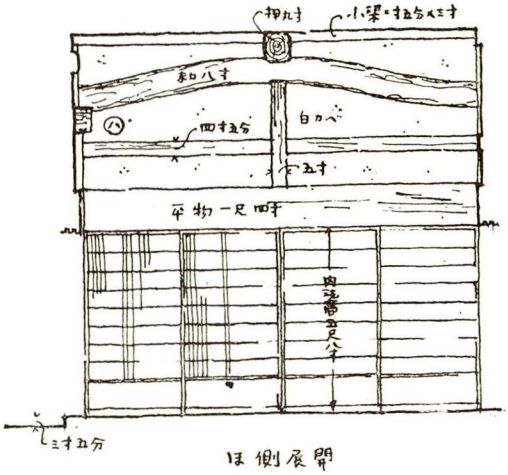


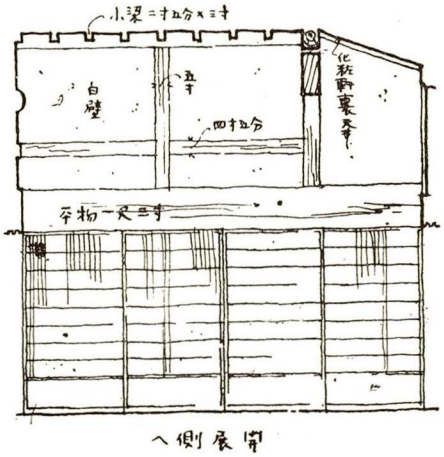
㊇ 中の間

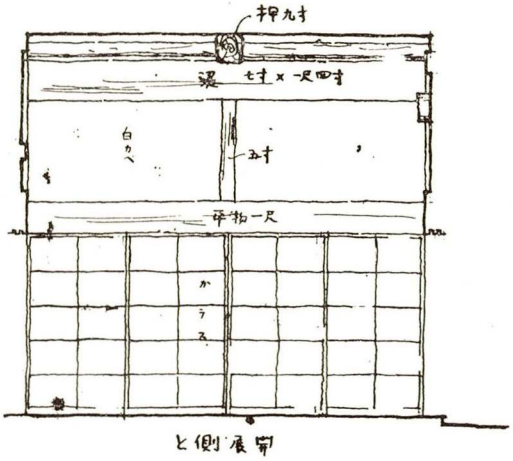
土庭取付の間の次ぎが此部屋即ち『中の間』である、取付の間よりも一段高くなつてゐる、天井壁の構へ等前の二部屋と其手法も同様であるが此室は表に面した一部を掛込天井としてある。又貫、束、梁等の構造と小壁との取合は白漆喰塗として化粧として(寫眞參照)面白く取扱はれてゐる。

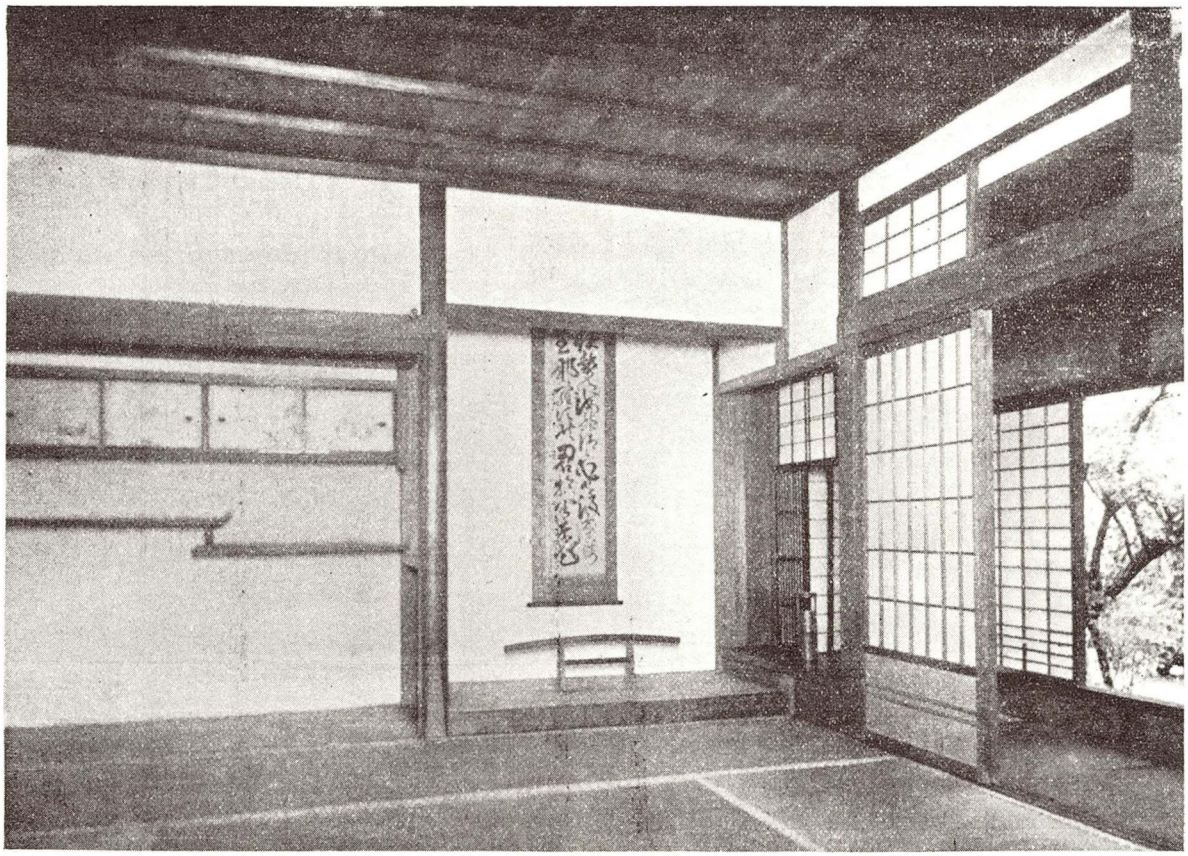






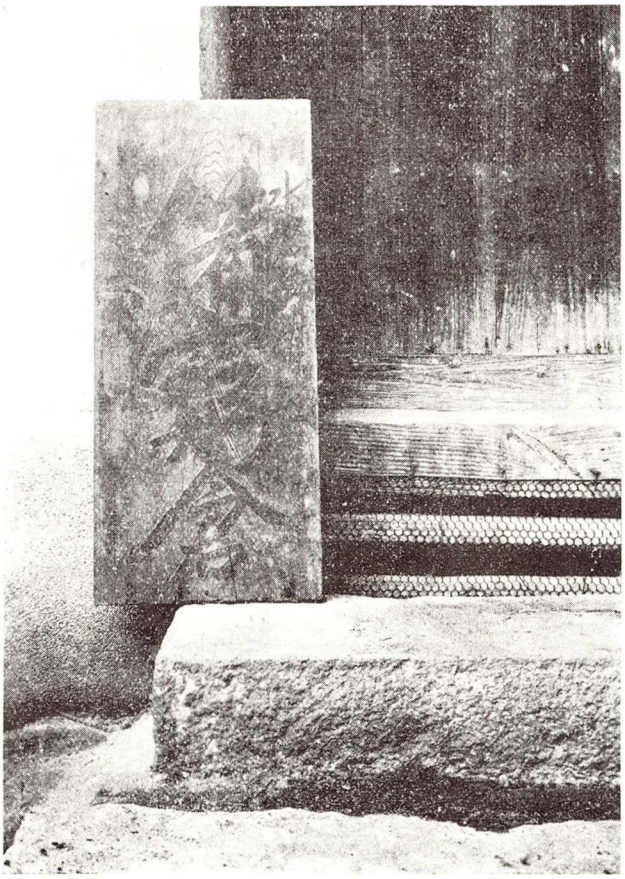






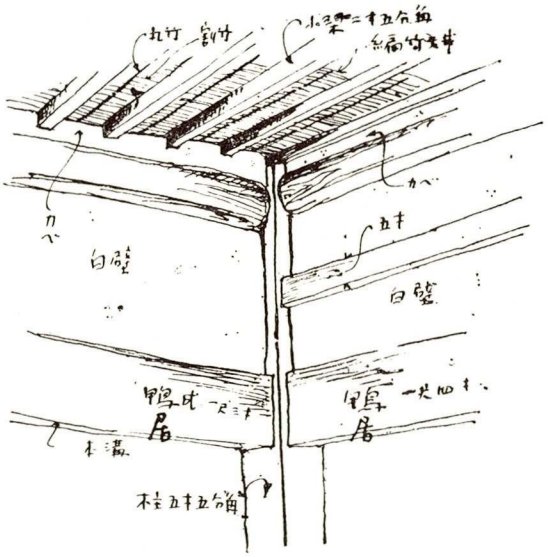
㈡ 奥の間

其昔紀州公が參覲交代の砌り江戸へ行き歸りに休憩したと云はるゝ、奥の間は座敷とは更に一段高くなつて、所謂上段構への室となつて居るが前（イ、ロ、ハ）の三部屋より後れて德川中期頃に增築したるものかと推定されるものである。



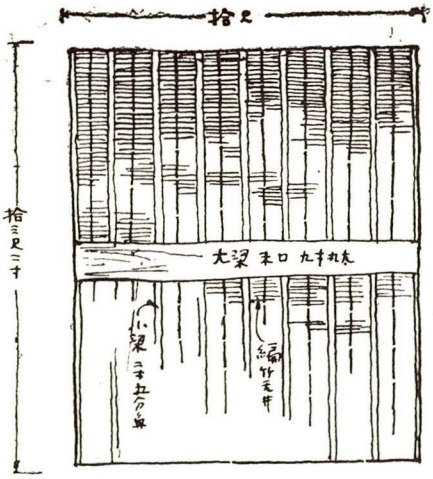
備窮倉

其他裏庭には寛政清水領時代に飢饉の際などの爲めに籾を藏めて社會事業施設の一つとした『備窮倉』と稱する八坪あまりの土藏も其儘現存して居る。

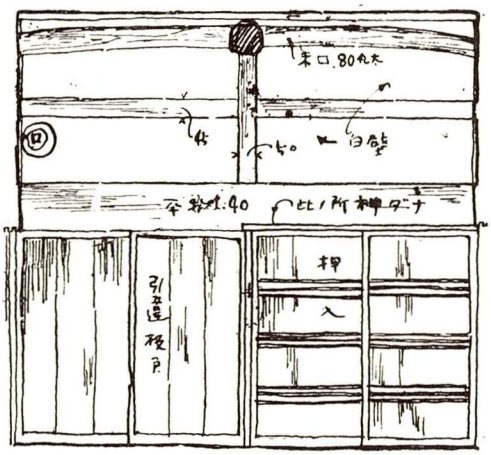


㊐ 部詳細

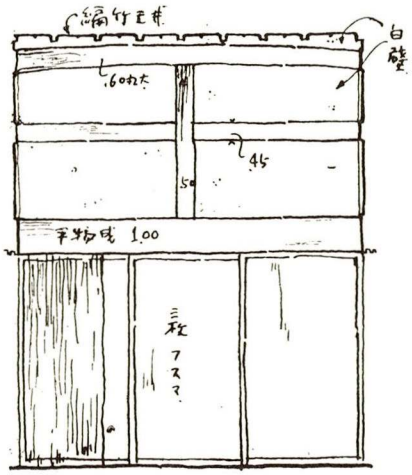
次の間



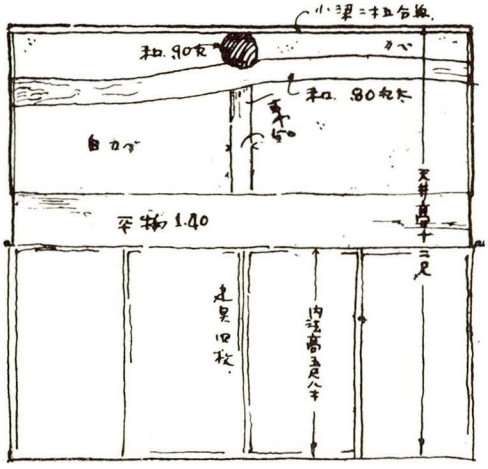
天井伏圖



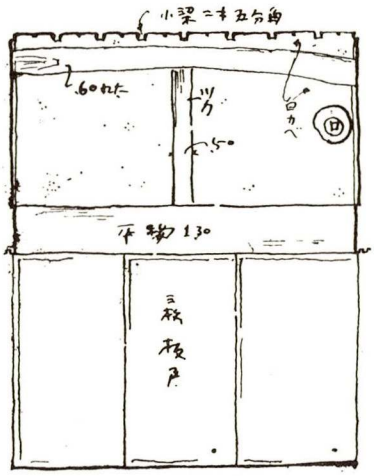
り 側展開



ぬ 側展開



る 側展開



を 側展開

歴史ある家（助松本陣）

歴史とは概して過去の人々の感情の記述である。感謝には善と悪、感謝と呪ひ、とがある。美しさが感謝の現れであるならば、醜さは呪ひの記錄であらふ。祖先崇拜は呪ひの記述を捨てた美しい感謝の習慣であり其處に因緣が起り歴史が生れる。

因緣を語り、歴史を示すものに人の住居がある。埃及の太古を語るものは其れは彼等には來世の住居を信じられた所のピラミツド（英語）即ち室（埃及語）である。希臘、羅馬に神の住居のパーテノンがある如く我國の神社は神の家で、佛閣は佛の居ます聖所である。有史前の歴史を語る石器にしろ、土器にしろ其れは皆住居の一部であつて、殊に彼の最古のものと考へらるるドルメンの如きは原始時代の好き住居の遺物である。

樹木に惠まれた、此國土から木造の住居が起ることは、自然の力の現れであるが、其保存に永續性を欠く事は、古の歴史を語る上に、埃及や希臘や、羅馬の如く豐富の記錄を遺さざる上に少なからぬ不足を感ずる。事其實は三千年に及ぶ歴史を有する我國に、千數年を數へる法隆寺が、現存する最古の建物であることが最も雄辯なる證左である。

我々の町！大阪からボツリボツリと歴史のある鄉土建築が其懐かしい、思ひ出の姿を消して行く！其の懐しい姿を、せめて紙上に丈けでも止めて置きたいとの願ひが、屢々本誌に鄉土建築號の特輯を招來する所以である。

此傾向は獨り都會ばかりではない、地方でも由緒ある大家が次第々々にモンペイとなりつゝあるモンペイと言つても其れは、彼の寒國の娘さん達のはく其れではない。地方政治家が一人前になるには、必ず其の所謂るモンペイの條件が入用であると言ふ其の事である。委しく言へば、祖先傳來の總ての所有物を政治運動と代へて、賣り盡して、只僅かに『門と塀』が殘つて居ることを云ふのである。

一期半期の政務官の夢を見る爲めにモンペイの憂身をやつす現代に、能く四百餘年の歴史ある家を玉の如く抱き守りて、今我々に感謝の記述を與へて呉れたものに、南海沿線助松に本陣田中邸がある。

實況に就ては、教化同人松本君の報告に讓りて自分は其歴史を記す。

現代の田中正治氏は京大醫學部四十一年の出身で專門外に、天文、考古、建築の諸方面に趣味を持つて居らるゝ。其先は清和源氏より出でたる新田家と同族で上野國田中莊を領したる關係から田中を姓としたので家紋は大中黒で源氏なること表示して居る。

十三代の祖遠江守重景は織田信長の部將佐久間信盛の招きに應じて大阪鄉石山城攻めに參加して天正四年七月川口に戰死した。

元來この石山城は本願寺の寺院ではあるが、其以前の本據山科の寺院が兵火に亡び此に移轉した關係から、其前後に鑑みて、周圍には堀を構へ壁を高くして恰も城塞の如くあつたので是を石山城と呼んだのである。

當時佛教厭いの信長は先には延暦寺を燒き其他到る所に佛徒に彈壓を加へて居る。京畿に近き此大阪の石山城は信長より種々なる難題の目標であつた事は其の寺歴の記す所である。當時の信長は安土に居城し近畿を平げて位は右近御大將である。其勢力に對して本願寺が敢然として反抗し能く十一年の間孤壘を守り續けた事は强豪上杉、毛利等の後援はあるとしても信仰の力の偉大を物語る我國唯一の實例である。

佐久間信盛は信長譜代の大將で又信任も篤き武將でありながら石山寺を圍む事、實に五年遂に拔く事能はず、天正八年勅令に依り當時の門主光壽（顯如上人）が大阪城を封して、紀州鷺の森に退隱した時信盛は信長の譴責に依りて削髪して高野に隱遁した。

信盛は招致に應じた田中氏十三代の重景の墓及び先考重遠の墓が助松に近き牛瀧塚に葬られてある點よりして田中家が當時已に此地の土豪であつた事は推測に難くない。それは信盛の高野入りに

從ふべき義理のなき事も明かである。其後信長刺され、秀吉天下を握り石山城は其居城として天正十一年十一月十餘州の卒を起して大いに是を改修し同十三年末には天守閣成るに及んで小早川隆景吉川元長を自ら閣上に案内して、近畿の形勢を語り又前の中國攻めに於ける毛利との合戰の模樣を談笑して更に翌年の九州征伐に毛利一族を先鋒たらしむるの約を本願寺時代より因緣深き此城閣に於て結んだ事は毛利氏には感慨深き事であつたらう。記述は岐路に入つたが、天下の形勢は秀吉の鐵腕に依つて漸次統一平定されつゝあつたので所在の土豪も皆其家業にいそしんだであらふ。

德川時代となるに及んでは、助松の土地が天領である關係で鄕士、浪人の立退令にも免かれ賴宣公の紀州移封以來は紀州家の御小休み本陣を承り(普通の旅館本陣に非ず)家運と共に共舊屋は今日迄依然として保たれたのである。

此家屋の創設は前記の如き家歷であるので其れは多分元龜の始め頃即ち西曆1570年頃であらふ。德川賴宣の紀州移封は元和五年七月(西曆1619)であるから創建より五十年後の事に屬する。故に御小休所としても多少の修築は施したものと推測さる。其から後の同家の記錄にある延寶七年(西曆1679)の改造は創建から約百十年目である。第二次の改造は慶應三年(西曆1867)であると言ふ記錄に照すときは其間の日子は約百八十八年となる。約二百年に近き時間、改修がなかつたとは建物の年齡の點から見て疑ひを挾む餘地がある。將軍吉宗が紀州家から直つたのは彼が三十三歲の壯年なる享保元年(西曆1716)である。其前後に於ける上京の途次屢々田中家に立寄られた事は同家所藏の吉宗自筆の(水聲水下明、砂路雪中平)の書幅がよき證明を遺して居る。又備窮倉の新築は寬政五年であるから此頃に相當の修築があつたのではないか?

備窮倉に就いては歷史に依ると幕府は寬政元年に全國に令して豫備倉(所謂圍ひ米)今日言ふ所の〆穀法に依る正米倉庫の如きものを造らしめて居る、清水家領たる助松村が其命令より五年後に出來た事は、元來清水家は將軍吉宗の孫に當る重好に賜つた御三家(一ツ橋、田安と共に)の一の家名であるから、紀州家に因緣深き助松村が清水家領となり、而して幕府の命令に加減のあつたのが五年間後れたのではないかと思はれる。

此家屋の歷史は上記の通りで其第一次——第二次間の改修の間に今一つの改修があつたのではないかとの推定は自分の所見であるが、此の斷定は今後の研究に俟ちたいと思ふ。

尙此助松海岸を往古茅渟の浦と稱したる事に就き田中氏は次の如く考證されて居る。古昔和泉國は『茅渟、珍努(チヌ)の縣』と呼ばれ、其國府は現時の國府村大字府中に置かれ、右府中を含める古の上泉(加美都以(カミツイヅミ)都美)鄕に屬せる當助松海岸こそは中世以後久しく史上に忘れられ來りし名所『茅渟の浦』の舊地なれ。下略、此考證は眞實であらう其れは同氏所藏の舊地圖(冊子にて分國的に製圖している)にも其名を記入してある點よりしても立證が出來る。

和泉の國の古名がチヌの縣と稱した事は大日本古語辭典にもある。此チヌの語原に就いて私の研究中の『カムト語』と比較して見たい。

チは〝ヘ〟で蛇である。其の原意は永遠と言ふ意と、長い、と言ふ意味がある。其から大と言ふ意に轉じ又千千なぞの多數となつたのではないか。又の語原はナウで水を指す。即ちチヌは澤山の水、出で水一和泉となつたのであらう。然らば此國の往古は多數の、或は多量の泉があつたのである。現在に於いて同地方の狀態は不案內であるが各所に池のある事は其れは泉の舊蹟ではないか。以上の考證より推定して助松よりの出土品たる、田中氏所藏の二個の大なる土器は海岸住民…(魚漁をなしてゐる所の)飮用水貯留の水壺であらう。飮用水豐富の地方に水壺の必要はない筈である。然るにこの水壺の所有者たる祝部、彌生の人々は外來であり其自然の泉の附近には已に原住民類が生存して居たので外來民たる海岸住民は止むを得ず貯水の必要があつたのであらう。浦(ウラ)はカムト語では〝ウル〟で其れは、終り、末の意味がある。浦は陸地の終點で又海水の終點である。又裏は表よりの終點である、木の終點は又ウラ、梢と稱する。此語原からウラトと言ひて休息の意味がある。活動の終點はウラト即ち休息である。土佐國高知の濱は今尙浦戶と稱する。此等は同語原から出たものである。

チヌの浦の考證に就ては私は更に研究家の所說を聞くを嬉ぶ者である。

比叡山延暦寺

藤原義一

延暦寺は比叡山の頂上に近く廣大な地域を占め、東塔・西塔・横川の三塔に分れてゐる。東塔と西塔とは數町の間にあるが、横川は一里餘も離れてゐる。各に中堂があり、東塔のを根本中堂、西塔のを轉法輪堂、横川のを横川中堂と呼ぶ。天臺宗の本山で、弘仁七年最澄の開基、同じ頃空海によつて開かれた眞言宗の高野山金剛峯寺と共に、當時吾國密教の二大道場であつた。後世兩山共屢々火災に見舞はれ、堂塔は其度毎に建て直され、建築として當初のものは一つも殘つてゐない有様で、高野山では最後の金堂が昭和元年の暮に炎上し、最近鐵骨鐵筋コンクリートを應用した新堂の粧ひ成つたことは人の知るところである。

延暦寺は彼の山法師で大いに巾を利かせ、まゝならぬものとして殿の目にたとへられ、朝廷や武將を手古摺らせたこと一通りではなかつたが、遂に元龜二年織田信長のために全山を燒かれ、殆ど全滅の悲運に陷つてしまつた。隨つて現在の諸建物は何れも殆どそれ以後の建立にかゝる。その中の國寶建造物の名稱と建築年代とを記せば

根本中堂	寛永十九年	（一說寛文七年）
大講堂	寛永十九年	
鐘樓	寛永十九年	
大乘戒壇院堂	慶長九年	
轉法輪堂	文祿四年移建	（鎌倉時代の建築）
琉璃堂		（室町末といふ）
横川中堂	慶長九年	

及び特殊なものとして相輪樘がある。轉法輪堂だけは文祿年間豐臣秀吉が麓の園城寺から移建したもので鎌倉時代に屬し、それから瑠璃堂が室町末期とされ、其他は皆桃山から江戸時代のものばかりである。即ち古さから云つては大して古いものはないが、其時代のものとしては多く傑作に屬し、且つ時代相當の特色をよく現はしてゐる。

併し乍ら延暦寺が建築史上に占める重要な地位は是等箇々の建物ではなく、密教伽藍としての特色にある。奈良朝末から次第に擡頭して來た密教研究は、唐土から相次いで歸朝した最澄・空海がそれぞれ比叡山及び高野山を開くことに依つてにはかに一進展を遂げ、密教伽藍の各地に營まれるものが漸く數を加へて來た。而して彼等の多くは修禪の必要上人里離れた深山遠谷を撰んで道場を建設した。山地に於ては平野の様に適當な土地を得る



1. 相輪樘
相輪を主體とした塔である。後世殊に明治末の修補になるところが甚だ多い。

ことが容易でない。僅かの平地を得るのにも、斜面を削つたり、低地を埋めたり、時には谷を臨んで舞臺を組んだり、様々な工夫を要し、一堂一塔の地にも相當の苦心があつた。況んや諸建物を規則正しく一平地内に配列するといふことは到底望めなかつた。又道場建設の目的からしてもそんな必要はなかつた。隨つて箇々の建物は自由に配置せられ、伽藍全體として規則正しい配列といふことは考へられなかつた。ここに於て從來の伽藍配置法といふものが破れるに至つたのである。

飛鳥時代の法隆寺・四天王寺・奈良時代の藥師寺・東大寺等の有名な伽藍は、何れも南面して金堂・塔婆・講堂・鐘樓・經藏等が或る統制の下に配置され、或は歩廊がめぐり、中門や南大門が並んで整然としてゐた。かかる伽藍配置法が破られると云ふことは、今考へれば何でもないとの様であるが、その頃としては中々の大事件であつたのである。飛鳥時代の百濟様配置や奈良時代の唐式配置法は何れも大陸から傳へられた形式で、當時にあつては餘程重要視されてゐたものである。その如何に重要視されてゐたかといふ例として大和の當麻寺を擧げて見やう。

當麻寺は中將姫の曼荼羅で世に聞え、創立は白鳳年間、金堂・講堂始め東西兩三重塔があり、金堂・講堂は鎌倉時代の再建であるが、兩塔は奈良時代のものである。此寺は二上山麓の斜面に營まれ、後ろに山丘を負ひ、前方は遙かに下田高田方面の平野を展望してゐる。而して平野の方からこれを望めば二基の塔婆が背後に並び立つ大伽藍が堂々と我々の方を向いてゐる様に思へるのであるが、事實は之に反して伽藍は我々を背にして山の方を向いて立つてゐるのである。即ち寺地は西から南へかけて山麓がめぐり、東から北の方へ平野を展開してゐるから、伽藍は北向或は東向にすれば都合がよささうだのに何處迄も當時の唐式配置法に從つて南面を守り、南方正面即ち山の方から見れば金堂の後ろに講堂があり、前に塔婆が二基東西に並び、整然として平野に後ろを向けてゐるのである。

密教建築はかくの如く力強い伽藍配置法を破つて建築史上に一時機を劃したのであつた。これより、平地に營まれる寺院に於ても、伽藍の配置といふものが重要視されなくなつてしまつた。

それからもう一つ注目すべきは相輪樘である。弘仁十一年に出來たもので西塔に屬し、

今も釋迦堂(轉法輪堂)の後ろの山に立つてゐる。これに普通の塔婆にある相輪だけを立てた形のもので、高45尺、青銅で造られ、中に法華經大日經二十三部五十八巻を納めた、塔婆と同意義の面も極めて特殊なものである。併し日本の塔婆なるものは元來源を印度のスツーパに發したもので、吾塔婆にあつては主として相輪に此スツーパの形式を傳へてゐるのであるから、塔本來の意義より云へば相輪樘なるものが原形に近いと云へなくもない。叡山の相輪樘に對して高野山にも特殊の塔婆が出現した。それは彼の大塔で多寶塔の原形に當るもの、現在大塔の實例は紀伊根來の大傳法院にのみ一つ殘つてゐるが室町時代の造立で、高野山のは疾の昔に燒け失せて、金堂のほとりに礎石ばかりを黒く存してゐる。尤もこれも再興の計劃が行はれてゐる相だから、往古の偉容を見る日も遠くあるまいと思はれる。とにかく此の相輪樘と彼の大塔と、當時吾國の密教二大道場に各獨特の塔婆が出現したといふことは注目に値する。

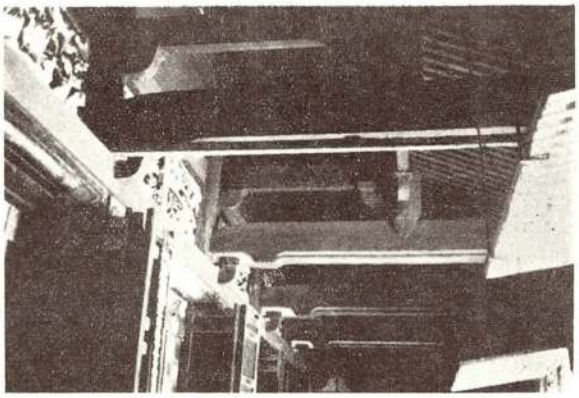
以下延暦寺に於ける國寶建造物二三に就て略記して此項を終る。

大講堂

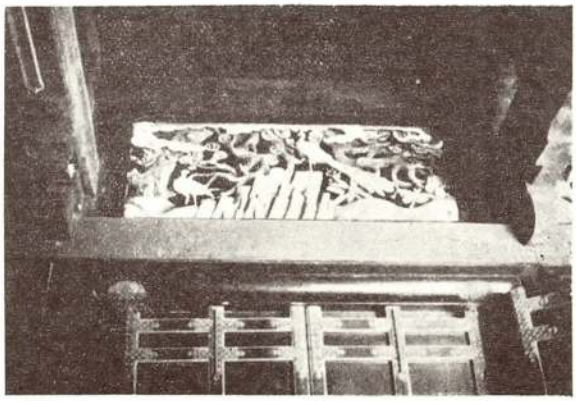
九間六面重層入母屋造銅葺。桁行111尺 梁間69尺 棟高80.4尺、總圓柱四手先の大堂である。特殊な



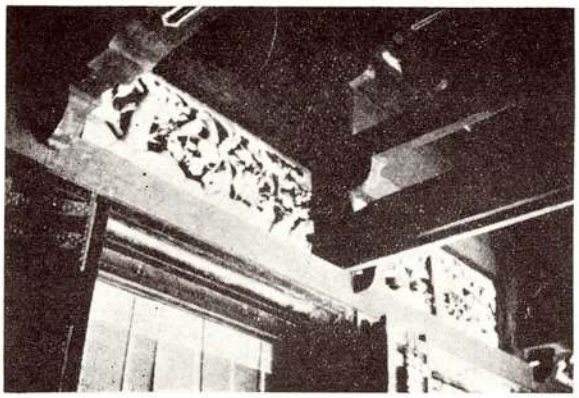
2. 大講堂
唐様に對して部・蟇股等の和様を巧みに調和せしめてゐる。



3. 大講堂外陣
虹梁大瓶束の構架簡潔なり。欄間の大彫刻を見るべし。



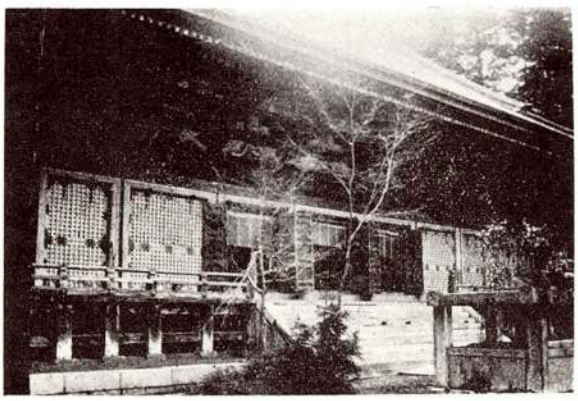
4. 大講堂内外陣境欄間の大彫刻
松に孔雀



5. 大講堂内外陣境欄間の大彫刻
桐に鳳凰、右方は松に鶴



6. 根本二中堂

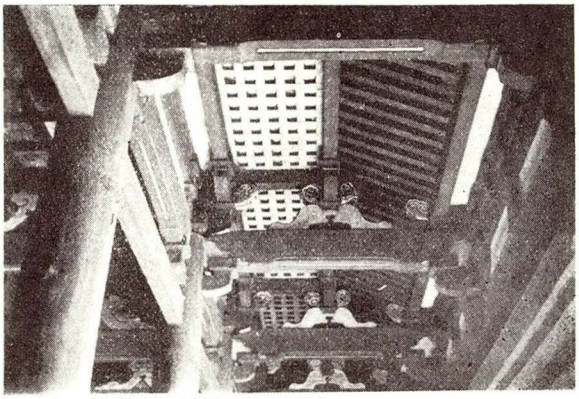


7. 根本中堂
廻廊より見る。斗栱間の蟇股彫刻には様々な意匠を施せるも形としては稍不滿足なり。

ものを除いて普通の堂宇で四手先といふのは珍しい。(大和金峯山寺本堂・同喜光寺金堂・京都教王護國寺金堂は四手先である)。而も唐様の詰組だから甚だ賑やかである。木部は丹塗りであるが、斗栱の間から頭を出してゐる獏頭の彫刻にだけ色々變つた色の取合せで彩色を施してゐる。何分屋根が銅葺で瓦棒が細いのと、下層の軒が淺くて軒付が稍厚すぎるのとがいさゝか物足りなくもないが、全體としては稀に見る堂々たる大建築で、殊に唐様の手法の中に部や蟇股等の和様の要素を一部分取入れて巧みにこなしてゐるのは學ぶべきところと云ひうる。

周圍には椽側をめぐらし、正面中央の三間には兩開扉をつけてゐるが、以前は中央一間だけが棧唐戸であつた。その兩脇は各間部を下げ、背面及び側面には隨所棧唐戸・花頭窓・連子窓を設けてゐる。連子窓が腰貫から下方についてゐるのと、側面及び背面から内陣へ入る入口のところだけ椽側が切れて一段低くなつてゐるのとは、内陣が床を張らないで低くなつてゐるためである。即ち内部は前方深さ二間通りを外陣として床を張つてゐるのに、後面内陣は床を張らず低くて花崗岩の四半敷となつてゐる。

外陣には大虹梁を架し、その中

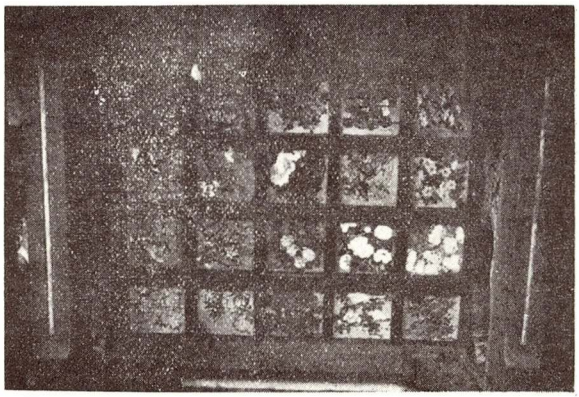


8. 根本中堂外陣構架
3と比較すれば多少年代の差が認められる。

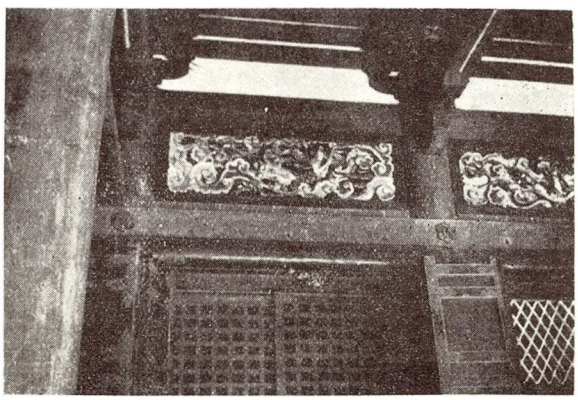
央稍前寄りに大瓶束を立て、束から外方は化粧屋根裏とし、内方は小組格天井となつてゐる。内外陣の境は兩端各一間だけが連子窓で、他はすべて双折兩開棧唐戸、幣軸を廻はし、上の長押と飛貫との間には大欄間を設けて、そこには雄大無比な彫刻を入れてゐる。彫刻は桃山時代から江戸初期にかけて多く行はれた樹花に鳥類を配した美事なもので、向つて左より

牡丹に山鳩、松に孔雀、桐に鳳凰、松に鶴竹と椿を添へる、

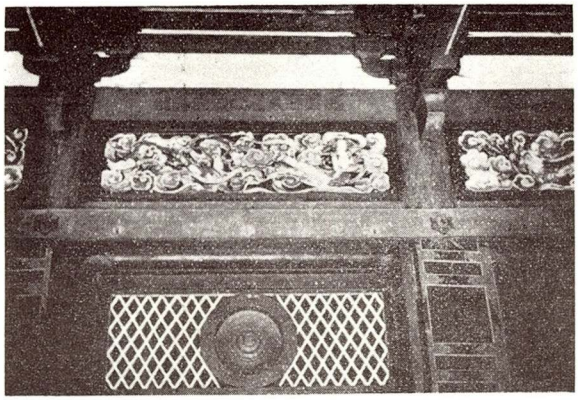
雉に牡丹、松柏に鷹、梅竹に鶏の順になつてゐる。桐に鳳凰・松に孔雀・松柏鷹等は梅に鶯・牡丹に獅子・竹に虎等と共に當時流行してゐた組合せである。一番右端の梅竹鶏に於て、これに松が入れば目出度い松竹梅になるのだが、此頃はまだ松竹梅といふ取合せはあまりはつきりしてゐなかつたらしい。各種の樹花を數多く取扱つた彫刻群、例へば日光東照宮社殿廻廊の蟇股彫刻の如き、其種類數百種もあつて、その中には殆どありとあらゆる植物動物等を取扱ひ組合せてゐるから、その中でも多く用ひられてゐる松や梅や竹から自然に松竹梅の組合せが出來てもよささうであり、出來なければ不思議な位であるのに而もそれが見當らない。尤も天沼博士のお言葉によると或所には梅松竹とか別々



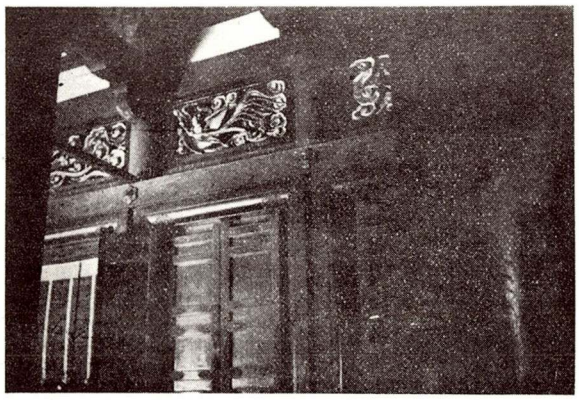
9. 根本中堂外陣上段の格天井
極彩色で四季の百花を描く。



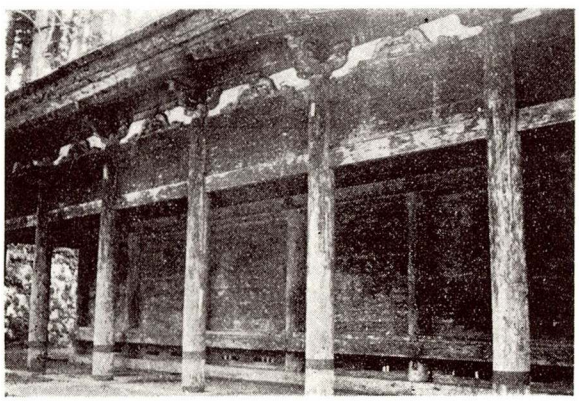
10 根本中堂内外陣境欄間大彫刻
伎樂天人が雲中を飛べるところ。4. 5と比較すれば彫刻に可なりの差が認められる。



11. 根本中堂内外陣境欄間大彫刻
伎樂供養の飛天を現はす。



12. 根本中堂内外陣境欄間大彫刻
迦陵頻伽



13. 根本中堂廻廊外部
複廊の中仕切りに窓なく板で閉されてゐる。

の彫刻として三つ並んでゐるのがある相である。それから少し古い時代にも松竹梅の實例がなくもないが、これ等は偶然出來たもので、竹に虎や牡丹に獅子の様な組合せとは異るものらしい。それはとにかくとして、松柏に鷹や桐に鳳凰などの云はゞ高尚な組合せに對して、梅竹に鶏を配して田家の朝といふ勅題にでもあり相なのどかな情景を現はしてゐるのは面白いことであり、當時建築家が桃山時代の後を承けて、のびのびした氣持で樂しく自由な腕を振つたことが想像せられる。實に此の九面欄間の大彫刻は、桃山直系の雄大華麗な活氣に滿ちた傑作で、而して此雄大な氣風は堂内外の構架構造の至るところに溢れ、その自由奔放な手法は、唐様和様の大膽な混合や軒廻りの異様な彫刻等に遺憾なく現はれてゐるのである。

内陣は列柱によつて中央五間二面が内々陣で、その前が中陣、後ろが後陣とも云ふべき具合に分れ、後陣から左右兩側にかけて化粧屋根裏、中陣及び内々陣は三棟造の様に各別に棟を有する化粧屋根裏で、天井頗る高く、其下方に二重の大虹梁を架け渡して大蟇股を置き、その上にも立派な蟇股様の彫刻がある。

須彌壇は唐様の好例で上下に獨特の繰出しを有してゐるが、その

繰出しの下方の部分だけは石で造られ、それから上は木で出來、中間の羽目には蓮唐草の彫刻が入れてあり、そこの東には鬼形彫刻を用ひ、壇の上には逆蓮握蓮の勾欄をめぐらしてゐる。

本講堂の出來たのは天長元年（1108年前）で、天正十二年豊臣秀吉再興、寛永十九年徳川家光改造と傳へられてゐるが、とにかく江戸時代初期のものとしては稀に見る優秀な大建築である。

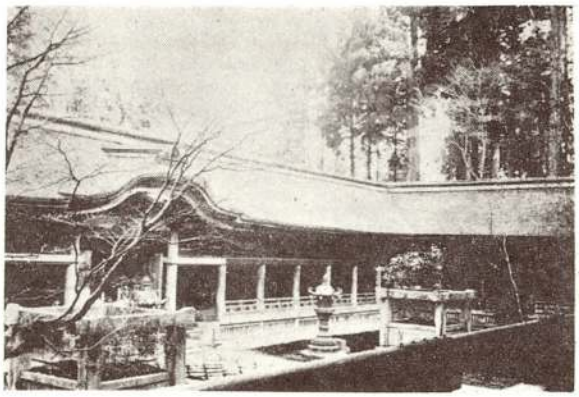
根本中堂

大講堂の東北の一段低地にあつて東面する十一間六面の大堂、單層入母屋造銅葺。總圓柱、三手先軒二重、枓栱間には蟇股及び二ッ枓より變化したと思はれる彫刻を配列してゐる。正面中央三間は双折兩開桟唐戸を吊り、左右間には部を用ひ、正面から側面の一部分にかけて椽側を附してゐる。

内部は深さ二間通りが外陣で床を張り、中央一列の柱を境として外陣は前後二つに分れ、後方の床は前方より一尺餘も高くなつてゐる。天井も隨つて二つに分れ、前面は半ば化粧屋根裏、半ば組入天井で其下には虹梁と板蟇股があり、後方は格天井で各間には菊・牡丹・藤・萩・水仙等四季の百花を描き、天井下には同じく虹梁と板蟇股とがある。蟇股の形はあまり良いとは云はれないが繪は中々よく出來



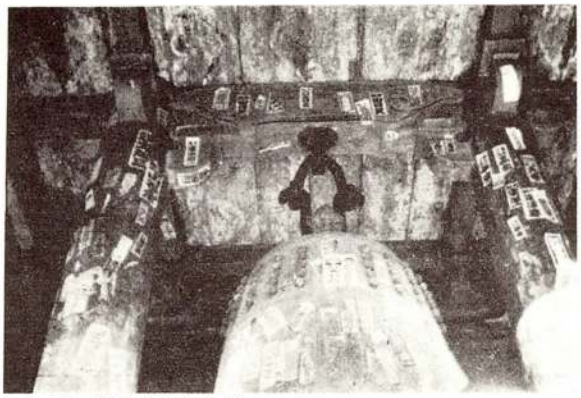
14. 根本中堂廻廊入口
内部より見たるところ。



15. 根本中堂廻廊内側
中堂の椽側より見たところ。



16. 大講堂前の鐘樓
柱が上部で著しく内方に傾いてゐる。



17. 鐘樓內部見上げ
鐘を吊るために柱を二本別に立て虹梁を架してゐる。



18. 大乘戒壇院堂
一見したところ純唐様の様であるが細部に和様手法が案外多く用ひられてゐる。



19. 轉 法 輪 堂
坂の割合下の方から見たところであるが、もう少し上からだと屋根が非常に大きく見える。

てゐる。內外陣の境は十一間共すべて双折兩開棧唐戶をつけ、長押上の欄間には迦陵頻伽や伎樂供養天人が雲中を飛んでゐる大きな彫刻を入れてゐる。

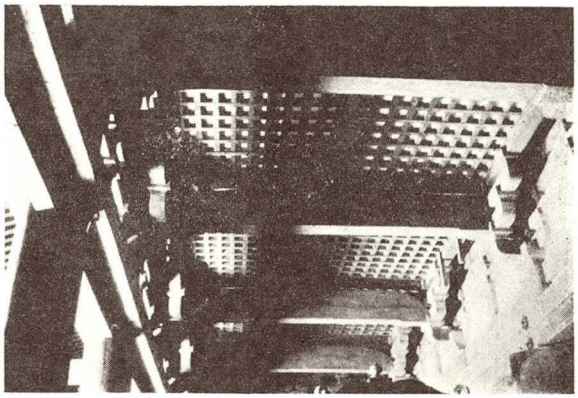
內陣は石敷で外陣の床より七八尺も低く、階段で上下する様に出來、中央九間二面は內々陣で折上小組格天井となり、天井下には大虹梁を架し大板蟇股を置いてゐる。內陣中央後寄りには大須彌檀がある。三段から成り、下は石壇で其上に二重の木壇を築き上に勾欄をめぐらしてゐる。木壇は上下共唐様で、羽目には牡丹唐獅子の立派な彫刻を入れ、殊に上方に附してゐる勾欄は一種の洲濱形を連續した様な實に珍しい意匠のものである。

本堂は大講堂と同じく寛永十九年の建立と云はれてゐるが寛文七年との說もある。而して內外の蟇股や內外陣境の大彫刻の手法には講堂のそれ等に比していささか重いところがあり、或は寛文七年が本當ではないかとも思はれる。

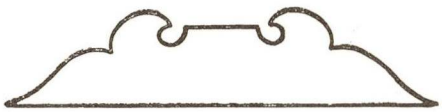
堂の左右から前方にかけて步廊がめぐつてゐる。複廊で正面に唐破風造の入口がある。廊の中仕切は連子窓が普通であるのにこれは板壁で窓がなく、內部が少しも見えない様になつてゐる。枡組間には蟇股があり、例によつて各種の彫刻が附いてゐる。

鐘　樓

大講堂の前左方に建つ。吹放しの屋形式で單層入母屋造柿葺。軒二重、枓栱出組、隨所に蟇股木鼻等相當賑やかに彫刻を附してゐる。四隅に圓柱が立ち、虹梁と頭貫とで上部を固め、且つ隅柱に副へて二本づつ方柱を立ててゐるが、此等柱は上部が著しく內方に傾いてゐる。一體に鐘樓とか手水屋とか比較的大きな屋根を四本柱で支へる形式のものは、安定のために柱上部を幾分內方に傾斜さすものであるが、江戶時代のものは其度合が特に著しい樣である。かゝる意匠は度を過ごすと失敗に終り易いもので、古い時代のものは此點では實に上品で、一寸見ただけでは氣の付かぬ程度に其考へをめぐらしてゐた。

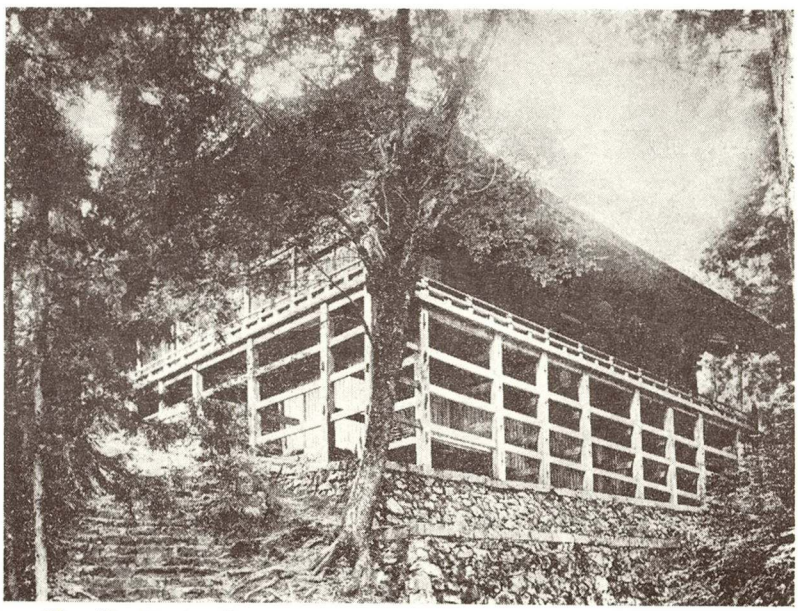


20. 轉法輪堂外陣天井
影でよく見えないが虹梁上の板蟇股の形は鎌倉時代と思へない。



21　轉法輪堂外陣虹梁上の蟇股
下からの見取圖で下部の方は虹梁にけられてよく判らぬが大体こんなものらしい

鐘は普通なら屋根裏の小屋梁から吊り下げる仕掛にするところだが、此處では內部に別に圓柱を二本立てて上に梁を渡しそれに鐘を吊り、梁の上には直ぐ天井を張つてゐる。



22. 橫川中堂
岸に臨んで舞台造となつてゐる。

年代は大講堂と同じく寛永十九年と云はれてゐる。

大乘戒壇院堂

大講堂から西手の一段高いところに在る。五間五面、重層寶形造檜皮葺、頂上に露盤寶珠を上げ、正面上層の軒には唐破風を附けてゐる。枓栱は上下共出三枓で間枓束を備へ、總圓柱、入口は正面に三つ、側面及び背面に各一つあり、双折棧唐戸を吊り、他は板壁で所々に花頭窓を開いてゐる。

慶長年の再建。屋根勾配急で軒先は四隅だけで稍強く反り、而して屋根の流れに沿うては殆ど反りなく、露盤寶珠や唐破風の形などと共に全體として調子稍固く、雄渾の氣に乏しいが、和様と唐様との兩手法を巧みに折衷してゐる手際だけは感心するに足る。即ち此堂は軒の反り具合から花頭窓・上層柱の粽・臺輪等の細部手法は唐様を現はし、麓の園城寺に在る唐様の傑作一切經藏を思はすものがあるが、枓栱・間枓束及び下層柱等は和様で、そしてその兩者の混合が非常にうまく出來てゐる。元來桃山江戸となれば和様唐様といふ區別が曖昧になるのだから、かかる混合は別に問題とするに當らないのであるが、此堂若くは大講堂の場合に於ては和様唐様の間に可なりはつきりとした區別が意識されてゐて、而もその兩者が巧みに調和されてゐるところに見る價値があるのである。

内部は土間で周圍一間通りは化粧屋根裏、繋虹梁を用ひ、中央方三間には石壇を築き上方は格天井となつてゐる。壇は即ち傳教大師相傳の大乘戒壇で當山獨特のものであつたが、今のは當初と餘程趣きが變つてゐる。傳ふるところによれば元の戒壇ははるかに大規模なもので、且つその院堂を中心として講堂や中門廻廊が備つてゐたといふ。若し今のところが元の場所とすれば、現在の地形にはそれ等を想像するだけの廣さはないが、此堂の正面向つて左の方に道を隔てて一段小高い平地が或は講堂のあつた趾で、それ等が丁度今の根本中堂と大講堂との様な關係に建つてゐたのではないかと思はれる。併しもつとよく調べてみないと確かなことは云へないが、一寸感じたまゝを書いてみたのである。

轉　法　輪　堂

西塔の中堂で釋迦堂とも云ふ。一般には釋迦堂といふ名の方がよく通つてゐる。信長に燒かれて後、文祿四年秀吉が麓の三井寺即ち園城寺の金堂を移し建てたものである。七間八面單層入母屋造銅葺。奥行が非常に深いから隨つて屋根の流れが大である。東塔の方から來て道の左右に並ぶ法華常行兩堂の間を拔けると、急に道が下り段となつて此堂の正面に下りる様になつてゐる。その坂道の途中から見ると屋根が無闇に大きくて軸部が有るか無いか判らぬ位小さく見える。叡山奇觀の一つで名物となつてゐる。

柱は全部圓い太柱で枓栱は出組、枓栱間には間枓束を備へ、正面から左右側面へ椽側が廻つてゐるが深さ五間までの所で終りそれから後ろへは椽側はない。

内部は内外陣を通じて周圍一間通りが化粧屋根裏で繋虹梁を有し、他は全部組入天井、天井下には大虹梁が幾條も架してある。前方深さ三間通りの外陣は拭板で床を張り、内外

陣の境は兩脇各一間だけが兩開棧唐戸で、中五間は全部板扉となつてゐる。內陣は漆喰土間で、列柱によつて中陣・內々陣・後陣と分れ頭貫を通じ間枓束を立て、天井高く、虹梁繫虹梁の構架雄大である。

細部として特に目を惹かれるのは外陣に架した大虹梁上の板蟇股で、輪郭といひ肩の卷込みの具合といひ甚だよく出來てゐる。本堂は一般に鎌倉時代の建築と云はれてゐるが、園城寺金堂であつた其前身が鎌倉時代に造られたといふ何かの據りどころがあつてか否かは自分は未だ調べたことがないが、或はも少し古い時代のものではないかとの疑ひがある。蟇股のみでなく、內陣の頭貫や間枓束の調子が何うしても平安時代の方に近い氣がするといふことが自分の二三年前のノートに記してあつたので、先日更に見直したところやはりそんな氣がする。それでいつかもつと詳しく調べてみたいと思つてゐる。

文祿移建の際の手法或はそれ以後の修補の箇所も相當あり、內陣須彌壇なども即ち其一つである。

★

以上の他に尙瑠璃堂と橫川中堂とがあるが、今回は調べる暇がなかつたので次に其大體だけを記す。

瑠　璃　堂

轉法輪堂から西北七八町のところに在り、方三間單層入母屋造檜皮葺、柱には粽あり、臺輪をのせ、枓栱は出組の詰組、棧唐戸・花頭窓を有する唐樣の建築である。年代は室町末期と云はれてゐる。

橫　川　中　堂

根本中堂より北東約一里半。「比叡山名勝記」によれば

> 仁明天皇嘉祥元年慈覺大師圓仁勅を奉じて建立す。本尊は聖觀音左脇士は毘沙門天（慈覺大師作）右脇士は不動明王（佛師明定作）、相傳ふ慈覺大師入唐求法の砌海上風波の難に逢ひ聖觀音を念じて無事なるを得、即ち歸朝の後此堂を建立し屋根の形狀を唐船に擬すと。天正十二年僧亮信勅を奉じて再興す。後慶長九年豐臣秀賴の母堂改造す。現存の建物即ち之なり。桁行六十四尺六寸、梁間八十九尺七寸、軒高十八尺一寸、棟高五十五尺三寸五分、云々

とあり。七間九面單層入母屋造妻入の大堂で椽側をめぐらし、後方は崖に臨んで舞台造となつてゐる。側面から見ると前後に縋破風をつけた珍しい形をしてゐるので、これは篦の日吉神社本殿から暗示を得たものだらうと云はれてゐる。

桃山時代の城郭について

文學博士　大類伸

「桃山時代」とはこれを最廣義に用ふる場合には、近世初期即ち織田信長の覇權獲得から豊臣秀吉の時代を經て、徳川家康・秀忠の二代までも含めた時期を指すのである。今こゝでいふ桃山時代とはもう少し狹い織田・豊臣二氏の時代を總稱したものである。この時期は年數は僅かに三四十年であるが、我が文化のあらゆる方面が中世的なものから近世的なものへ移つた時代、即ち近世的なものが建設された時代として、非常に重要な意義を有する時代である。これを城郭についてみるも亦同樣なことがいひ得るのである。

鎌倉時代の末、元弘・建武以來二百餘年に亙る戰亂の後、國内一統の業が完成され、近世の平和的な時代に入る過渡時代で、政治・軍事・財政・經濟・社會上は勿論、建築・美術・工藝に至るまで著しい變革が起つた時期であつた。

政治界には統一の形勢が大に進んだが、軍事的並に城郭方面にも亦同一傾向の變革が起つて、こゝにも新時代相が明かに觀取されるのである。

第一は軍隊組織の變化である。我が國に武家が起つた初め頃の軍隊組織は家族的なものであつた。即ち主從關係は家族的關係に類似し、臣下は平時は主君の膝下に住し、戰時には之に附隨して出征するといふ具合で、その間の團結は甚だ強く兩者の關係が厚い情誼によつて結ばれて居つたのである。鎌倉時代や室町時代の初期にあつては、此の如き一團は規模が小さく、僅か二三百人位を以て普通とし、その大なるものも上下幾つかの此の如き譜代の情誼關係のものが結合して居つたので、その團結力は固かつたのである。大軍勢はつまり此の如き小團體の集合で、一門の惣領・黨の族頭などといふものが此等を指揮して戰にのぞんだのであるから、全軍の連絡は甚だ不充分で、主將の命令が徹底せず、時には自分の部下だけ率ゐて勝手な進退をした場合も少くなかつた。

小規模な團體が各地に割據してゐる間はそれでもよかつたが、段々此等の間に兼併が行はれ、小は大に合せられるに至つて大きくなつた家では、從來の如く情誼のみを以てしては、新附の大人數を强固な團結たらしめることは出來なくなつた。而も、世態は彌が上にも强固な團結とその最も有効なる活動とを要求したから、軍隊組織に於いては、家族的から隊伍的となり、變革を起さざるを得なくなつたのである。こゝに於いて大領主の强大な權力と嚴重な規則とによつて、之を運用する樣になつた。以前のやうな我儘勝手な小豪族の集團を許さず、主將の方針に從つて臣下は數名の重臣に分屬し、その重臣を寄親（ヨリオヤ）といひ、臣下を寄子（ヨリコ）又は與力（ヨリキ）と呼んで居つた。寄親は戰時には部下の寄子を率ゐて出征するのであ

るが、平時には訴訟・進退其の他のことに就いて寄子の世話人となるのである。もとよりこの寄親(ヨリオヤ)・寄子(ヨリコ)の關係には、まだ家族的要素が少からず殘つて居るけれども、以前の軍隊に比較すれば、遙かに統一的であり、又大規模なものになつたのである。寄親の名稱はその後更に變じて組頭となり、寄子は與力と呼ばれるやうになつた。この制度は寄親・寄子の制度と似て居るけれども、家族的傾向は失はれて、總て規律によつて支配される傾向が著しくなつて居る。つまり軍隊が大規模となつた以上は、これを自由に運用するには以前の如き情誼によつて動かすことが困難である爲、茲に嚴肅な軍法とか條例とかいふものを生じた次第である。この頃の戰爭には抜驅けの功名を禁ずることがよく見えるが、これによつても舊來の不規律我儘な軍隊を規律を以て整へようとした苦心が認められるのである。隊伍によつて組織され、規律によつて束縛された近世的軍隊でなければ、とても秀吉のやうな大規模な戰爭は出來なかつたであらう。是も凡てに規模が大きくなつた時代の要求の結果と見て差支へない。此等の制度と主從觀念の變化と知行制度及び浪人召抱とは又互に密接な關聯を有つて居るのである。

次に築城と最も密接な關係を有する兵器についてみると遠戰用攻擊兵器には前代と同じく弓矢・鐵炮が用ひられたが、就中鐵炮は著しく普及した。殊に中央に勢力を占めた織田氏は最も之を採用し、和泉・近江等にその製造を見た。其他諸大名も競つてこれを手に入れることに苦心し、銃隊を組織し、弓隊と共に軍の先鋒に活動せしめた。又此の期末には大炮が若干用ひられた。慶長・元和の大坂役の如き、寛永十三年の島原役の如き即ちそれである。

近戰用として長柄の槍が流行し、騎馬武者も勿論之を振つたが、それよりも、步卒に之を持たせた密集部隊の隊伍的活動に多く用ひられる樣になつた。この兩者は軍隊組織の變化と相互に密接な關係をもつてゐる。

戰略や戰法も軍隊組織の變化並に武器の變革に伴つて變化した。此等の間には勿論相互的に密接な關係がある。舊來は多く一國一郡の主が互に自己の部下を率ゐて戰爭をしたのであつて、總て小規模であつたから、戰爭が簡單であつた。又準備も不完全であつたから、長期の戰爭に耐へることが出來なかつたし、數箇國・十數箇國に亙つて大軍隊を動かすといふやうなことも甚だ困難であつた。然るに桃山時代の戰爭殊に秀吉や家康の戰爭を見ると、非常に大規模で、その戰爭は狹い戰地の一局部に限られたものでなく、廣く數箇國に亙つて居る。殊に注意すべきは糧食の準備に多大の苦心を拂つたことで、この一事を見ても戰爭が永久的性質を帶びて來たことが明かであらう。戰爭の永久化が城郭の利用、發達上に密接な關係があるのは勿論である。

戰術にも著しい變革が起つた。いふまでもなく鐵炮の流行したことが、その一因である。鐵炮の採用されたため戰鬪が團體的となつたことは能く人の知る所である。舊來の個人的戰術は全くこの爲に衰へて、一令の下に多人數が進退駈引する樣になつた。彼の長篠役に

於いて甲州の精鋭な武士が織田氏の銃隊のために射すくめられてしまつた事實は、勇氣を尊ぶ個人的戰術が、規律を主とする團體的戰術に破られたものと見て宜しい。しかし桃山時代の戰術は鐵炮ばかりを主としたものでなく、やはり槍もあれば刀もあり、時には弓さへも用ひられて居る。從つて戰術が團體的になつたことは、單に鐵炮が使用された必然の結果ではない。固より鐵炮の流行が團體的戰術の發達を助けたことは著しいに相違ないが、鐵炮がなくとも當時一般の趨勢は團體的戰術に傾いてゐたのである。若し西洋人に接觸することがなく、從つて鐵炮のことは全く知らなかつたとしても、槍其他の舊式武器のみでも戰術は行はれたに相違ない。要するにこれもやはり戰國末期の時勢に適應して起つた一現象にすぎないのである。

野戰に於いては先づ數町を隔てゝ銃隊の交戰に始り、次いで稍々接近して弓隊の戰となり、更に接近し時機を見計つて、長槍隊の突進に移り、その白兵戰となるや、騎馬隊が出でゝ決戰を試みるにあつたのである。

築城が進歩するに從つて攻城法にも次第に新しい工夫が加へられ、殊に戰爭が大規模になるにつれて、仕寄・水攻等も屢々用ひられる樣になつた。

攻圍軍は此等の方法によつて積極的に破壞すると共に、消極的に城兵の脫出、內外の連絡を絕ち、兵器・糧食の缺乏を來さしめ、且敵の士氣を沮喪せしめて、戰鬪力を減少せしめ若くは降參せしめようとしたのである。

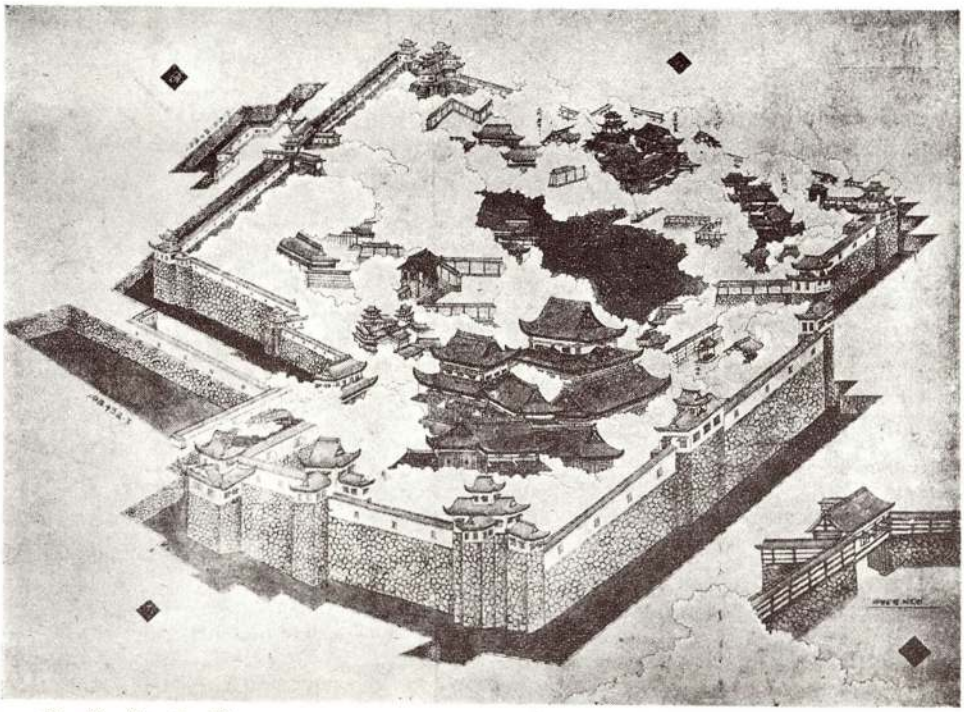
仕寄には種々の方法があるが、その最も簡單なものは棚・條網・鹿柴の類を以て敵の逆襲脫出を押へるものである。もう少し規模が大きくなれば塹濠を堀つてこれに加へ、殊に鐵炮の發達した時代になると、楯・竹束等の補助を以て、電形に塹濠を堀つて敵城に近付き、堀際若くは堀を埋めてそこに築山を設け、城內を射擊したのである。この際城壘上からの射擊をさけるため、廊下樣のものを造り、これによつて土石を運び堀を埋め、更に接近しては、地下道を堀つて敵の櫓や門を崩すのである。

水攻は低濕地にある平城を攻める場合に用ひられた。これは敵城の周圍に土壘をめぐらし、附近の川を堰止め、水をその中に注ぐものである。秀吉は最もこれを得意とし天正十年毛利氏と對戰の際備中高松城に、天正十年織田信雄と對戰の際美濃竹鼻城に、天正十三年雜賀一揆討の際紀伊太田城に、天正十八年北條氏征伐の際武藏忍城に對して行つた。

この水攻の方法は戰が餘程大規模且持久的でなければ出來ないことで、よく秀吉の性質を現してゐる。味方を損ぜぬ樣、孫子の所謂戰はずして勝つ方法として最も巧妙な攻城法といふべきである。

この時期を中心として全國の重要な城郭が相次いで築かれ、その結果技術は急激な進歩を遂げた。

信長及びその關係の城郭の主なるものは清洲・小牧山・岐阜・安土等があり、秀吉及びその關係の城郭としては、大阪・伏見・聚樂等がその代表的のものであり、德川氏の城郭



聚樂第の圖

としては江戸・駿府・名古屋等がある。又この時代には諸國に新興の大諸侯が封ぜられ、各々その居城を築いたから此等にも亦著しいものがあつたのである。

毛利氏の廣嶋城、嶋津氏の鹿兒島城、前田氏の金澤城・高岡城、加藤氏の熊本城、佐竹氏の水戸城、上杉氏の會津若松城、伊達氏の仙台城、小早川氏の三原城・名嶋城、宇喜多氏の岡山城、鍋島氏の佐賀城、蒲生氏の宇都宮城、淺野氏の甲府城、蜂須賀氏の德島城、生駒氏の高松城、長曾我部氏の浦戸城、小西氏の宇土城、毛利氏の久留米城、宮部氏の鳥取城等はその主なるものである。

此等は何れも當時に於ける大諸侯の居城として新しい時代に適する様に經營せられたものである。其他稍後れては、彦根・姫路・名古屋・津・高田・白河等も新築或は增修された。即ち城郭として後世名あるものは大抵この期の築造にかゝるものである。

次に其等の中代表的なものについて若干述べてみよう。先づ近世覇者の先驅をなした織田氏について述べると、勃興當時の信長の目標は京都に入り、中央を占據して覇を天下に唱へるにあつたから、清洲から出發して次第に京都に近い方へその本據を移したのであつた。

その最後の據城は近江の安土城であり、その前の據城は美濃の岐阜城であつた。この兩者の共通的特色は高い獨立の山に據り、中腹及び山麓に邸宅を配置し、四周を俯瞰し得る一大綜合的城郭であつたことである。



築 樂 第 屛 風

岐阜城は前に美濃の豪族であつた齋藤氏の居た所であるが、安土城は新に築城したものである。信長の永祿十二年の入京が近世史の第一頁であるとしたならば、その安土築城は近世城郭史の第一頁こいふことが出來ると思ふ。この城は固より天下の中心として全國に號令しようとした彼の事業の窮極の據點ではなく、むしろ全國一統過程上の一足溜りにすぎなかつたものである。即ち一方では京都を押へるとともに一方濃尾・伊勢・東海・北國地方經略鎭撫の據點であり、更に中國へ進出する出發點としたものである。

信長は事業の中途で斃れたが、その事業はやがて秀吉によつて繼承大成された如く、近世の城郭に於ける安土城の位置も全くそれに等しいものである。就中建築の上でこれをみるならば、壯大華麗なる天守閣の起されたことは全く劃期的なものであつた。又その內外に諸國の大豪族の邸宅を集め、新に城下町を經營した如き、その地が琵琶湖に接して、水運上の要地であつた如き、近世的諸大城郭の典型的先驅をなすとみてよいものである。

安土城は今も滋賀縣蒲生郡安土村にその址が殘つてゐるが、山頂の高さ海拔199米の山頂以下山腹を利用したもので、地形は勿論、石垣の大部分も明かにこれを認めることが出來るのである。築城は天正四年正月に起り、四月にはその勢力範圍たる三河・尾張・美濃・伊勢・越前・若狹其他畿內諸國から工事を助けしめ、又京都・奈良・堺等から各種の工匠を招き寄せた。かくて比較的短時日の間に天守までも完成したのである。この天守は後に秀吉が大阪城に建てたものゝ手本ともなつたもので、當時としては前古未曾有の壯大華麗なものであつた樣である。惜しい哉僅か五六年の後天正十年明智光秀の變に際し、建設者

信長と運命を共にしてしまつたが、幸にも天正六年頃の有様が『信長記』の「安土山御天主之次第」などによつて傳へられてゐる。この記事によつて、現存する名古屋城或は姫路城の天守と比較しつゝ實地を想像するならば、その悌をしのぶことが出來る。



聚樂城櫓（屏風の一部）

安土山御天主の次第

石ぐらの高さ十二間餘なり。石ぐらの内を一重、土藏に御用、是より七重なり。二重め。石ぐらの上、廣さ北南へ二十間、西東へ十七間、高さ十六間。ま中有柱數二百四本立。木柱長さ八間、ふとさ一尺五寸、六寸、四方木。御座敷之内、悉布を著せ黒漆也。西十二疊敷、墨繪に梅の御繪を狩野永德に被仰付かかせられ候。何れも、下より上迄、御座敷の内、御繪所悉金也。同間之内、御書院有。是には遠寺晩鐘之景色かゝせられ候。其前に、ぼんさんをおかせられ、次四でう敷、御棚に鳩の御繪をかかせられ候。又十二疊敷をかゝせられ、則鷲の間と申也。又其次八疊敷、奥四でう敷に雉子子を愛する所あり。南又十二疊布、唐之儒者達をかゝせられ又八でう敷有。東十二疊敷、次三でう布、其次八でう敷、御膳搨申所也。又其次八疊敷、是又御膳搨申所也。六でう敷御南戸。又六疊敷、何れも御繪所金也。北の方御土藏有。其次御座敷、二十六でう敷、御南戸也。西六疊敷、次十でう敷、又其次十でう敷、同十二疊敷、御南戸の數七つあり。此下に金灯爐をおかせられたり。三重め。十二疊敷、花鳥の御繪有。則花鳥の間と申也。別に一段四疊敷御座の間有。同花鳥の御繪有。次南八疊敷、賢人の間に、ひようたんより駒の出たる所有。東麝香の間八疊敷、十二でう敷、御門の上、次八でう敷、呂洞賓と申仙人、並ぶるつの圖有。北二十疊敷、駒の牧の御繪有。次十二でう敷、西王母の御繪有。西御繪はなし。御緣二段廣緣也。二十四でう敷の御物置の御南戸有。口に八でう敷の御座敷在之。柱數百四十六本立也。四重め。西十二間に、岩に色々木を被遊。則岩の間と申也。次西八疊敷に龍虎之戰有。南十二間色々かゝせられ竹の間と申。次十二疊間に松計を色々被遊、則松の間と申。東八疊敷、北に鳳凰かゝせらる。次八疊敷、きよゆう耳をあらへば、そうほ牛を率而歸所、兩人の出たる故郷の體。次御小座布七疊敷、でい計にて御繪はなし。北十二疊敷、是にも御繪はなし。次十二疊敷、此内西二間の所にてまりの木被遊。次は疊敷庭子の景氣則御鷹の間と申也。柱數九十三本立。五重め。御繪はなし。南北の破風口に四疊半の御座敷兩方に有。二屋の段と申也。六重め。八角四間有。外柱は朱也。内柱は皆金也。釋門十大弟子等。尺尊成道御說法之次第。御緣輪には餓鬼共鬼共かゝせられ、御緣輪のはた板には、しやちほこひれうをかゝせられ、高欄ぎぼしほり物有。上七重め。三間四方。御座敷の内皆金也。そとがは是又金也。四方の内柱には上龍下龍。天井には天人御影向之所。御座敷の内には三皇五帝、孔門十哲、商山四皓、七賢等をかゝせられ、ひうち、ほうちやく數十二つかせられ、狹門戸鐵也。數六十餘有。皆黒漆也。御座敷内外柱總て漆にて布を著せさせられ其上皆黒漆也。上一重のかなぐは、後藤平四郎仕候。京田舍衆手を盡し申也。



黒田屏風繪圖

二重めより京のたい阿彌かなぐ也。御大工岡部又右衛門、漆師首刑部、白金屋の御大工宮西遊左衛門、瓦唐人の一觀に被仰付奈良衆燒申也。御普請森三郎左衛門

次に信長の覇業をついだ桃山時代の中心人物たる豊臣秀吉の築城を概觀するに彼はこの方面に於いても近世の開拓者乃至建設者といふことが出來る。彼は全日本の中央に位し、當時の武將中の傑物織田信長に附屬して、各地の攻城・守城に從事し、築城に關しては豊富な經驗を有して居つたに相違ないが、殊に好んで城郭を利用したのである。彼は性磊落濶達な一面、非常に周到な注意を以て充分準備をした上事を行ひ、その事業に恒久性を有して居つた。それ故彼の戰爭には持久戰の性質を有するものが多いのである。これがその大をなさしめた一因であるが、この性質に伴つて前述の如く築城が非常に利用されたのであつた。

彼の特色ある築城利用を概括すれば、

1. 市府の築城　　2. 邸宅の築城

の兩者である。前者は大阪城・伏見城乃至京都の御土居であり、後者は聚樂城である。

既にのべた如く、桃山時代は萬事革新の時代で、從來主として軍事的性質を有した城郭が、政治的・經濟的性質を多分に有するに至り、諸侯の居邸ともなり、商賣繁昌の市府ともなつたのである。而してこの時代を統率したものは秀吉であるから、秀吉の爲す所は大抵諸侯の範となつたのであつた。

大阪城は前に本願寺の據つた所で、天正八年織田信長との戰爭後その城郭を明け渡したが、秀吉が織田氏の勢力を繼承するに及んで大規模な城郭を建設したのである。この城は淀川下流の低濕地へ突出した台地の北端を利用したもので、この水を要害として南と西へ諸郭を配置したものである。而して城郭の最高所に天守閣を建て、內外を金箔で裝飾した。更にこの城で注意すべき點は、市街を包む相當廣い圍郭を有してゐたことである。その周廻約三里であつて、當時これに匹敵するものは、秀吉と天下分け目の合戰をやつた北條氏の相模小田原城のみであつた。大阪城築城以後、諸國の大名が皆これにならつて城下市街を包む總郭を設けるものが非常に多くなつたのである。この點に於いても秀吉の大阪築城は城郭史上注意すべきものである。市街を保護するに城郭を以てし、城郭と市府とを一致せしめようとしたことは秀吉の城郭に對する永久的設備を重視した點と關聯して著しい特徵といふべきであらう。この事實は更に文祿三年に築かれた山城の伏見城に於てもみることが出來る。

次に注意すべきは京都の「御土居」である。これは秀吉が、天正十九年に當時の京都の市街の外緣に沿うて設けた壘濠である。これは幕末まで殆ど完全に保存されてゐたが、明治以後漸次破壞されて、今は僅かに上賀茂から鷹ケ峰に至る間、北野神社境內、大將軍から下、東寺の邊に至るまでの間に處々斷續して殘つてゐるにすぎない。延長六里に近いものである。これ亦市府の築城設備をしたもので、秀吉の築城乃至桃山時代の築城を考へる上に重要な意義を有するものである。

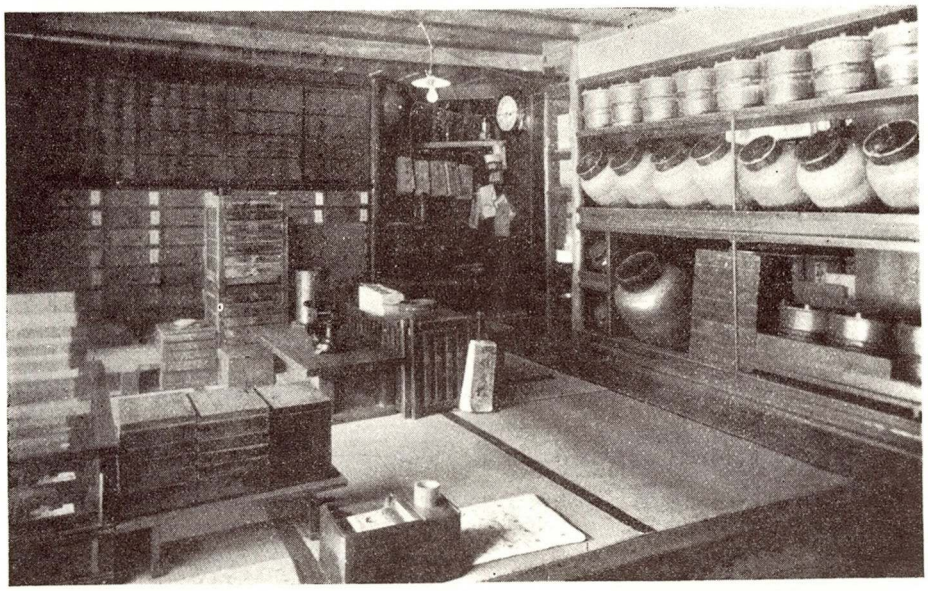
聚樂第は築城設備を有した秀吉の邸宅で、一に聚樂城とも稱せられたものである。相當長い期間の戰國時代を經て、不安な世態が續いたので、有力者は常に武裝をゆるがせにすることが出來ず、邸宅をも城郭化しなければならなかつた　それと同時に秀吉の好んだ、而して時代の生んだ豪壯華麗な建築美術工藝が、この城郭式邸宅にも合體してあらはれた。即ち桃山時代にあつては、大きな大名の出現、又時代の風潮によつて、從來はむしろ戰時の素朴簡素な臨時建築物であつた城郭建築が、永久化し、宮殿化し、非常に美術的なものとなつたのであつて、それが桃山時代の城郭の一特徵といふべきであらう。聚樂城・伏見城の如きはその最も代表的なものであつたのである。

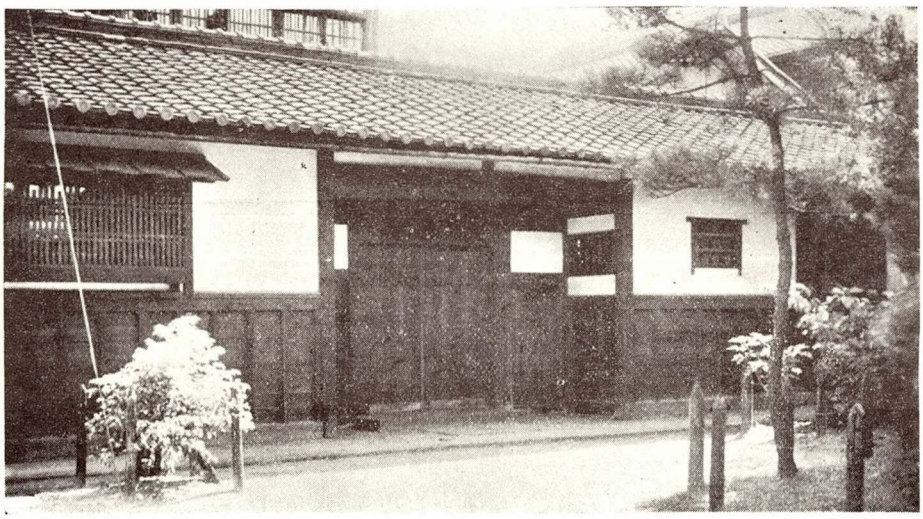
以上述べた所は、本邦武家時代の城郭を大成せしめるに至つた中世から近世へかけてこの城郭と直接間接關係のあつた方面の變革、並にその代表的な築城の性質を概觀したものである。城郭の種類と建築各部の構造等については、これを他の機會に讓ることとする。



大黒屋菓子舗

（大阪西區南堀江一番町）
建築の時代は大して古いものでないと思はれるが昔の大阪の小賣店の店構へ・器物・調度の一々に到るまで舊態を存してゐる點で甚だ珍らしいものであります。惜しい事には早晩都計の道路擴張の犧牲になる運命にあります。（本間乙彦氏談）





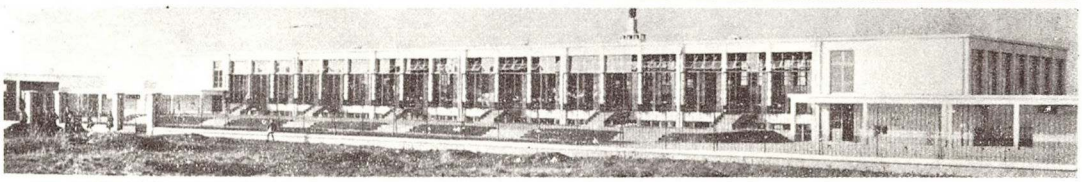
門長屋

間口8間76、奥行2間21、元與力門長屋を保存の意味に於て曩に造幣局倶樂部庭園内に存置してあつたものを大正14年1月修繕を施した。今は劍道柔道の道場として使つてゐる屋根瓦の役ものは何れも蔦の定紋で藤堂屋敷の遺物らしい。（中村角之助氏記）

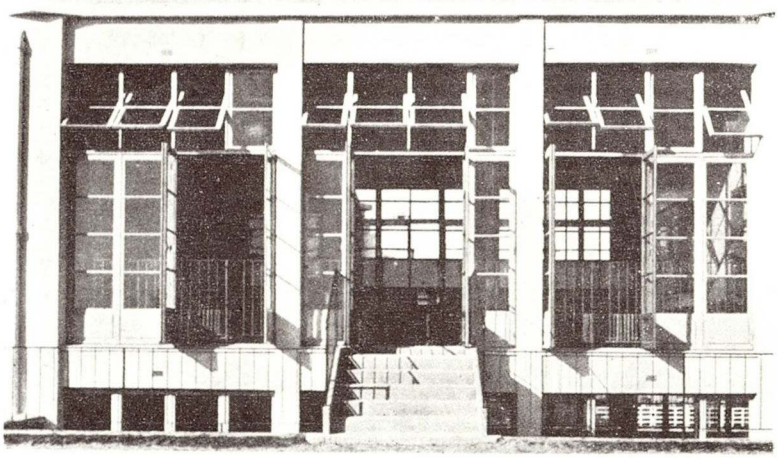
1



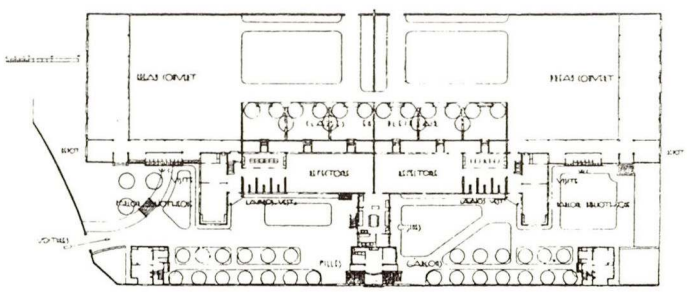
2



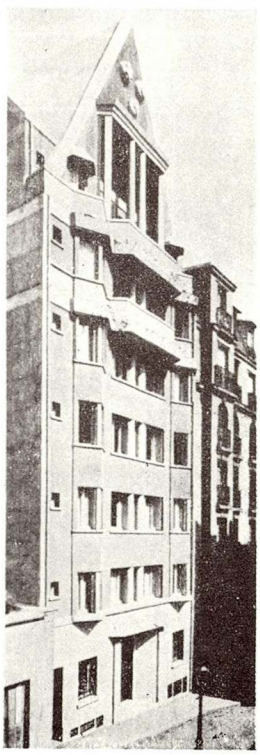
3



4



5



1~4 佛蘭西 **サン・クアンタン・野天學校** 設計 ジアメン・デゴレー氏

5 佛蘭西 巴里・**オモンド**街學生館 設計 ボール・ツールノン氏

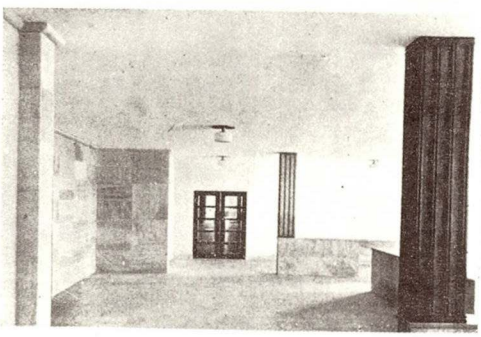
1



2



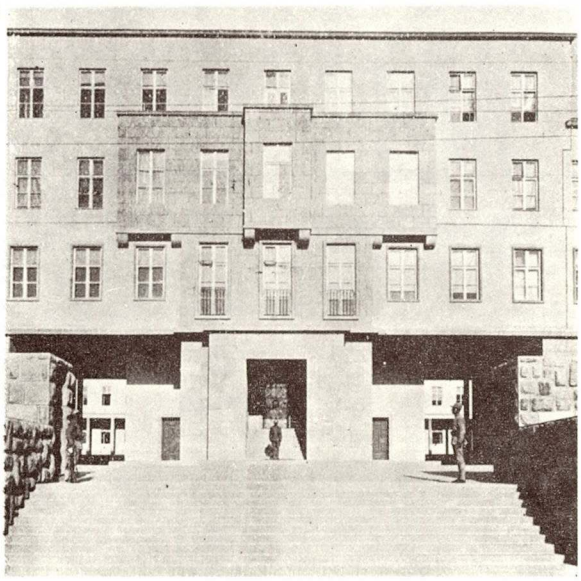
3



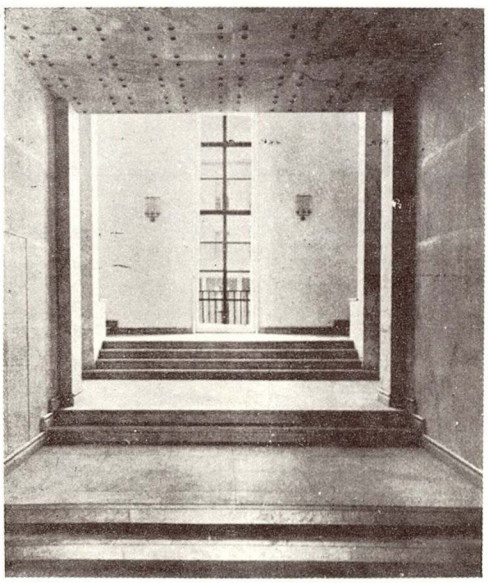
4



5



6



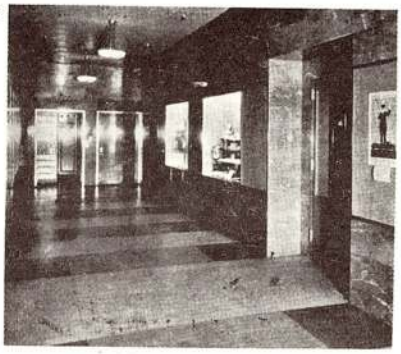
1~3 アンカラ・土耳古參謀本部
4~6 アンカラ・土耳古陸軍省

設計 クレーメンス・ホルツマイスター氏(埃)

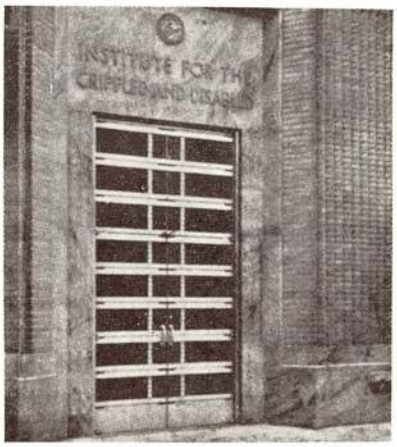
1



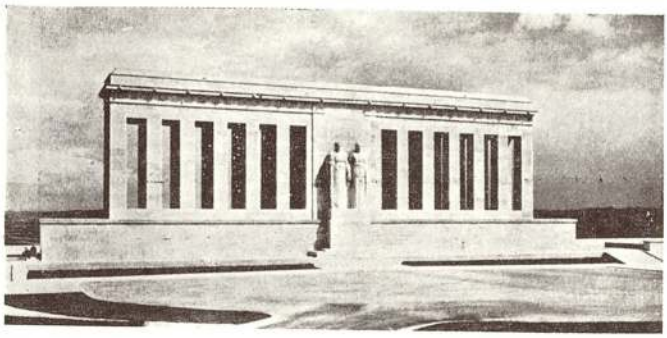
2



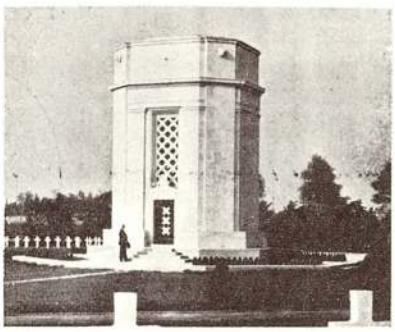
3



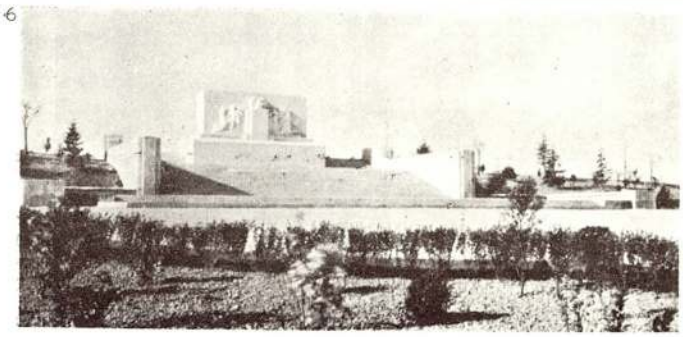
4



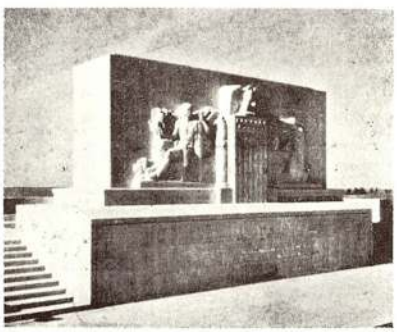
5



6



7

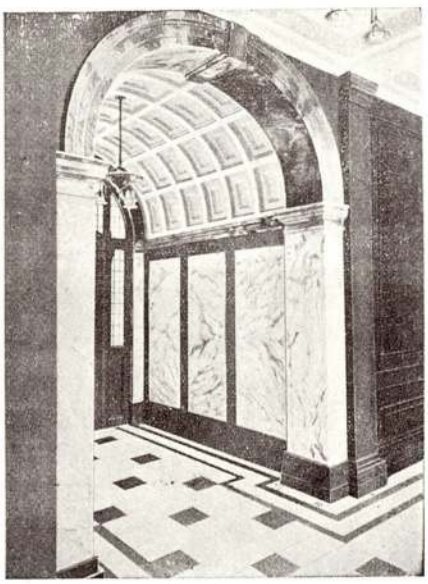


1～3 米國 紐育不具者協會　設計 フオールヒー＋グルミン＋ウチーカー諸氏

4～7 米國 大戰記念碑　設計 パウル・クレツト氏



DUNLOP RUBBER FLOORING





弊社製ゴム床敷は既に數多の官衙、會社、汽船並に諸家庭に敷込まれ、快適なる其の感じは御使用家各位の御滿足御賞讃を得つゝあります。御必要に應じ何時にても社員を派し詳細に亘り御要求事項を御説明申上げます。

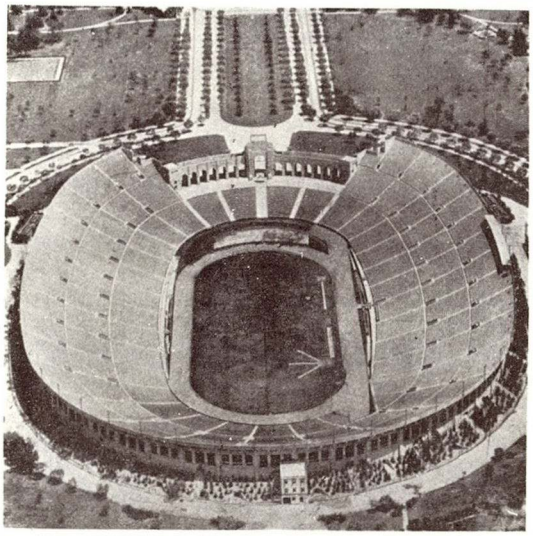
神戸市脇之濱
ダンロップ護謨（極東）株式會社
各地出張所

ダンロップ護謨床敷

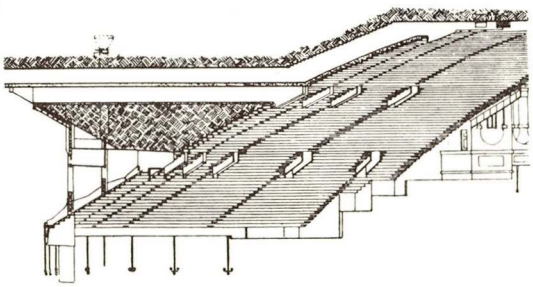
1



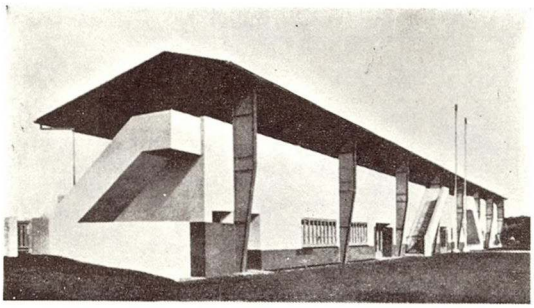
2



3



4



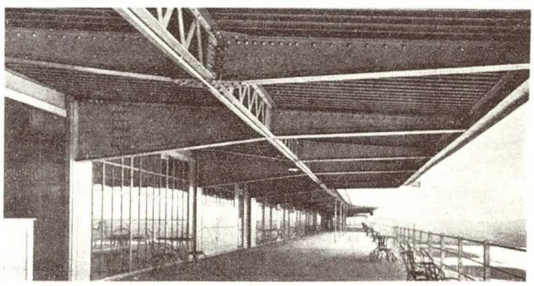
6



5



7



1~3 **ロス・アンゼロス・オリンピック競技場** 設計 バーキンソン氏
4~5 **アルクマール・運動公園の競技場** 設計 ヤン・ウイルス氏
6~7 **アムステルダム・オリンピック競技場** 設計 ヤン・ウイルス氏

庭園の設計と施工

この技術と特長！

庭園の設計と施工は最も新らしき、"造園學を應用して古き經驗と研究を凝らした、弊園獨特の設計と施工は、經濟的に實用的に眞に皆さんの戸外休養所としての御要求は完全に具備して居ます。

造園樹木の大栽培場を有つて各樹木を多く栽培して居ますから、主要造園材料たる、樹木が最も安く良い品が使へます從つて造園費用が尠くて完備した立派な庭園を造る事が出來るのです

この二拍子揃つた獨持の持前と特長、この魅力こそは……斷然他の追從を許しません。

「造園案內贈呈す」

兵庫縣川邊郡山本

金岡養樹園

庭園工務部

電話池田一〇〇三番

（順路阪急電車山本驛下車一丁）

養樹園に生産される品と販賣品

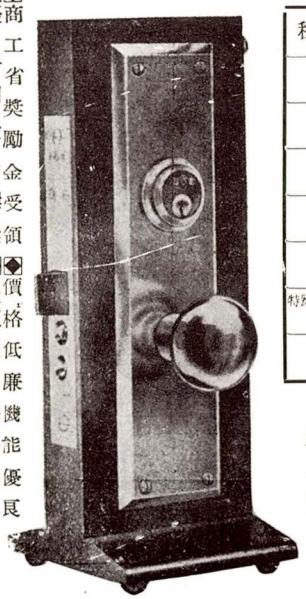
庭園用樹　街路並木
果樹苗木　觀賞樹木
花卉球根　種子
農藝器具　農用藥品

カタログ無代進呈

純國產日金印シリンダー錠

シリンダー錠の種類及寸法

種類	ケース 長	ケース 巾	ケース 深	バツクセット		フロント 長	フロント 巾
501	145m/m	92m/m	29m/m	63m/m	2½″	203m/m	32m/m 1¼″
502	〃	94m/m	19m/m	67m/m	2⅜″	〃	25m/m 1″
503	106m/m	70m/m	16m/m	50.5m/m	2″	148m/m	22m/m ⅞″
504	145m/m	94m/m	19m/m	67m/m	2⅜″	203m/m	25m/m 1″
505	〃	92m/m	20m/m	63m/m	2½″	〃	32m/m 1¼″
特殊安全裝置 506	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
1002	108m/m	86m/m	19m/m	〃	〃	152m/m	25m/m 1″



◆商工省奬勵金受領◆價格低廉機能優良◆優良國產品撰奬◆至便至利安全無比



特徵及用途

◆合鍵絕無、盜難除完全生命財產の安全無類◆ボタン一つの作用にて外部よりは鍵無くしては開扉不能なるも內部よりは鍵を用ひずして開扉自由なる故地震火事等の非常時に安全且便利至極◆貸事務室、アパートメント、ホテル、住宅玄關、應接室用として絕好必須◆不體裁なる棒鍵に代ふるに優美高雅なるニツケル製鍵となる◆五〇四號は特殊裝置を施し安全の上にも更に安全の構造となつて居りますから重要玄關用として天鵞絨の編音マスター鍵は御希望に應じます

本社　大阪市西淀川區大仁東二丁目
電話土佐堀(44)五八五番二八五〇番
五八六番四一〇六番

出張所　東京市丸ノ內有樂町報知ビル
電話丸ノ內(23)四九七二番
三六〇四番

日本金具株式會社

談　話　室

梁上の君子

玉置豊次郎

漢の陳寔、太丘の長に除せらる。夜盜あり、室に入り、梁上に上る。寔ひそかに見て、子孫を呼び起し、之を誡めて曰く、それ人の不善は本性にあらず、習によるものなり、此の梁上の君子是なりと。

晩春の候である。とても眠むい。床に入つてウッウッとしたかしない中に裏門にけたゝましいベルの音がした。今頃人の訪ねて來る時間でもない何か異變があつたに違ひないと察せられた。

やゝ暫くして女中が警官が來られたと云つて來た。裏の長屋の一軒へ泥棒が入つた。この家の庭へ逃げたに違ひないから庭を搜索して呉れと云ふことである。

人事でない。寢巻の裾をからげて樫の棒を握りしめ、懐中電燈を持つて庭へ出て見た。木立の繁る中は懐中電燈位では中々見透せない。日頃自慢の庭石が人の形に見えたりして氣持ちのよいものではない。がどうもいないらしい。

その中裏の長屋で人聲がした。切り戸を開けて覗いて見ると提燈を吊げた人が五六人居る。「どうしました」と掛聲かけてそこへ行く。矢張「あなたの庭へ逃げたらしい」と云ふ。段々話を聞いて見ると泥棒の正體を見た人はないらしい。唯近來よくこの界隈に泥棒が入る。そしてこの長屋にも時節柄空家があつて、近所から物騒がられて居た折柄である。たまたまその晩長屋の一軒で天井裏をドシンドシンと人の歩く音がした。とても鼠や猫の足音と違ふ。人にしても餘程大男に違ひない天井裏をあちこち歩き廻つたと云ふのだ。

それと前後して大阪の大新聞に見出し三段抜きの殺傷事件が起つた。ある家へ强盜が入つた。そしてそこの家人を殺傷した。直ちに警官の大活動となつた。家内を隈なく搜索すると便所の壁に血痕が附着して居る。直ぐさま便所の天井裏を覗くと果せるかな犯人が蹲居して居る。二人の警官は天井裏へ躍り上つた。犯人は中々縛につかない。そこで三人大格闘の末とらまへたと云ふのである

この二つの話は至極ありふれて居る。事件としては全くマーケットフオーム物である。然し乍らよく考へたら眉唾物だ。先の裏の長屋へ泥棒の入つた時、大男が天井裏をドンドン歩き廻つたと云ふことを聞くなりこれなら安心、そこで「被害がなくて何より結構でした」と見舞を云つて直ぐ歸つて高枕で寢た。

一體全體日本の貸家建築物の天井板の構造が三人の格闘に耐え得られるかどうかは建築家だつたら皆知つて居るに違ひない。

手傳職に天井裏の掃除をさしたら、天井板を渡つたと見えて、坪何百圓とかのものを踏みやぶつて大騒動を起したことを聞いて居る。

梁上の君子は讀めるが、天井裏の君子は讀めぬ世間は案外インチキだ。

小住宅の設計について

松室重光

本誌六月號所載の小住宅設計概要書及其圖案は專門家に示さるゝのが本意でないと存じますが、若し之を廣く公衆に知らしめ様とせらるゝならば其邊の考へが表現せられてあつて欲しいと思ひます。即ち民衆に對する住宅の說明なり圖案として實際的參考の價値あらしむる爲にはもつと懇切鄭寧に委曲をつくされて正しき建築智識の一部が得られる様に記述せられたかつたのです。

近頃專門的でない雜誌等に益々多く表現せらるゝ住宅の記事内容などに比して、專門的なる本誌の此内容は決して充實したものとは申されぬのを遺憾といたします。

で、此の概要書を仕様書でない、單なる設計の說明的記述と見てゆくと、第一に此頃實際的な問題として大分やかましくなつて來て居る米突法と浸交渉である點に氣がつきます。

悉くの大さは皆本邦固有の尺度で表示せられてをります。思ふに之は米突法の場合ならば只單に換算をすればよいと言ふ位に、極めて輕く取扱はれてゐるのでせうが私は不滿を表します。

此米突法の使用に關しましては、懸賞圖案の批判中に言及して置きましたから此處には再說いた

しませぬが、換算は畢竟換算で、それ以上に何物もなく、從つて米突法の長所は少しも發揮せられていないと言ふことだけを附言してをきます。

就中重要なる柱間の寸法等の記入を欠いてゐる點は必要に應じて適當の數字を嵌めさへすればよいと言ふ樣にも取れますが、此數字を記入して見ると臺所廻りなどに議すべき點が段々と多く生じて來ますから、之は必ず數字記入の上徹底的な調査をなしたる上全く遺憾のない範圍となすべきであつたと思ひます。

即ち平面圖で見ると柱間は6尺1間を基準として計算せられて居りますから關東方面ならばいざ知らず、關西地方でこんな狹苦しい家を建てる人はない。之は實際世間との交渉現狀や傳統を忘れた案であつて、言ふ迄もなく便所廻りなど最も狹苦しいので何の改善にもなつてゐない。旣に一劃の敷地内に獨立して一軒の家を造るものとして、稍智識階級の爲にする家ならこんな取扱ひ方を受けるものとすれば之以下のものはどんなであらう。恐らく慘として見るに堪えないものが考へられるのではなからうか。

庭の廣さも必要に相違ないが本邦風住宅の長所としての緣側（第一案）すら滿足でないのは如何したものでせうか。

「プラン」の是非は後にも申す通りですから多くは言ひませぬが此位の建物ではまだまだ形式上の問題よりは實用上の効果が重要視せらるべきは勿論でありますから、先づ基準の寸法からして考へ直すべきではありませんか。而して其處で實際必要の限度を最も正確に考慮して見たらよいでしやうと思ふ。

第二に建築材料を頗る簡單に局限して取扱はれてゐますが、之は實際の使用を考へると其使途範圍と種類の選擇に地方的にも自由性あらしめたいと考へます。例へば土臺に檜とありますが東北地方では檜は無い。「ひば」です。之は乾濕腐蝕に對して安全なる材料であればよい筈であるから、特に法規で限定せらるゝ地方を除くの外は爾く狹義な記載方はせぬ方がよい樣であります。

同じ意味ともう一つ强度方面から見ての米栂材の使用は如何なるものでしやうか。一体に米國材は本邦産材に比して强度から見てどれ丈の長所がありませうか。考へると米栂材の如き今日の我邦の經濟事情から見ても決して、有利に合理的な使用の出來るものとは思はれません。

更に木材につきて床柱、床框、落掛なども記載せられて居ますが、是等の構造上の重要性なき部分の材料は第二義のものとして茲處には揭げずとも宜しいのではありませんか。

それよりも遙に重大事は材料の寸法として市場現在の稱呼が其儘用ひられてゐる點であります。之は今日の業界では話にならぬ程混亂狀態に墮してゐる事を知るべきであります。板一枚についても内地材と北海材と紅松と米杉とに區分せられ同じ稱呼の下に其寸法が違ふ。同じ4分板に2分3厘より2分迄の差があり1寸板が8分から6分6厘迄、8分板が6分から4分8厘迄猶6分板は3分3厘から3分迄の厚さに不同がありますから稱呼其儘の取扱ひは亂暴であります。

上にあげた數字は木材正量取引實施事項として大阪、京都、兵庫、滋賀、奈良、和歌山、三重、德島の近畿中心地帶の業者間に於て本年四月一日より實施するとの申合せによるものでありますが事實は之よりも一層混亂狀態にあるのでありまして製材業者は使用者の注文によりて便宜な厚さとなし、而して其稱呼は變へないのであります。

ですから協會の範例として制定しやうと言ふ住宅の數字や說明に漠然と此稱呼を用ふるのは甚だ危險であると云ふ事が知れませう。

第四には稍根本的な問題となりますが、此住宅も又我等の希望する所の一般民衆的のものでなくて小「ブル」階級に用ひらるゝものゝ樣に考へらるゝ點であります。

圖案では見られませんが洋間の天井云々の言葉もありますが、苟しくも洋間の一室も造り得らるゝ程の資力ある人達には此委員會などで特に力を入れて其利便を計る要がないと考へます。從つて私は住宅委員會の仕事を實際的に最少限の住宅として取扱ふ事に極限してほしい。勿論本誌所載の中村君の最少住宅は、矢張り建築遊戲の一方面に映寫せらるゝ程度のもので今日の國情から見て決してぴつたりと適合してゐるものとは思ひませんから、斯種の「インテリ」階級の虛榮滿足の資料を除外したる全く民衆的なものゝ展開として見せて欲しいのであります。

ですから本案も又結構でありますが不幸にして之を下層階級の物となし得ません爲此以上の注文は差控へる方が當然と思ひます。

編輯後記

▷鄉土建築なる言葉は誰が創めたのか明らかにしないが、少なくとも新らしい言葉である、新時代の言葉である、而も何となく耳ざわりのよい懐しい響きを持つてゐる。確かに民衆意識が生じてからの言葉である鄉土、土地や生活を背景として生れた建物で、民俗的の色深い所にその特徴を持つ、必ずしも政治、勢力、時代等に關興しない。

▷建築に限らず總てのものに二つの潮流がある、一は貴族的で、一は民衆的である、他に上手物下手物で區別されることもあるそれは相互に異つた基礎に、異つた意味で各其の存在を主張する。前者の見掛けの大きさ、誇らしさ、華かさに較べて、後者は實用的であり、質素であり、其上稚氣を帶びてゐて正直であるだけ親しみがある。所謂鄉土建築は後者に屬してゐる。實用的であるだけに直ぐに變更せられる。破棄せられ易い。時勢の嵐は絶へず吹きすさむ。そこの岩影、かしこの木陰に辛じて片影を遺こすに過ぎない、それさへ日一日とその存續は危まれつゝ。

▷吾が建築と社會が毎年慣例として鄉土建築を特輯して早や四年になる。何等の保護もなく時と世の流れ去つて行くものを、現物保存は敢て望み得なくとも、せめて文獻にでも寫眞にでも、殘しておきたいとの願望に　小範圍で且貧弱乍ら、得難い記錄となつて後世から珍重されるのを樂しみに精進して來た。後年の雜誌編輯關係者にもこの存續を特に御賴みしたい、尙又會員諸賢にも常に材料の供給に關心を御願する。

▷本號特輯材料は先年より持越しのものが大分あつた。造幣局、泉布觀に就いては一昨年だつたか、造幣局に創建當時の圖面が秘藏されてゐるのを聞き込むだ。圖面は全部暑中休暇を利用して學生に謄寫して貰ひ又一方古い寫眞を蒐集した。本號にはそのほんの極一少部分を載せた、解說は同所の中村角之助氏に願つた、尙元市民博物館長堀居佐五郎氏の說も取り交ぜた。

▷住友鰻谷舊本邸內の洋館は無住で隨分荒れ果てゝゐたのが、本年に入つて修理がなつた、寫眞は昨春撮影したものである。いつぞや先年物故した畫家の小出楢重氏が、あれを鄉土資料の展覽會場に充てたら全く理想的だとの話があつたのを想ひ起こす。

▷神戸元居留地の建物調査の意見は可成り以前から方々であつた樣である。それが仲々實現しない內にどしどしと古い建物は減じて行く。偶々岡崎ビル改築に舊建物を寫しておいたのがあつたので載せることにした。これがあの中の優秀なものとか代表的なものとか云ふ意味ではない。いはゞ死馬の骨となすに過ぎない、元居留地の調査の一日も早く實行せられんことを祈る。

▷鴻池の別邸は昔の富豪の下屋敷として僅に殘つたよい實例である。それも聞けば街路擴張で今に如何なる運命に遭遇するやら同記事に就ては、江崎政忠氏に一方ならぬ御盡力に與つた、誌上で謝意を表します、本號に鴻池住友と昔の大阪の二大富豪の邸が入つた、偶然とは云ひ乍ら不思議である。

▷本陣の建物も追々と影をひそめる。助松の本陣は先きに敎化委員會が調査になつたものである。延曆寺の記事は此の春大會に際して、現地講演を御願した京大の藤原氏が新に起稿されたものである。最後の大類博士の桃山時代の城廓に就いては實は先月號の大阪城天守閣に入れるべく御願したのがはからずも本月號に讓つたもので、權威者の論文として本誌を飾るに足る。

▷炎熱の巷に諸賢の健闘と健康を祈る。

（高橋）

社團法人 日本建築協會役員及委員 （昭和七年）

役員

會長　安實一　銅雄
副會長　郎吉知信一　則助正治郎　清吉實郎　衛吉郎知　則吉郎郎　安二一　良郎男　重夫二次　一治吾　信雄郎三　一郎郎　忠助八　清三吾　吉二平　正吾
監事　主主主主主主主　主編編編　評同同同

社團法人 日本建築協會創立滿十五年記念事業委員會委員（昭和七年七月現在）

創立滿十五年記念事業局

局長 片岡安

總務部

部長 池田實

庶務係

係長 富士岡重一
委員 伊東宗太郎
同 小笠原朗
同 小川陽吉
同 大原芳知
同 岡部顯則
同 高橋榮治
同 津田敏雄
同 鳥井信
同 中山榮太郎
同 松井清之助
同 增田清
同 森本藤吉
同 呼子正

宣傳係

係長 高橋榮治
委員 岡田孝男
同 河合貞一郎
同 片岡長參
同 增田清
同 横濱勉

財務係

係長 岡部顯則
委員 大林賢四郎
同 籠田定憲
同 設樂貞雄
同 清水榮二
同 竹腰健造
同 波江悌夫
同 中澤誠一郎
同 松井清之助
同 山脇友三郎
同 八木盛二
同 呼子正

會計係

係長 松井清之助
委員 小笠原朗
同 岡部顯則
同 德政金吾
同 光安梶之助

住宅博覽會部

委員長 武田五一
副委員長 萩野壯一郎
同 安井武雄
幹事 今林彥太郎
同 小川安一郎
同 芝田知重
同 坪井誠一
同 德政金吾
同 古塚正治
同 增山新平
同 村野藤吾
委員 有山福重郎
同 芦田政一
同 飯高達夫
同 岡本新次郎
同 岡部巖
同 籠田定憲
同 加藤誠二
同 加藤善吉
同 木村寬一
同 久保田廉
同 久保田筆雄
同 小西一良
同 澁谷五郎
同 須藤隼人
同 鈴木末尾
同 鳥井信
同 波江悌夫
同 中島智喜
同 中村義雄
同 西田儀太郎
同 西村辰次郎
同 伴野貞三
同 藤井厚二
同 藤木正一
同 松本儀八
同 松丸盛一郎
同 南信
同 森本藤吉
同 山脇友三郎
同 八木盛二
同 保田虎太郎
擔當常務 小川陽吉
同 鳥井信
同 森本藤吉

展覽會部

委員長 宗兵藏
副委員長 坪井誠一
同 安井武雄
幹事 淺野金藏
同 浦英之助
同 加藤善吉
同 酒井勇三郎
同 篠原太郎
同 須川廉太郎
同 瀧澤眞弓
同 中西六郎
同 永山美樹
同 姬野武
同 山由祇平
委員 池田谷久吉
同 伊東恒治
同 折居滿壽介
同 古宇田實
同 阪井米吉
同 白石登喜男
同 末澤周次
同 永澤毅一
同 日高胖
同 平野彌助
同 藤井厚二
同 村上武
擔當常務 大原芳知
同 岡部顯則

講演會部

委員 河盛益太郎
同 古宇田實
同 津田敏雄
同 增田清
同 吉田信武
同 渡部圭吾
擔當常務 中山榮太郎

見學部

委員長 松室重光
幹事 久保田廉
同 小西一良
同 伴野貞三
同 樋口辰太郎
委員 設樂貞雄
同 竹腰健造
擔當常務 呼子正

出版部

委員長 藤井厚二
委員 石川純一郎
同 落藤藤吉
同 篠原太郎
同 新名種夫
同 瀧澤眞弓
同 古塚正治
同 村野藤吾
擔當常務 高橋榮治

會館部

委員長 波江悌夫
幹事 中澤誠一郎
同 山脇友三郎
委員 今林彥太郎
同 阪井米吉
同 野村一郎
同 松井貴太郎
擔當常務 森本藤吉

祝賀會部

委員長 小笠原朗
幹事 岩尾保衛
同 兒玉廣太郎
同 佐藤正次郎
委員 小寺彌一
同 堀田猷次郎
同 牧野忠
擔當常務 伊東宗太郎

會　　報

役　員　會

常　務　會

時　　昭和7年7月4日午後5時30分——同9時30分

所　　建築倶樂部

出席者　理事　池田　監事　小笠原　主記　伊東　小川　鳥井　富士岡　主計　岡部　呼子　編輯　高橋　森本

議　事
1. 7月例會に關する件
1. 滿15年記念事業局總務部内の各係の會合に關する件
1. 展覽會準備委員2名增員方の件
1. 住宅博委員7名增員方の件
1. 住宅懸賞圖案審査員依囑方の件
1. 昭和7年度豫算に關する件
1. 雜誌交換の件

報　告
1. 敎化委員會より古建築實地調査結果書面報告
1. 請負契約書及工事請負規程改正に關する件
1. 紋章及賞牌に關する報告
1. 博覽會に關する經過報告
1. 展覽會に關する經過報告
1. 建築倶樂部狀況報告
1. 本年第1回會計檢査終了報告
1. 會員詮衡

常　務　會

時　　昭和7年7月18日午後5時30分——同7時30分

所　　建築倶樂部

出席者　理事　片岡　池田　武田　監事　津田　主記　伊東　小川　鳥井　富士岡　主計　松井　呼子　編輯　森本

議　事
1. 香川縣明善高等女學校長より創立十五周年記念豪所展覽會開催(10月22, 3, 4日)に付出品方依頼の件
1. 建築學會建築展覽會委員長より第六回建築展覽會開催に付會誌にて紹介方依頼の件
1. 建築學會外二會に對し記念事業並懸賞募集に付會誌に依り宣傳方依頼の件
1. 日本ポルトランドセメント業技術會より例會開催に付議事日程及講演に關し照會の件
1. 綠ケ丘住宅博顧問等選定の件
1. 京都市工業研究所より申越し雜誌寄贈方の件
1. 會費滯納者處置に關する件
1. 委員1名增加依囑方の件(材料委員)
1. 委員增加依囑方の件(住宅博委員)
1. 土木建築界の業務調査に關する件

報　告
1. 衛生陶器の標準寸法に付調査報告
1. 東洋リノリウム株式會社工場見學擧行報告
1. 設備委員會委員報告
1. 小川久市氏より法制委員辭退の件
1. 木子七郎氏より記念事業見學準備委員辭退の件
1. 7月例會準備報告
1. 6月分會計報告
1. 創立滿15年記念事業豫算編成報告
1. 住宅博覽會經過報告
1. 會員詮衡

委　員　會

法制委員會

時　　7月20日午後6時40分——同10時

所　　建築倶樂部

出席者　委員長　今林　幹事　坪井　委員　伊藤　北垣　新名　吉田　石川　工藤　武田　松久保

記　事
1. 先般來數回の會合に依り研究を續け漸く終了したる建築工事請負規程の改正案に付本夕は再度逐條的に第一條より更めて審議を始め別紙の通修正して改正案となすことに決定したり(別紙略)

材料委員會

時　　7月7日午後6時30分——同8時30分

所　建築倶樂部
出席者　委員長　松室　幹事　須川
委員　阪井　境　高松　塙　福田　山中　須賀　伴
記　事　1. 衛生陶器標準寸法に付別紙の通の成案を得たる旨を第三分科より報告ありたるに付協議の結果會長宛に報告書を提出することを可決す

材料委員見學會

時　7月21日午後1時——同9時
見　學　東洋リノリウム株式會社伊丹工場
出席者　委員長　松室　幹事　小西　須川
委員　阪井　境　高岡　塙　平野
記　事　1. 午後1時一同建築倶樂部に集合、リノリウム會社々員の案内に依り伊丹の同工場に到る
1. 先つ技師長長井杏四郎氏より原料に付一々其の産地を始め製造工程に至る順序の詳細なる説明あり同社最初の製品及び現在の製品との比較陳列其他參考資料、苦心談等興味深く見聞きしたる後工場の見學に移る
1. 長井氏及營業部長吉村寛造氏の案内にて同工場を順次殘す處無く見學し其の間リノリユームの手入法性質等て付種々質問の應答あり實例に依り耐火性なる事の説明も聞き百數十度の乾燥室に迄も這入り最後に多數製品の陳列を見此處に有意義なる見學を終りたり
1. 右見學後同社の接待に依り晩餐を共にしつゝ更に意見の交換をなし後散會せり
1. 後りに當日御案内御説明を下されし長井、吉村兩氏其他社員各位に對しこゝに感謝いたす次第なり

災害强度委員會

時　7月12日午後6時——同9時
所　建築倶樂部
出席者　委員長　渡部　幹事　青柳　落藤　主査　黒田　矢田
委員　井手　川勝　桐本　篠原　谷　中　島　堀田　三浦　山田
記　事　1. 落藤幹事より　鎔接工試驗に付報告をなす
2. 黒田主査より　鎔接指方書案の説明をなす
3. 右案に對する各委員の意見交換をなす

住宅委員會

時　7月11日午後6時——同9時
所　朝日クラブ
出席者　主査　小川　南　委員　岩尾　佐々木　篠崎
記　事　1. 曩に全員に配布せしアパートの平面圖に付種々意見の交換をなす
1. 次で住宅の建築に當り設計者請負業者施主の三者間に於ける從來の非合法的なる諸關係を指摘し將來に對する希望等を論じ後散會せり

會員動靜

入會者

會員

山口久五郎君　市外守口町167（大阪府廳建築課）
瀧野鞆太郎君　神戸市灘區八幡山田65（文部省建築課神戸出張所）
馬淵　信次君　京都市下京區高辻大宮東入杉垣子町659（建築設計）

特別賛助員

加藤　正男君　兵庫縣川邊郡小濱村川面字寶塚19ノ4（東洋リノリユーム會社常務）
深川　重義君　西區土佐堀1ノ8（綠ヶ丘土地建物株式會社々長）
山本　忍君　此花區龜甲町1ノ23（電氣工事請負自營）

普通賛助員

川西梅次郎君　府下豐能郡北豐島村大字北今在家（市役所建築課）
近藤鄕次郎君　兵庫縣武庫郡精道村打出折ノ上10（福島合名會社大阪支店）
西川繁太郎君　府下中河内郡布施町東足代822（竹中工務店）
廣瀨源三郎君　天王寺區茶臼山町5（市役所建築課）

南　廣吉君　京都市上京區鹿山寺通千本東入2丁目湯淺工務所(湯淺工務所)
加藤　越山君　北區堂島中1ノ29聯合通信社內
今井　英雄君　住吉區住吉町1614(關西土地株式會社)
山本　德三君　住吉區北田邊町216(高田工務店)

退　會　者

會　員　宮田　益雄君　濱田　正三君
同(地方在住)　森橋　孝二君
普通賛助員　奥野　敏男君　中村　義實君
瀧村松之助君　山縣　鶴夫君

轉　勤　轉　居

會　員

谷川勝次郎君　東淀川區十三東之町3ノ2
魚田　常治君　東淀川區下新庄町621
野上登米二君　神戸市灘區篠原字丈角399ノ2
井俣　五一君　東成區片江町338
中村　義雄君　住吉區駒川町7ノ12
岡本　茂樹君　兵庫縣武庫郡御影町御影字掛田1181ノ2
山田　太一君　兵庫縣揖保郡旭陽村宮內
木野　寅治君　兵庫縣武庫郡甲東村字門戶230
平井　英一君　府下三島郡吹田町濱田2718
渡部　憲君　住吉區遠里小野町91

會員(地方在住)

神戸　重次君　廣島縣佐伯郡大柿町大君397
久留　弘文君　神奈川縣鎌倉町大町名越2321
戸塚　端君　東京市外玉川村奥澤826

普通賛助員

吉田　榮吉君　兵庫縣武庫郡大庄村東下田354
武井　德松君　北區澤上江町4都島ビル18號
宮前市太郎君　東成區今福町北榮通4,ノ226
遠山　勇吉君　福岡市住吉南新町590ノ1
前田佐太郎君　兵庫縣武庫郡御影町石屋區字左美屋147
衣笠　信夫君　北區東野田町3,32
山田　良次君　東成區上辻町171
佐藤　佐七君　京都市上京區小山堀池町8
田中　新臣君　東淀川區十三東ノ町2,ノ94
佐藤　靜夫君　東京市外澁谷町南平臺46
吉田光太郎君　岩手縣勝澤郡水澤町吉小路24齋藤子爵水澤圖書庫建築場大林組水澤詰所

建築倶樂部室

建築倶樂部は開設以來日尙淺くして諸設備も何かと不充分ではありますが毎日三十人以上多きは五六十人の來館者あり日增しに賑かになりつゝある事を喜んでおります。

最近に於ける倶樂部の狀況及催し事をザツト申上げます

何と云つても碁將棋は終日絶へず人氣を呼んで賑かな事です只今將棋盤二臺と碁盤臺付共四面を揃へてゐます之は皆所の註す限りを試いたし近く碁會も催し度いと思つてゐます之に續いて麻雀一臺あります主として若向の方が多く常に笑聲たへず賑かな事です、新聞雜誌類も相當取揃へております新聞は夕刊もの等六七種土木建築に關するもの五六種週刊朝日サンデーグラフ官報です、雜誌は外國もの建築、畫報、化學、ニュース類等約二十餘種類內地もの土木建築機械工業に關するもの共他を合して四十種餘り此外會員の希望によりまして婦人畫報や演藝畫報等のやわらかものをも若干机上を賑はし會員の方よりも喜んで頂いております尙各方面よりの各種の寄贈圖書や從來持合せの圖書は數百册御座いますお待合せ中の暇つぶし又は御研究の一助ともならばと存じ御參考迄に記しました。

七月二十三日には西式保健治病法に就て大阪西會主事難波精三氏及同會々員小泉澄氏の有益なる保健についての講演會を催しました非常な好評を頂いており將來講演會は種々開催いたし度いと考へております、講演の種類其他之に關し御希望及御注意等御申越しを歡迎いたします。

尙此外俳句、書畫、刀劍研究會其他種々の會も催したいと考へております同好の方を募ります此頃は所謂三伏の酷暑の候で連日九十度以上ですが本クラブは冷房完備で大底七十五度位で誠に涼しくお晝すぎなどは忙中閑を利用されて謠曲の興を味ひ午後の元氣を養はれる方も多くあります何卒精々御利用願ひます。

現在の會員數は約四百名です開設當時三百六十餘名でしたが漸次盛大になつておりますどうか皆樣に於かれましても御知合ひの方々に入會を御勸め下さいます樣序ながらお願ひいたします

幹事一同

武田五一博士還暦祝賀資金募集

京都帝國大學教授武田五一博士本年十一月還暦に達せられ教授の職を去られる事になりました。博士が多年學界並に工藝界に貢献せられた功績は申すに及ばず後輩の指導に盡された功勞も亦偉大なるものと存じます。こゝに於て吾々申し合せ博士の還暦祝賀の微意を表したいと存じ資金の募集を始めました。何卒御賛成下さいまして奮つて御應募下さる様切に希望致します。

昭和七年六月

武田博士還暦記念事業　發起人一同

募集要項

1、醵金高　壹口（金參圓）以上

1、申込及拂込場所　京都帝國大學工學部建築學教室　天沼俊一

振替口座大阪七〇八三四
電話上九八〇（大學内二〇五）
（建築助手室）

1、申込締切期日　昭和七年九月二十五日

1、拂込締切期日　昭和七年九月三十日

1、記念事業

1、博士の意匠にかゝる建築、工藝圖案等の寫眞圖面を蒐錄せる作品集を刊行す。

2、博士の胸像三個を調製して一個を博士に贈呈し他を京都帝國大學、京都高等工藝學校に贈呈す。

3、記念品として畫幅數幅を博士に贈呈す。　其他は委員に御一任下さい。

發起人（五十音順）

一道一助　嚴之造　光八均　韻馬郎　郎治郎　郎郎　吾亭勳郎　一助儀　隆清郎　次郎　郎輔　勉武里三雄
義正誠之　尚鶴重儀　松進太太　順三五治精　三慶之高芳　次善五三民　信東健俊
清尾　兵國　寬正　原多田　井田村室本　本田淵　木橋内　井上田野　野良外　清田源　七友濱
藤本增松　松松松松松前澤水三宮向村村本本元森森八矢矢安築山山横横吉吉鷲渡
一藏三彌與郎雄門諒郎澄靖一彥三喜彥三夫郎一郎夫吉郎三吉作郎雄雄郎一一二郎
兵諒吉　三宮衛　右一眞　純篤正英英讓良太毅五悌貞二丑勝耕次　正太重主直厚三
田木　山弘　藤橋精　龜秀　直源靜　邦岡　哲
石内　中　條重本　屋尾田鳥彌畑澤　西澤野江内田勢部田部　野瀨士間田井　島
關宗添高瀧武武竹棚中近塚土角戸都刀東中中永永波西西能服濱濱坂平廣富武福藤藤
安登助二雄郎吉雄男造省實實顯直一一郎器吉實郎進郎郎順吉雄三市彥郎次藏出貞
之實正三貞秋忠耕三田鄕孝重良功次利大立次之三太太　釘貞貞兵貞三
岡子　乘多　助　木正　新良亮新英田　正　新新
田村戸下田池澤村村宇賀玉西々藤藤野藤藤井谷　川島　水樂樂原田　鳥原城　村野
片金金川神木喜菊北北北古古兒小佐佐佐齋齋酒阪櫛笹澤志清設設椎島霜主新新關
司一藏夫郎潤範太治郎郎實吉二一吉郎郎三靖郎恒清治一郎邦郎助郎雄樋彥郎男一郎
榮俊郁義三　弘忠恒次太　達謙貫新　太　三祥　一正　孝清太喜三之四義駒高二孝秀三
寅東　安賢田
柳沼川川木　上東東藤田　田見井村村　宮宗　谷木　新　三賢　喜　仲
都實田　村安　川倉　野井江熊倉　澤林林平藤田田林野
青天荒荒荒安井伊伊池池市一今今宇植内技小小小大大大大大大大大太岡岡萩

建築學會主催第六回建築展覽會

建築學會に於ては例年の通今秋十一月を期し同會々員の作品を以て第六回建築展覽會を開催することになつた、今回は下記規程の通り內容を二部に分ち第一部は自由出品、第二部は懸賞設計競技として『名勝地に建つ停車場』なる課題のもとに圖案を募集してゐる。

會　期	昭和七年 自十一月一日 至十一月十日
會　場	東京朝日新聞社展覽會場
第一部	自由出品
第二部	懸賞競技應募出品
課　題	名勝地ニ建ツ停車場
賞	金牌、又ハ銀牌及副賞トシテ夫々賞金ヲ贈與ス
審査員	池田讓次、角南隆、高松政雄、西村好時、吉武東里
締　切	昭和七年十月十日正午、建築學會事務所

第六回建築展覽會規程

第一條　本會ノ會期、會場及事務所ハ次ノ如シ

會　期　昭和七年 自十一月一日 至十一月十日

會　場　東京朝日新聞社展覽會場（麹町區數寄屋橋畔）

事務所　建築學會（東京市京橋區北銀座西三ノ一）

第二條　出品ヲ次ノ二部ニ分ツ

第一部　自由出品　　第二部　懸賞競技應募出品

第三條　出品ハ建築學會會員ノ作品ニ限ル、但シ建築展覽會委員會ニ於テ適當ト認メタルモノハ此ノ限リニアラス

第四條　第一部ニ出品スヘキ作品ハ下記ノモノトス

イ、建築圖案
ロ、室內裝飾圖案又ハ作品
ハ、都市計畫、橋梁、庭園ノ圖案
ニ、前各號ニ關係アル工藝品ノ圖案又ハ作品
ホ、前各號ノ寫眞又ハ模型
ヘ、高等工業學校程度以上ノ學校ニ於ケル建築科學生ノ卒業計畫

第一部ノ出品ニ對シテハ審査ヲ行ハス、全部陳列スルヲ原則トナセトモ會場ノ都合ニヨリテハ止ムヲ得ス取捨ヲナスコトアルヘシ

第二部ニ陳列スヘキ作品ハ懸賞競技應募圖案ニシテ鑑査ニ合格シタルモノトス

第五條　第一部出品ニツキ定ムル所次ノ如シ

一、出品ハ陳列ニ適當ナル裝置ヲナスコトヲ要ス

二、出品セントスルモノハ別記書式ノ出品申込書ニヨリ昭和七年九月三十日迄ニ本會事務所ニ申込マルヘシ

三、出品ハ總テ昭和七年十月二十日迄ニ本會事務所ニ到達スル樣差出サルヘシ

四、出品ヲ受理シタルトキハ直チニ預リ證ヲ交付ス

第六條　第二部懸賞募集ニツキ定ムル所次ノ如シ

一、課題　名勝地ニ建ツ停車場

イ、環境　山間景勝ノ地　　ロ、驛ノ種類　汽車又ハ電車ノ通過驛

ハ、敷地　形狀、廣サ其他任意　　ニ、規模其他　本屋總面積（ホームヲ除ク）300乃至600平方米　階數、構造、所要室等任意

二、所要圖面

配置圖縮尺 1/300

平面圖、立面圖（二面以上）斷面圖縮尺各 1/100 並ニ透視圖

用紙ハ大體原圖紙半折大、紙質自由、圖面ノ仕上ハ隨意トシ寸法ハ總テメートル法ニヨル

特ニ說明ヲ要スル事項ハ之ヲ圖面ニ記入スルコト

三、暗　號　應募圖案ニハ署名ニ代フルニ暗號ヲ以テシ別ニ暗號ノミヲ表記セル封筒内ニ應募者ノ暗號、住所氏名ヲ明記セル紙片ヲ封入シ之ヲ添付セラルヘシ

暗號ハ簡單ナル日本文字ニ限ル

四、締切期日　昭和七年十月十日正午迄ニ建築學會事務所ニ提出スルモノトス

五、審査員　池田讓次　角南隆　高松政雄

西村好時　吉武東里　（五十音順）

六、賞　應募圖案ニシテ鑑査ニ合格シタルモノヽ内特ニ優秀ナルモノニ對シテハ金牌又ハ銀牌及副賞トシテ夫々賞金ヲ贈與ス其ノ數ハ審査ノ結果之ヲ定ム

第七條　出品ノ保管ハ最善ノ注意ヲ拂フト雖モ火災其ノ他ノ場合ニ於ケル出品ノ紛失又ハ損害ニ對シテハ一切其ノ責ニ任セス

第八條　出品ノ荷造及運搬ノ費用ハ出品者ノ負擔トス

但シ在京會員以外ノ出品者ノ圖面及寫眞ニ限リ本會ノ費用ヲ以テ返送ス

第九條　出品ノ陳列法及場所ノ區劃等ハ本會ニ於テ之ヲ定ムルモノトス

第十條　陳列シタル出品ハ閉會後ニ非サレハ之ヲ搬出スルコトヲ得ス

第十一條　出品ハ閉會ノ翌日午後五時迄ニ會場ニ於テ受領セラルヘシ

第六回建築展覽會第一部出品申込書

昭和　年　月　日

建築學會御中

出品者　氏名　員

住所

下記ノ通リ第六回建築展覽會規程ニ依リ出品申込ミヲ致シマス

製作者	氏名及會員別	員	
	住所		
	勤務先		
題目			
出品物ノ種類			
數量		寸法	
備考			

暑中お伺申上候

昭和七年盛夏

日本建築協會

新刊紹介

新時代の住宅設備

增山新平著

菊判、クロース裝、pp 667 口繪 17,387 圖

昭和六年九月、大阪・太陽社發行 價 3.90

住宅の書籍は近來可成り出版された。然し多くは平面の問題であり、外觀の研究である。重要な設備に關するものが少ないのは、その關係する範圍が餘りに廣汎に亘る困難さからであらう。增山氏はそこに注目し努力された他の住宅の書と異なつて設備の方面に新らしい觀方をしやうとして、具體的に、懇切に、平易に、而も細密に說明してある、專門家素人の別なく住宅に興味を有するものは座右に置くべき書である。

「建築と社會」定價表

毎月1回1日發行

冊數	定價	郵稅
1冊	50錢	2錢
12冊	6圓	24錢

廣告揭載料金

普通	1頁	1回	15.00
普通	1/2頁	1回	8.00
普通（前附第1頁）	1頁	1回	45.00
普通（前附第2頁）	1頁	1回	40.00
普通（後附第2及最終頁）	1頁	1回	25.00
アート（中揷）	1/2頁	1回	20.00
表紙2	1頁	1回	60.00
表紙3	1頁	1回	45.00
表紙4	1頁	1回	80.00
建築事務所錄	1欄	1回	1.50
（建築關係業者案內）	1欄	1回	5.00

御注文

御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

昭和7年7月27日印刷
昭和7年8月1日發行（第15輯第8號）

發行・編輯 鷹取陽
印刷人 兵庫縣武庫郡今津町浦風56番地
印刷所 大阪活版所 大阪市東區內淡路町1丁目7番地
發行所 社團法人 日本建築協會 大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル 電話長本局(23)4500番(6) 本局(23)5470番(5) 本局(23)5540番(3) 振替口座大阪39.975番
特約販賣店 柳々堂書店 大阪市西區京町堀羽子板橋北 電話土佐堀2440番 振替口座大阪22084番

禁轉載

本誌に揭載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

建築と社會（本特年輯）

1月	高層建築	定價 50錢 稅 2.5錢
2月	朝日ビル・阪急ビル（最近建築研究）	定價 80錢 稅 2.5錢
3月	國防と建築	定價 50錢 稅 2錢
4月	最新世界建築論說	定價 50錢 稅 2.5錢
5月	建築法規	定價 50錢 稅 2錢
6月	實用小住宅	定價 80錢 稅 2.5錢
7月	大阪城天守閣・綿業倶樂部 第四師團司令部廳舍（最新建築研究）	定價 50錢 稅 2.5錢

大阪・北區・朝日ビル 405
振替口座大阪 39975

日本建築協會發行

1	絶版	**住宅懸賞圖案集**	全アート質 四六倍版	定價 壹圓 送料 十二錢
2	初版	**婦人の住宅知識**	四六版	定價 壹圓 送料 十二錢
3	初版	**世界最近建築圖集**	全アート質 四六版	定價 五拾錢 送料 八錢
4	三版	**學校建築圖集**	四六倍版	定價 壹圓 送料 十八錢
5	新刊	**最近建築懸賞圖集**	全アート質 四六倍版	定價 七拾錢 送料 十錢
6	新刊	**市街地建築物法令**	菊半截版	定價 五拾錢 送料 四錢

賣捌 九善本支店
柳々堂書店

社團法人 **日本建築協會發行**

大阪・北區・朝日ビル 405
振替口座大阪 39975

建築と社會第15輯第8號

廣告索引

ア 有山組……8
安藤組大阪支店……8
旭硝子株式會社……37
淺野スレート株式會社……20
淺海商店……26
イ 池田建築事務所……5
池田谷建築事務所……5
池田組……8
池村建築事務所……5
伊藤建築事務所……5
岩元商會建材部……26
エ 榮進社……19
オ 大阪製鎖所エレベーター部……9
大阪窯業セメント株式會社……國際ウラ
大阪伊丹商店……16
大阪橋本組……9
大林組……9
大野製作所……1
大倉土木株式會社大阪出張所……9
小笠原建築事務所……5
奥村重兵衛商店……28
岡部建築事務所……5
岡本工務店……10
置鹽建築事務所……5
オリエンタル化學工業所……13
押谷商店……44
カ 葛野建築事務所……5
金岡養樹園……國際ウラ
龜谷開作商店……10
キ 木下謹三商店……16
桐田商會……35
ク 國枝工務所……5
國藤工務所……42
久保田組……8
熊取谷熊次郎商店……10
コ 鴻池組……10
金剛商會大阪支店……40
サ 佐藤四郎建築事務所……6
佐伯組……11
佐久間パブコ工業株式會社……14
笹岡家具裝飾店……22
三稜社……33
シ 清水榮二建築事務所……6
清水組大阪支店……11
城口研究所大阪支店……39
設樂建築事務所……6
島貿易株式會社建材部……41
ス 須賀商會……31
ゼ 鐵高組……11
ソ 宗建築事務所……6
タ 竹中工務店……11
多田建築事務所……6
ダ ダンロップ護謨株式會社……國際ウラ
煖房同業協會員案內……50
大和工業株式會社……51
大丸……表紙 4
テ 寺井洋家具部……34
ト 朝永建築事務所……6
東洋陶器株式會社……46
東洋リノリユーム株式會社……48
東京建材工業所……45
ナ ナンコク商事株式會社……21
中村建築事務所……6
中川辰藏店……12
內外土木建築材料合資會社……38
南滿鑛業株式會社……30
ニ 日本ペイント株式會社……27
日本建築紙工株式會社大阪支店……33
日本ドアーチエック製作所……23
日本金具株式會社……國際ウラ
日本パイプ製造株式會社……47
西原衛生工業所大阪支店……24
西孫南店建築金物部……25
新田ベニヤ製造所……43
ノ 野村建築事務所……6
野澤幸三郎商店……32
ハ 橋本建築事務所……7
原科建築事務所……7
フ 藤木工務店……12
藤田商會……18
福原工場……40
ベ ベニス工房……34
マ 增田建築事務所……7
眞水三橋建築事務所……7
マルエス工業株式會社……15
ミ 宮島廉夫商店……45
ミナト製作所……30
三井物產株式會社……17
三宅茂雄商店……44
三木商店……22
ム 村上建築事務所……7
モ 森本建築社……12
ヤ 安井建築事務所……7
八木工務所……12
矢橋大理石商店……18
山本窯業商店……42
ヨ 横河工務所……7
横河橋梁製作所……29
米本商店……36
レ 玲光社(木內眞太郎)……36